

へも毎週一度は聞く者なるをと、鐵假面が恨めしく思ふ間も無く牢番仙頭は語を續ぎて『何と  
寢武様を慈悲深い方だとは思はぬか』鐵『ハイ實に慈悲深い、お方です』と答ふる聲も涙に咽び  
容易には咽より出でず、言差して寢臺に撞と倒れ掛るは餘りの絶望に其身を支へ兼ねたるが爲な  
る可し。

仙頭は鐵假面の苦みを面白しと思ふ如く暫し此様を打見やるのみなりしが、頓て聲高く打笑  
ひ『アハ、ハ、ハ、男の癖に泣いて居るな是ほど有難い恩命を受けながら何が其様に悲いか、馬  
鹿な奴だ』鐵假面は暫くして聲を調へ『何も悲しくは有ません、唯だ八年來日の光を見た事が  
有りませんから少しでも夫を見度いと手紙の中へ書込んで置きましたのに』牢『夫は容易に許さ  
れる事では無い、日の光を見せるには窓から外へ出さねば成らぬ、一寸でも外へ出しては何の  
様な事に成らうも知れぬ、夫だから是ばかりは許さぬが好からうと己が書添て上申した、其爲  
だか此事は未だ許されぬ』鐵『エ、夫は餘り』牢『ナニ餘りな事は無い、全體此邊は山の間で日  
の照る事は餘り無い、己とても此鐵臺へ移されてから幾度も日の光を見ぬ程だ、併しナニ猶だ

爾う失望するには及ばぬ、己も何時まで此鐵臺に勤めて居る者では無く永く辛抱する中には手  
柄に依つて最と能い土地へ移される事も有らう、其時には其方を引連れて移るのだから又日の  
目を見られる事にも成らう、夫までは辛抱しろ』

扱は此邪慳なる牢番が他に轉任する事の有とても我身も共に連行かれ生涯此者の手を脱する  
事は出来ざるかと、思ふ心の其の素振に現はれしか牢番仙頭は夫と察せし如く『オ、其方と此  
方とは生涯離れる事は出来ぬ、其方には鐵の假面を被せて有る程だから其方の事を、一人でも  
多くの人へ知れるは寢武様の好まぬ所、夫だから己より外へ決して其方を引渡す事では無く  
己が轉任する時には其方を連たま、轉任するのだ、丁度其方は己の飼つて置く籠の鳥も同じ事、  
先づ生涯お飼殺だ、己は其方へ緋名して白鳥と附て有る尤も是は其方ばかりで無い、最一人寢  
武様から其方同様の囚人を預つて居るのだが、是は己が黒鳥と名附て有る、黒鳥も白鳥も死ま  
では仙頭麻有と云ふ飼主のお荷物だ』と云ひ、己れの比喩の巧なるを誇るが如く又呵々と打笑  
ふは抑も何等の鬼やしき心なるや、鐵假面は餘りの事に返す可き言葉も無く默然として控ゆる

に、仙頭は又四邊を見廻し彼の洗濯物に眼を留め「オ、洗濯に出す者を集て有るな、是等の肉  
疹も手拭も總て政府の費用で當がなれるのだから何も恨む所は有るまい、ドレ一々に檢めた上、  
洗濯に持て行つて遣ふ」斯く云ひて仙頭は彼方に向き一々洗濯物を檢め初めたれば、鐵假面は  
其背後に有りて若しや通信を看破られはせぬかと、假面の中にて顔の色青くなり又白くなれり。

八十九

牢番仙頭は手づから洗濯物の束を解き是は肉疹是は手拭と一々に檢めたる末、別に怪き廉も  
認めぬ如く又束ねて小脇に挟み「好し」と云ひて立上り更に氣遣へる鐵假面に向ひて「では後  
ほどに聖書だけ差入れて遣るから」と云ひ、其儘此室を立出つ外より入口の戸に錠を卸し廊下  
を彼方へと去りたれば、鐵假面は我が計略の見破られざりしを喜ぶ如く「ア、有難い、那の疑  
がひ深い牢番奴に見破られなんだは本統に天の助けだ」と呟きつ空を仰ぎて拜みたり。  
扱て牢番仙頭は此方へと歩み来れば廊下の曲りに控へ待つ二人の兵卒あり、察するに仙頭に

囚人を見廻る度に、若や囚人が絶望の餘り破れかぶれに我へ暴行を加へる事は無きやと氣遣ふ  
より、夫等の時に呼入れて囚人を取鎖める爲め常に我身の護衛として兵卒を隨へ居る事なれど、  
唯だ秘密なる囚人の有様を兵卒などに容易には見せしむ可き次第ならねば、殊更ら廊下の曲り  
に待たせ置ける者と知らる、二人の兵卒は宛も駒犬の如く神妙に待居たるが仙頭の洗濯物を脇  
挟みて来るを見恭々しく立上るに、仙頭は其中の疲形なる一人に向ひ「コレ軍曹、婆取女（原  
名バートルメヤ）は来て居るか」と問ふ、婆取女とは何者の事なるにや最奇妙なる名前なれど軍  
曹は怪しまず平氣の色にて「ハイ今し方洗濯物を以て来て居る様です」と答ふ、扱は洗濯する  
女の名前と見えたり、軍曹は答へながら手を指延べ「ドレ私が其洗濯物を婆取女に渡しませう」  
とて受取らんとするに、仙頭は異様の眼にて軍曹の顔を眺め「ナニ夫に及ばぬ」と味も素氣も  
無く言放ち、自ら先に立て廊下を曲り建物の外へと出しが更に一方の事務室とも云ふ可き所に  
至り二人の兵士を退かせ已れ唯一人其中に歩み入れば、茲に又恭々しく控へ待る一人あり。  
是れが今問ひたる婆取女とやら云へるなる可し、年既に三十をも越したるかと思はる、賤し

き女にして、身には洗晒して見る影も無き仕事着を纏ひ、髪も幾月か櫛を入たる事無き如く埃だらけに亂れたれど、其顔附の孰れかに、殆ど隠すにも隠し難き一種の美しくしき所あり、若し此女を研き上げ都の服を着飾らせなば王侯貴人をも惱殺せんと思はるゝばかりなるも、世に女ほど姿の變る者は無く粧へると粧はぬとは雲泥の違ひにして、殊に見苦き仕事着に身を扮しては絶世の美人も誰れの目にも着かずして終るならん、況して牢番仙頭は唯だ邪慳なる我職務に凝固まれるのみにして其他の事は露ほども目に入らねば、此女の賤き身姿に如何ほどの美しさを包めるにや心附ねど若し意を留て情々見れば、年とても猶ほ見る如く更しにあらで唯だ永々の辛苦の爲め自ら窶れたる迄なるを見破るならん、仙頭は之に向ひ何氣無き調子にて。

「オ、美人茲に居たか、最う洗濯物も済だと見るな」女「ハイ猶だ仕掛たのも有ますが多分仕事の下ります時刻と思まして」仙「ウム夫は好いがコレ婆取女、今し方其方は堀の外で何をして居た」婆取女は少しも騒がず「ハイ乾て有る洗濯物を取込んで居りましたが」仙「イヤ誰が彼所へ洗濯物など乾せと許した」婆「ハイ此山の間は彼所より外に一寸日の照る所が有りませぬ故、

先日鎮臺副長にお願ひ申ましたら乾しても差支へ無いとお許しが出来ました故」仙「副長は馬鹿物だ、更に鎮臺長の己が禁する以後決して堀の近邊へ乾物を仕ては成らぬぞ」。

嚴かに言渡され婆取女は何と返さん言葉も無く只だ唯々として畏むのみ、仙頭は猶ほ婆取女の顔を見詰めて「のみならず彼の所は丁度囚人の窓下に當るのに其方は大きな聲で歌を唱つて居たな」婆取女は故と笑ひ「オホ、仕事するのに歌唱ふのが悪いと仰有りますか日は毎もより暖に照りますし、見渡す四方の山々に花は奇麗に咲きまして、ツイ心まで浮々とした爲めに毎もの癖とて鼻誦を唱ひましたが、囚人の窓下とは心附ず、イエ最う以來は吃、氣を附けます」と最軽く言開けど仙頭は猶ほ不承知の顔附にて「歌も歌、アレは十年ほど前巴里で流行た歌では無いか」婆「ハイ先年所天が巴里の兵營に詰て居ます頃、私も一緒に行き聞覚えに覺えました、仕事しながら毎もアノ歌を誦ひますが今日は番兵に叱られました」仙「ウム、叱つたのが尤もだ、コレ婆取女、今まで其方は何の落度も無く勤めたが此頃は餘り我儘過る様に見える、此後再び己の目に餘る事が有れば其方の所夫アノ軍曹と共に放逐し、再び此土地へ入込めば死刑に處

する事にもするぞ』と眼を光らせて言渡すに、婆取女の青き顔に忽ちハツと血の色を現せしは此叱りを恐れての爲なるか、夫とも深き恨みを蓄へ殆ど制し兼ての爲にもや孰れとも判じ難し、去れど婆取女は頓て思直せし如く最柔かなる言葉に返り『ハイ以來は決してお叱りを受ぬ様に氣を附けますゆゑ、今日の疎勿は幾重にもお許しを願ひまして、ドレ其洗濯物を頂いて歸りませう』と宛も先刻軍曹が手を出せし如く其の細き手を差延るに『オツと爾はさせぬ』と仙頭は小脇に一入の力を入れ『ホウ、大層急いで此洗濯物を受取り度がるナ』と嘲り、又も鋭く婆取女の顔を見るに、婆取女は、今しも紅くなりし頬の色を土よりも青くしつゝも猶ほ心を失はず『ハイ今夜の中に外の洗濯物と一釜に煮立やうかと思ひまして』半『イヤ明朝まで己が預つて置くサア歸つて又明朝来い』

茲に至りて婆取女は何と返事の仕様も無く蹠跟く足並を悟られまじと踏占めく何氣なく退きたれど、若し其の前面に立廻りて顔の色を眺めなば心の中は熱湯を吞まざるゝよりも猶ほ辛きを察するに難からず、抑も此女、何者ぞ、元からの洗濯女にや。

九十

婆取奴が立去りし後に牢番仙頭は首を傾け『ア、何うしても怪しいワイ、事に由ると此洗濯物の中に何か通信を書いて有るな、ドレ室へ歸つて充分に檢めてやらねば成らぬ』斯く呟きて立上りしが、彼れの室と云へるは同じ鐘臺の中に在りて妻子と共に寢起する所なれば茲より餘り遠くも非ず、廊下を三四回曲る丈にて達す可し、彼れ思ひ定めたれば突々と歩み去り、頓て背後の庭に向ひたる我室の戸を開くに中には彼れの妻仙頭夫人、窓の下なる長椅子に身を置きて小聲に物の本を讀みつゝ有り、彼れの入來るを知りて振向もせぬは餘り所夫を敬へる者と思はれず、夫も其筈と云ふ可き歟、此夫人は當時寢武の書記を勤むる出船櫓(原名デフネロー)と云へる人の妻出船櫓夫人の姉にして仙頭よりは身分幾分か上に位し、且は妹出船櫓夫人が目下巴里の朝廷にて持囃され國王にも咫尺し寢武にも最負にせられる丈ありて、妹の周旋や骨折にて仙頭まで幾分か朝廷の受も好く多少の過ち有りとて何の縁故無き人よりは叱らるゝも少けれ

ば、夫が爲に仙頭に向ひて妻の威光甚だ強く、流石の仙頭も我妻ばかりは取挫く事出来ずして動もすれば自ら取ひしがれる事あり、殆ど妻の言葉には背き得ぬ程の次第なりとぞ。

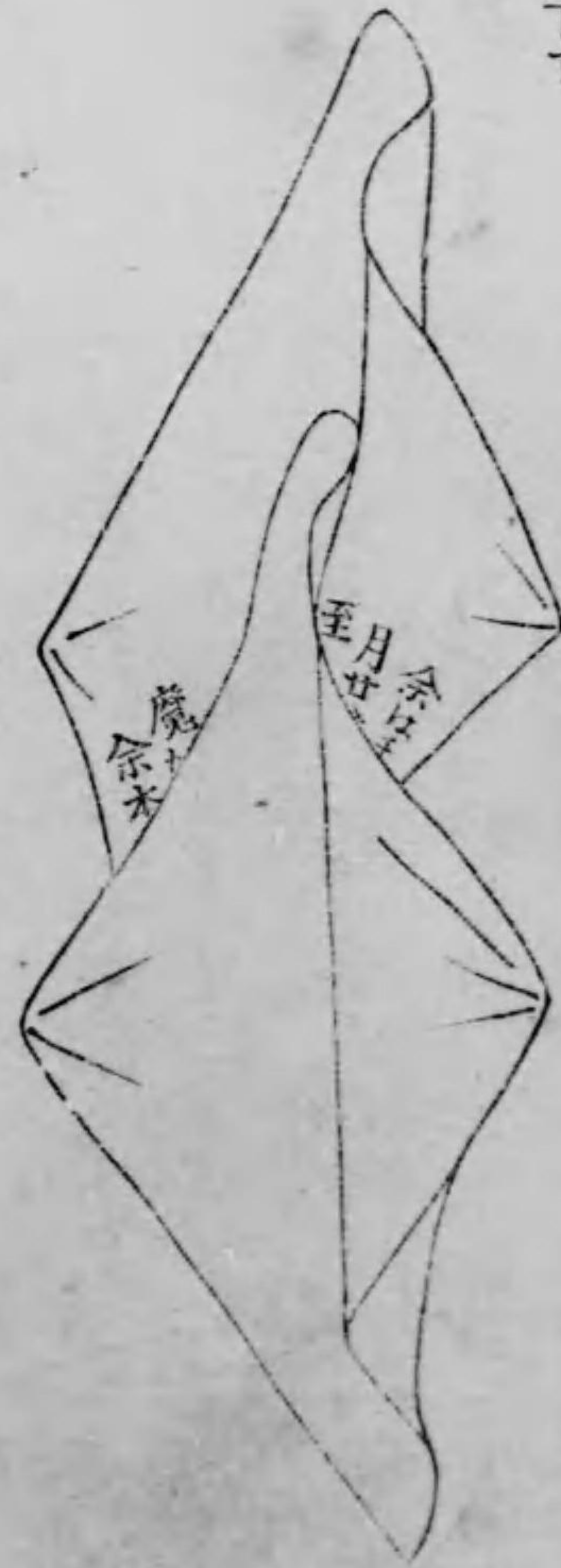
扱も仙頭は本讀める妻の傍らに行き小脇より彼の洗濯物を取りて椅子の上に掛けんとするに妻は横目にチラリと見て『其の汚らしげな布は何ですか』と問ふ、仙頭は妻の機嫌を損ねじと聲を柔らげ『爾う一口に汚らしいと云うて呉れるな、事に由ると此中に和女と己との出世の資本が入つて居るかも知れぬから』出世と聞きて妻は眼を光らせつ更に洗濯物に眼を留て見直したれど、固より囚人の褌衣にして綺麗なる物にあらねば忽ち一層の不興を増し『此布切れが出世の資本とは貴方は先ア何を仰有る、貴方の出世は毎も私の妹出船櫓夫人の世話に由るでは有ませんか、先年ペロームの鐘臺で決死隊の失策に由り貴方が櫓尾から叱られた時なども、早速私が妹へ手紙を遣り寢武様に詫をして貰つた爲め、貴方は此土地へ移されながらも猶ほ鐘臺長で居られるでは有ませんか』仙頭は全く其通りだが猶ほ此布を検めれば此上に又出世の緒口を見出すかも知れぬ、コレ妻己は此土地へ來てから餘り濕氣の深い爲め眼が爛れ今でも充分に直

らぬから、知つての通り夜分讀物などする事を醫者から禁められて居る、夫に又見た所が己の眼で細い文字などは分らぬから和女の良い眼で詳しく此布を検めて呉れ、多分何か認めて有と思ふ』妻は再び本に向ひて今は見向もせず『其様な事は下女にお言附なさいな』

仙頭は飛上りて『コレ〜和女は亂暴な事を云ふ國家の大秘密を包で有る此布を、下女などの手を掛けて堪る者か夫だから和女に頼むのだ、コレサ是れ國家の大秘密だよ、和女が自分で検めて決して恥かしい事無い、却て名譽とも云ふ程だ』と最と大仰に吹立られ、何の事かと怪しむ如く『何の布です、其様な大秘密を包んで居るとは』仙頭『ソレ己が毎も綽名して白鳥々々と云ふアノ鐵假面の褌衣と手拭だよ、是から洗濯に出すのだが何だか外へ通信する様子が有るから茲で能く検めるのだ』妻『オヤ〜囚人の褌衣ですか其様な穢い者を貴方は先ア何うして茲までお持成さつた、エ、聞くも胸が悪い、早く彼方へ遣ておしまい成さい』下けんもほろゝの挨拶なれど仙頭は猶ほ屈せず『一週間に一度づゝ洗濯をするのだから何も夫ほど穢くは無いのだよ、縦や汚いとした所で其穢いのを我慢して検めればこそ手柄にも成ると云ふ者、若し此褌



て上げます者を本統に貴方の様な性質では逆も巴里へ出て貴夫人などの交際は出来ません、貴方は何うしても兵卒以下に生れ附いて居るのです」仙頭は氣忙しく「其様な小言は後にして早く讀んで呉れ是れ後生だ、拜む拜む」下から出て迫立つるに妻は漸く鎮まりて細かき文字を左の如讀くみ下す



— 余は千六百七十三年三月廿八日より  
 手九日に當る者に於て余の本名は：捕へ

とて、妻が猶ほ本名を讀上げぬに仙頭は「好し、好し、夫で好し」と打叫び、宛も猛虎の勢ひにて再び妻の手先に飛附きて又も手拭を引奪り、今度は有無をも云はずして直ちに室の彼方なる煖爐の所へ持行き火の中に投込みたり。

妻は憤りて「本統に貴方は兵卒にも劣ります、夫人を尊敬する事も知らぬ、全くの無頼漢です」と叫べども仙頭は耳にも掛けず、手拭の燃ゆるを見盡して、初めて安心せし如く我に返り、「ア、是で初めて國家の秘密が安全と云ふ者だ、斯うさへすれば彼れの本名は誰も知らぬ」妻は益々癪に障り「爾でせうよ、私にさへ讀まさぬ程だから國家の秘密は安全でせうよ、好う御座いますよ、私を雇人同様に少しも信用成さらぬなら私も此後は其積りで」と猶ほ愚痴をのみ繰返さんとするに仙頭は心も勇み立つ如く其肩を聳やかしつゝ、「爾とも己は誰一人信用せぬ秘密は秘密で何處までも守らねば成らぬのだもの人を信用して堪るものか、己は右の手が若し左の手の秘密を知れば其右の手を切つて仕舞ふ」妻「オヤ、其言葉をお忘れ成さるな、二度と再び囚人の事などを私に相談すると聞ませんよ」仙頭は猶ほ室の中を右左に歩みながら「好いと

も、是から囚人の襦衣は己が水に浸し其上で外へ出す、書いた物の有無に拘はらず一々一旦水で振出さねば安心ならぬ、何うだらう若し此襦衣検めずに婆取女に渡したなら、危い事、危い事今思ふてもゾツトする、併し待てよ此次第を寔武様に上申すれば寔武様も白鳥の油断の成らぬに驚き己の注意に感心するに違ひ無い、爾だ、爾して白鳥めは愈々床の下へ押込めて二度と此様な事の出來ぬ様にせねば成らぬ、太い奴だ、實に深くも計みやがつた、けれども己と云ふ番人が附いて居るから幾等計んでも無益だぞ」と我が思ふ事ばかり口走り、妻には見向きもせぬ程なれば妻は益々腹立たしげに「寔武様に上申するなら猶だ外に突留ねば成らぬ事が有りませう」仙實に綿密に計んだものだ、此計略を見破つたからは榮轉も遠くは無いな」妻「オヤ綿密に計んだとて何が綿密だか貴方は少しも突留め無いでは有りませんか、第一鐵假面が誰に此通信を送る積りか其相手さへ分りますまい」。

此非難には彼れ殆んど慄つとして歩み居し足を留め、悪人の如く口を開きて妻の前に立ち「ア、爾だ、誰に送る爲め書たのか夫が分らぬ、ハテナ夫を見破る何か好い工夫は有るまいか」と

空しく思案に興る體を妻は充分見て取りて「其の工風が有たのに貴方は焼捨たでは有りませんか仙「エ何だと」妻「今の手拭に在た文字を仕まひまで私に讀ませて置けば譯も無く分りましたのに」仙「エ、エ、何だアノ外に猶だ何か書て有たか」妻「有りましたとも、私しの讀んだのは唯初めの四行です猶だ十行ほど細々と認めて有りましたから、自分の名前ばかりで無く是から牢を破る其打合せまで書て有たに極まつて居ます」仙「ヤ、ヤ、夫は實に太變な者を焼捨た」と云ひ仙頭は飛行きて煖爐の戸を開きたるも、總て此邊りはアルプス山の影にして夏の中頃まで煖爐を用ふる習ひとして一刻も火の絶ゆる時なき程なれば今まで燃え残る筈も無し、彼れ失望して「ウ、と呻き殆ど泣き出さぬばかりなるを妻は見遣りて心快げに「是で最う出世の道も塞がりました、夫だから私しを信用せぬと決して得は行きませぬよ」仙頭はグウの音も出ず。

良ありて何か思ひ出せせし如く「今と爲ては仕方が無い、ナニ構はぬ、是から軍曹と其妻婆取女を捕へて詮議する」妻「オヤノ、軍曹と婆取女が怪いと仰有るのですか」仙「爾とも彼等が誰かに頼まれてする業に違ひない、拷問してでも白状させる」妻は最と賢げに「拷問よりもズツ



と好い工風が有るけれど、オ、爾だ貴方は最う私しの云ふ事を信用せぬと云ひましたネ」と勿體を附くるに仙頭は早や既に挫け込み「ナニ爾は云はぬ、教へて呉れコレ何の様な工風が有る全く己が悪かつたよ、謝罪まるから教へて呉れ」と妻の手を取り拜む如くに折入るに、妻は左も有んと機嫌を直し「貴方は白鳥に向つても又婆取女に向ひても、更に氣の附かぬ様にして二人を今まで通り勞はれば、又通信を初めますから其時に見破れば好では有ませんか」此智慧には仙頭も感心し「爾だ、和女は實に剛い者だ、好しく爾しやう、明朝婆取女が来るから柔い言葉掛けて何氣なく此布を渡す事にし爾して油断をさせて置けば、爾だ又何か初めやが」と打喜びて立上り、又孰へか立去らん様子なるにぞ、妻はオヤ是から何所へ行くのですと云ふに仙「白鳥へ聖書を差入れて遣に行くのサ、爾すれば彼れめ己が何も知らぬと思ひ益々氣を許すだらう」と返事しながら立去れり。

九十二

話替りて彼の仙頭に叱られ洗濯物を取上られたる婆取女は踏出、足を踏んで立去りしが、兼て知る近道傳ひに我が家を指して鎮臺の裏手に出れば、幾門の大砲を備へある土堤の下に先程より竹立める一人の兵士あり、婆取女の姿を見るよりも四邊見廻しながら寄来り小聲にて「何うでした、首尾は」と問ふ、婆取女は猶ほ震るへる聲にて「了ないよ、何うも仙頭に見破られた様に思はれる毎も彼れに叱られた事は無いのに、今日は囚人の窓下で歌を謡つたなど云ひ散々に叱られた上句、洗濯物を取上られた明朝渡すから其時に取に來いと云ふ事で」兵士は顔の色を變へ「夫は大變です、洗濯物を拾められ、ば露見するに違ひ無いから貴女は直にお逃なさい、逃てチウリンの彼の宿屋へ潜んでお出なされば私しが後の様子を見届けまして」と言掛くるを皆まで聞ず「七年も八年も辛苦し上句に逃るとして逃られるか能く考へてお見な」兵「だつて貴女今逃ねば朝迄に捕はれます」女「捕はれても仕方が無い、今茲を逃去れば二度と鐵假面に近づく事は出来ぬから、一層捕はれるが増しかも知れぬ最う斯うなれば破れかぶれた、捕はれるまでも最う一度鐵假面と通信する工風を考へ私しは自分一人で、見る、八年の今

日が日まで艱難した私しの辛抱も今日と云ふ今日は盡き果た、斯まで仕しても救れぬ物ならば此上何の様な事を仕ても救れぬに極まつて居るから、逃げて生延る丈け無益と云ふものお前も爾は思はぬか。

眼に一杯涙を湛へ兵士の顔を見上ぐるに兵士も心を動かさぬこと能はず、彼も亦曇れる聲にて『イエ猶だ時が熟せぬと云ふ者です』女『八年待つて熟せぬ者が此上何年経つたとて熟する者か』兵『爾仰有るはお道理ですが初の事を考へると貴方も餘ほどお氣が短く成りました、此土地へ来る前に斯なる上は最う鐵假面を救ひ出すのが生涯の勤だと仰有つたでは有ませんか、外に力を併て呉れる人が有るでは無し私と貴方の唯一二人の力ですもの、八年や十年で出来る様な事柄とは違ひます、今逃ても猶だ／＼再舉の工風は有ます、牢番仙頭とても此儘此鎖臺で死ぬる者では無し、最う八年も神妙に勤めた事ゆゑ近々何所かへ轉任するのでせう、全體云へば今より數年前に轉任する筈ですけど、鐵假面を初め猶其外に大事の國事犯人を預つて居ます爲め政府でも容易に轉任させぬのです、彼れはアノ通り唯だ嚴重一方で外の事は何にも知らず實に生

れ計ての牢番です、牢番としては彼ほど適當の男は有ませんから終には巴里へ引上られ大牢獄パスチルの典獄にまで上されるに違ひは無く、パスチルの典獄別毛は最う取る年で其職務も勤まり兼ると云ふ噂も有り別毛の後役は必ず、此の仙頭麻有です、夫は最う世間一般の噂ですから晚かれ早かれ間違は有ますまい、其時には鐵假面も彼と共に再び、巴里へ行きませうし』女『だつて夫は何時の事だか』兵『イヤ夫までに行かずとも又外の鎖臺へ移されます、外へ移れば何の様な好き機が有らうも知れませぬゆゑ猶だ／＼氣永く待て居ねば成ませぬ、貴女がお逃成さつたなら私は屹度調を受ませうけれど夫は何とでも言開きます、爾して私は後の様子を篤と見届け其上で逃るとも逃ぬとも、兎に角貴女は一時の所、お逃成さらねば行きますまい』と最親切に述來る此兵士の身の上も甚だ怪しむ可し。

此兵士即ち今より七年前婆取奴を引連て此土地へ來りたる者にして伊太利の野武士と稱し仙頭麻有へ雇込を願ひ出しに、勿論孰れの鎖臺にても野武士を雇ひて召使ふ時代なれば仙頭は之を怪しまず試験の上とて一月二月使ひ試みしに極めて謹直に働く様外の兵士の放蕩無頼なるに

似されば愈よ本雇ひに爲し、爾來段々引立て軍曹とまで登らせたるのみならず猶ほ其妻と稱する婆取奴までも洗濯者として鎮臺へ出入を許したるなり、去れど兵士にして鎮臺へ其妻を寢泊りさせるは國法の禁する所なれば軍曹は兵營に寢ね、婆取奴は構外なるピ子ロルの町はづれに細やかなる家を借り、茲に洗濯を業として住ひながら日々鎮臺に入來り、其所夫が非番の時と見れば二言三言話して立去るのみ、去れば仙頭初め誰一人として婆取奴が此軍曹の妻なるを疑はねど、今の話しの言葉附にて察する時は夫婦に非ずして寧ろ主従なるに似たり、然も婆取奴が主人にて軍曹が其家來なる事は殆ど疑ふにも及ばぬ程なり。

夫は扱置き兩人の話猶ほ執れとも定まらざるに忽ち彼方の堀の角へ、立現はるゝ人こそあれ、兩人は驚きて打見遣るに牢番仙頭自身にして殊に一方の手に彼の洗濯物の束をさへ提へ居るにぞ、愈よ彼の事露見せし爲め、證據として洗濯物の文字を示し直ちに捕縛せんとて來りし者ならんと、兩人は一樣に察したれど今は逃るにも逃られぬ場合、殆ど其所に立すくむ思ひなるに意外に、仙頭は毎もより柔かなる顔附にて「オ、婆取奴、猶だ茲に居たのか、多分爾だら

りと思ひ洗濯物を持って來た、軍曹も今日は七時まで非番だ、偶の非番だから其所で積る話をするが好い」と云ひ、洗濯物を投與へて後をも見ずに立去りたり。

是れ全く婆取奴に油斷せせると云ふ妻の意見に従ひたる者なれど餘り日頃の嚴めしさと違ふ爲め婆取奴も軍曹も直ちに其計を察し、少しも心に油斷せず、軍此様子では今夜逃げるにも及びますまいが、兎に角通信だけは露見したに違ひありません」女「爾とも内へ歸つて早く此洗濯物を檢めて見れば分る、其上で又相談しやう」是だけの言葉を殘し婆取奴は洗濯物を抱きかゝえ其儘我家を指して去れり、心の中は唯氣遣はしきのみにして善にも悪きにも早く洗濯物を檢めたしとの一方なる可し。

九十三

早く洗濯物を檢め見んとの一心にて婆取奴は我家を指しピネロルの町を走り去りつゝ、頓て此上地の知事として佛國政府より遣しあるハレピル侯の官邸の前に至るに、町の人々茲に集り

殆ど漕返されぬ程に雑踏せり、何の爲にやと怪む間も無く人々の噂するを聞けば、當時伊國と佛國の間に在りて一方ならぬ勢力ある巴兒麻國の皇族某貴夫人が漫遊の序に此の土地に來り、今しも知事の官邸を訪ひ立去らんとする所なりと云ふ、成る程見れば門前に立派なる馬車ありて之に打乗り手綱を持しまゝ控待てる馭者とても朝廷の服を着けたり、婆取女が此群衆を推分る折しも官邸の女關より其の貴夫人出來り徐づくと馬車に乘れり、人々は唯だ其姿を拜まんとて彌が上にも延上るのみなれど、婆取女は心鼓に非ざれば振向きて貴夫人の姿を見んともせず、潜り潜りて群衆の中を通り過ぎ又も一散に走り去りて漸く町盡れたる我が住居に着きたるが、勿論我身の外には猫一匹も養はねば我身の出る時戸を閉したる儘にして迎へ出る人として無けれど、結句此方が心安しと思ふにや恨めしげなる様子も無く、衣囊の中より鍵を取出し、今や戸を推開かんとするに、此時誰やらん背後より『若し』と云ひて、婆取女の肩に手を置く人あり。

餘り慣々しげなる振舞なれば婆取女は咎むる如く目に角たて其人を振返るに、勿論見し事も

無き紳士なれば『貴方は何を成されます、斯う見えても私は人の妻、無禮を成さると其儘に置ませぬよ』と信と叱るが如くに云ふは、四面皆敵と思ふ程なる他人の中に獨り暮せる永年の用心と察せらる。紳士は叱られて怒りもせず、却て恭々しげに帽子を取り『私は糟樽場夫人(原名カスターバー)の従者ですが、夫人の仰に寄り貴女をお連申しに來ました』と婆取女の身に取りては少しも合點の行かぬ事を云ふにぞ『エ、何と仰有ります、糟樽場夫人とは少しも私の知らぬ方です』紳『イヤ貴女は御存無くとも夫人が貴女を知て居ます』婆『夫は必ず人違ひでせう私では有ますまい』紳『イエ人違ひでは有ません、夫人が確に貴女へ指さし那の洗濯物を持って居る美しい女を呼んで來いと私へお差圖故、直に私が後を着けて來たのです』婆『夫人とは何方の事です』紳『糟樽場夫人です』婆『エ糟樽場夫人、お名前を伺つても私には少しも分りませんが』紳『近々巴兒麻國王の妻と爲り女王と立られる糟樽場夫人です、今し方知事の官邸を立出て馬車にお乗遊ばすとき、群衆を推分る貴女の姿をチラリと御覽成つたのです』斯までに言はるれば成る程我身に相違無き事ならんも、近々女王にまで立らるゝと云ふ巴兒麻國の貴高夫人が我

身に目を留めしとは何の爲にや殆ど合點の行かぬ次第なれば、婆取女は呆氣に取られ猶ほ怪しげに紳士の顔を眺むるに紳士は婆取女の耳に口寄せ「貴女は魔が淵を忘れましたか」と細語きたり。

婆取女は此一語にビクリとして驚く顔色を包み得ず、再び紳士の顔を眺むるに紳士は又も小聲にて「イヤ魔が淵とは何の事だか私は少しも存じませんが夫人が貴女へ爾云へと云ひました、爾云つても隨て來ぬなら全く私の目違ひで他人の空似と云ふ者だから連て來るに及ばぬと云はれました」婆取女は殆ど夢に夢見る人の如く、暫しが程は茫然と立つのみなりしが頓て何思ひけん「ハイ夫では御一緒に参りませう暫くお待ち下さいまし」と答へ、戸を開きて内に入らんとするに紳士は之を引留めて「イヤ貴女は定めし其洗濯物を内に置き猶ほ身姿なども更めて行く積りでせうが、却て此儘が良いのです、此儘ならば誰が見ても洗濯女が召されて來たのだと思ひますから宿の者も怪みません」サア直にお出成さい」婆取女も成る程と思ひしか、再び入口の戸を鎖し洗濯物を抱へし儘にて紳士の後に従ひ行くに、此時日は早や暮れ果て人の顔さ

へ燈光無しには辨じ兼ねる程なれば誰とて怪むと者も無し、頓て此土地にて第一等の宿屋と聞えし某ホテルに至れば、紳士は裏手に廻り行き溝り戸の如き所を通り人無き廊下より二階の裏階子とも思はるゝ所を上るにぞ、婆取女も無言にて隨ひ上れば紳士は但有る室の戸を開き「茲に暫くお待ちなさい」と婆取女を残し置きて立去りたり。

婆取女は何うなる事かと怪みながら室の内を見廻すに立派は勿論立派なれど總體の建方が總て秘密室として設けし物かと思はるゝにぞ、扱は怪しの夫人が特に何かの相談の爲め借切りある物ならんなど思ふ折しも、絹服の音聞えて入來る一貴婦人、婆取女の姿を見るよりも「オ、娑陀さんと」打叫ぶ、婆取女は此名を呼ばれ、又顔色を全く變へ、身の震ふほど驚きしが暫し夫人の顔を眺め「オヤ、梅真女」と云ふより早く夫人の身體に縋り附くに、夫人も確と抱締めて共に長椅子の上に轉がり暫しが程は起も上がらず、唯咽び泣く聲を聞くのみ。

抱合て泣伏す二人、是れ娑陀と梅眞女なり、一は櫓尾に捕はれて怪物と共に獄に下され、一は毒藥審問廷にて死刑の宣告を受けしなるに、二人とも八年後の今日が日まで生存へ異つた姿にて對面する事、實に奇中の奇と云ふ可きか。

暫くにして梅眞は先づ顔を上げ「娑陀さん、貴女に茲で逢ふとは思ひも寄らぬ事ですが、何うして先ア無事で居ました」娑陀も漸く涙を收め「私より貴女こそ先年恐ろしい死刑に處せられ、其場から逃去たと此邊までも其噂は聞えましたが夫にしても今のお姿、何うして巴爾麻國の貴高夫人に『梅』是には色々と譯が有ります、併し夫は後にして貴方の行衛は幸助さんも氣遣ふて、未だに諸國を遍歴して探して居る程の次第ですから、夫を先に聞きませう」「エ、幸助が今でも私の行衛を探し、諸國を遍歴して居ると仰有るか、私とても彼れが事は一日も忘れる暇も無く、先年奴の頑平に分れてからは頼みに思ふは幸助一人、艱難に附け苦勞に附け此様な時に彼れが居れば何れ程に助かるだらうと思はぬ日は有りませんが、貴女が巴里に居ぬとなれば最早や手紙を出す當も無く、最う逢ふ事の出来ぬ者と斷念めて居りました、シテ彼れは今何

處に居ります」梅「彼れの居る所を知るは唯だ私ばかり、彼れも私の死刑を救ふ爲に櫓尾に魔藥を呑まされたり非道い目に逢ひましたが夫でも命だけ助かりました、此上は自分の生涯を鐵假面の詮索に委ね、彼れが何所の牢屋に捕はれて居る事か夫を突留る外に目的は無いと云ひ、佛國中の牢屋と名の附く牢屋を悉々く經廻つて居るのです、尤も今は私の所夫安東も荒武者の相須根も、私を救ふ爲に大勢の護衛を相手と仕て命を殞し「娑陀さん、エ」梅「ハイ二人とも私を逃がさうと政府の護衛を食止めた爲め、ラ、グレーヴの廣場で切殺され生残つたは其時魔藥で眠つて居た幸助一人、我黨と名の附くは唯だ私と二人ですから、何處へ行つても互に居所だけは知らせ逢つて居るのです」。

是だけ聞きて或は悲み或は驚き殆ど譬へ様の無き迄に心の世話しく動くが中に、唯だ幸助の居所が猶ほ分れりと云ふ丈けは夢かとはかり嬉しければ、娑陀は早や彼れに逢ふ心地にて「幸助は何處に居ます、早く呼寄せて頂きませう」梅「今はプロホンの方より西班牙の國境まで行つて居ます、併し私が茲へ來る時、何うやら鐵假面がビネロルの鏡臺に居る様だから直にビネ

ロルへ遣つて来いと手紙を出して置きました、未だ届かぬかも知れませんが届きさへすれば早速茲へ参りませう、ハイ今から一月と経たぬうちに貴女と顔を合せませう』娑陀は有難さに堪えぬ如く梅眞の手を取りて接吻を移しつ『本統に貴女の後恩です、夫にしても貴女は先ア、是ほど出世を成さつても未鐵假面の事を忘れず、幸助を此土地へ呼寄せて呉たのですか』と云ふに梅眞は少し恨めしげに『娑陀さん所夫を失つた女に、幸ひが有ると思ひますか』此一語に娑陀は深く、梅眞が所夫に別れし其不幸を察し、口籠ながら返事して『夫は爾でも此御出世は――梅何が出世で有ませう、心にも無い人の機嫌を取り我が名を隠し身分を隠し、風の音にも耳を澄す、世を忍ぶ落人です貴女と違ひ私の身は寔武の詮議が厳く、七年経た今でさへ此糟樽場夫人が昔の梅眞だと分つたならば直に捕はれて殺されます、隠れ／＼て外に工夫も無い爲に今は此様に仕て居ますが、佛國の土地へとは足踏も出来ぬ身です』と様子を籠て云ふ言葉、一々は合點行かねど『夫が何うして此土地へ。』

梅『ハイ茲は今でこそ佛蘭西の領分ながらも元はサボーイ侯國の領分で、千六百三十二年に軍

に負けて佛國へ取られたのです、夫が爲め土地の人心は今でも伊太利の本國を慕ひ佛國政府を憎んで止まず、動ともすれば謀反の旗を翻へす兆しが有るので、此土地ならば同じ佛蘭の領分ながらも幾等か心が許される事と思ひ、夫に又巴兒麻國の朝廷で聞けば此鎮臺に鐵の假面を被つた囚人が八年前から閉込められて居ると云ふ事ですから、成る可くは其實否を探り出来るならば救ひ度ひ者と思ひ、娑陀『エ、エ、鐵假面を救ふ爲め身の危さも打忘れ、故々お出下さつたは貴女の外に眞似の出来ぬ御信切です』梅『ナニ夫ほどの信切では有りません、お聞成さい娑陀さん、一旦盜坊をした者は生涯其の味が忘れられず、又しても盜坊を企てると云ふ通り、生中國事に手を出して政府を敵に闘ふた者は、生涯國事犯が止められませんが、私の身に取つて寔武を相手にして戦ふ外に何の心遣が有りませう、今は我名さへ出れぬ身で味方も無く同志も無く是れで寔武に手向ふは蜂螂の芥とやら身の程知らぬ譯ですけれど、唯幸ひに鐵假面救ひ出しの事ばかりは、幸助さんをさへ相手にすれば外に味方は無いとても出来やうし、愈々救ひ出した其上は、彼れが若し守雄さんなら共に又相談する相手が出来、縦や帯里谷の鳥居立夫にした所

で寧武を驚かせ失望させるは同じ事、何にしても今の身で寧武を宥めるのは唯だ鐵假面救ひ出しの事ばかり、何うかして彼れを宥めて遣り度いと實は貴女への信切で無く自分の仇を打つ積りで来たのです。

『来て見れば天の助けか馬車に乗る時、チラリと貴女の姿を見一目に夫と悟りましたから人を遣つてお呼び申したので、貴女の茲に居るのを見れば貴女も何うか云ふ事で鐵假面が此鐵臺に居るのを悟り夫を救ふ爲め身を渡して居のでせう、斯う分れば猶の事です、今までは唯だ寧武へ復讐と云ふ積りでしたが是からは貴女への信切を兼ね猶更ら鐵假面の救ひ出しに骨折ませう、夫にしても貴女の貞節と、辛抱には感心しました、定めしお一人で此大望を企て、居るのでせうネ』  
『ついで、梅眞さん、私の外に未だ一人私を助けて呉れる男が有るので、夫と力を合せて居ます』  
『梅』  
『エ、力を併す男とは誰の事です』  
『梅眞が怪み問ふも無理ならず、今は幸助も居ず頑平も居ず妙陀を助くる男としては一人も無き筈なればなり。』

九十五

『ついで、梅眞さん、私の外に未だ一人私を助けて呉れる男が有るので、夫と力を合せて居ます』  
『梅』  
『エ、力を併す男とは誰の事です』  
『梅眞が怪み問ふも無理ならず、今は幸助も居ず頑平も居ず妙陀を助くる男としては一人も無き筈なればなり。』

『ついで、梅眞さん、私の外に未だ一人私を助けて呉れる男が有るので、夫と力を合せて居ます』  
『梅』  
『エ、力を併す男とは誰の事です』  
『梅眞が怪み問ふも無理ならず、今は幸助も居ず頑平も居ず妙陀を助くる男としては一人も無き筈なればなり。』



の寺で見て化物かと驚いた黒頭巾の怪物ですよ』梅「エ、エ、夫は何あり」。

梅「今考へても彼れが何物かと云ふ事は分りませんが、心は顔よりも猶ほ見醜い男で外に見る人の無いのを幸ひ色々の真似をして私しを窘めるのです、私しは室の隅へ小さく成つて居ましたが、窘め疲びれては眠り暫くしては又目を覺して窘めます、初めは我慢も仕ましたが幾日か経つうちに最う我慢も出来なく成り、ト云つて逃る事も自殺する事も出来ず、本統に何うすれば好らうと思つて居ますと彼れの窘め方は益々厳しくなり、果は私しに抱附て猥がましい振舞ひにまで及ばうと致しますから、振拂ふ力も無く私しは唯だヒ〜と泣いて居りますと、其所へ入口の戸を開き外より飛込んだ人が有ます、其人が有無をも云はず、怪物を蹴飛ばして私しを抱上げ穴倉の外へ走り出たまでは覺えて居ますが其時又氣絶でもしましたか其後は夢中で『梅』分りました、爾して穴倉が開いた者だから怪物は其所を出て織部夫人の屋敷へ來、私しと夫人とが櫓尾を詮議して居るのを見て又氣を替て直に襄武の許へ注進したので、其後へ幸助さん等が踏み込んだから穴倉は最う空に成つて居たのです』梅「夫にしてもアノ怪物は何物で

せう、政府で雇つても有るのでせうか』梅「左様サ此様な不思議は有ません勿論私にも考へる附く筈は有ませんが」と言差して暫し考へ「ハテナ事に密ると若や其怪物が」と呟きしも「イヤ〜爾とも思はれぬ」として自ら打解し更に「他日必ず合點の行く時が有ませう、夫迄は怪むだけ無益です夫から貴女は何うしました』梅「ハイ夫から、又氣が附て見ると丁度私しが前に守雄の手傷を介抱した様な汚い宿屋の二階に寝て介抱せられて居るのです、茲は何所だと問ひますと、最うブルツセル府へ程も無い或驛の宿屋だから安心なさいと云つて呉れます其人の顔を能く〜見ると何うでせう、守雄の部下の一勇士で馬の事に精い爲め馬丁を勤て居た上耳其人アリ」と云ふ男ですよ」

梅「眞も意外の想ひにて『エ、那の有井が魔が淵で殺されずに矢張り生残つて居たのですか』梅「爾です、此時こそ本統に夢では無いかと怪みました能く聞くと有井は全く生残つたのです、彼れは馬の世話をする丈に一同より一番後から魔が淵へ乗込みましたが、一同が向ふの岸で伏兵に襲はれて射殺される時、彼れは未だ魔が淵の中程前に居た相です、一同が射倒されて

川へ流るゝを見、是は最う失敗たから進む丈け無益な事、兎に角も生残れば外にも誰か生残る者も有うゆる夫等の人と力を合せ再舉を圖るが好らう、彼れは土耳其の人だけに極落着いて思案をし、淵の中程から徐々と背後へ引つ返して助かつたと云ふ事です」梅「ア、其場で引返したのは眞に剛い、成る程夫が本統の勇士と云ふ者かも知れませんが、引返したればこそ生存らへて他日貴女を救ふ事も出来たのです、土耳其人で無ければ到底も其眞似は出来ません」梅「夫から彼れは翌日に成り同類は何うなつたか夫等の便を探る爲め、矢張り幸助と同じ様に姿を窺してペロームへ入込んだと云ふ事ですけれど、彼れは幸助と違ひ探偵の様な事は不得手ですから何事も聞出す事が出来ず、此上は巴里へ登り巴里の同類を尋ねる外無いと斯う思つた相ですけれど、旅費の蓄へとても無ければ詮方なしと自分の手に覚えの有る道を求め、暫くの辛抱と馬丁の奉公をする積りで、伯樂の口入宿とも云ふべき所へ頼て行き幾週間か其宿に轉じて居る中、不思議にも其所へ旅先で馬丁に逃られたからと云ひ、馬丁を雇度いと梅尾明が遣て来て大勢の中から自分で有井を撰抜き、是が一番役に立ち相だと云ひ引連れて巴里へ登つたと云ふ事です。

梅「夫は本統に不思議です」梅「夫から有井は同類の事が氣に掛りながらも梅尾の家の廬に寝起し、或時は馭者の代理を勤めたり仕て居る中に私が氣絶した儘梅尾の馬車へ載られて歸つたのを見、梅尾に力を合せて私を穴倉へ抱込だと云ひますけれど、其時から折も有れば私を救はふと成る可く梅尾に油断させて居たのだと云ひました」梅「夫で漸く分りました、貴女を此土地まで送つて来て今まで貴女に力を併て居るのも其有井です」梅「爾です」梅「夫にしても鐵假面がピ子ロルに居る事を貴女は何うして知りました」梅「私が詳しく今までの事柄を話し鐵假面の事までも言ますと有井はハタと手を打ち、夫では先夜梅尾の馬車の馭者と爲りバスチルへ行つたとき田舎の牢屋へ移される罪人が有つて、梅尾が自分で差圖しながら幾度も別毛典獄に向ひ秘密々々と云ふ事を繰返して居たが若しや夫では有まいか、夫ならば梅尾と別毛の話の中にピ子ロルなら誰も氣が附く事で無いと云ふ言葉が聞えたと云ひますから、猶ほ詳しく尋ねますと丁度、鐵假面がバスチルから送り出されたと相須根が吾々へ話したのと同じ日の同じ時刻で、鐵假面に違ひ無いと思ひましたから直に此土地へ來たのです。

娑陀の話一顧終れば梅真も細々と過越方を説出せり。其大略を茲に記せばラ、グレーヴの刑場にて合圖役の幸助が窓より首を出だせるを見て愈々救はれる事と喜びしに、何時の間にか幸助は見えずして意外にも榎尾明が首を出し我を愚弄する顔附を示せしかば、梅真は忽ち絶望し、『アレ榎尾めが』と叫びしに、折能くも此時梅真の臺の傍に薄合居たる相須根が此有様を訝り合圖の窓を仰ぎ見て之も同じく榎尾の顔を見破り得たれば、己れ、と云ひ様荒に荒れて其二階に上り行き、榎尾の首筋取るより早くヒラ／＼と群衆の中へ投飛ばし、自ら差圖役となり、帽子を掉りて一同へ差圖せし上、其身は前後正體無き幸助を抱かへ又も下へと降來りて之を手下の者に引渡したり、相須根の此機轉に由り兼て雇ひ置きたる幾百の無頼漢は直に梅真の乗れる臺に飛附き苦も無く梅真を奪ひ取り、ソレ狼藉者よと騒ぎ立つる人波を漕分々々、兼て道順まで定め有りし事と見え刑場の裏手なる林の中に逃出れば、死骸の如き幸助を抱たる男も茲に來

り、待合す馬車へと二人を投込むに馬車も既に差圖を呑込居る事とて、一分の猶豫も無く矢を射る如く茲を立去りブルツセル府へと逃込みたり。

其中に幸助の魔薬も醒め委細の事を聞たるに幸助、相須根、安東の三人は梅真の捕へられたる時より最早や事全く破れしと見、兎に角も力を合せて梅真を救ひ出し後は其上の相談に譲らんとて、夜に乗じては梅真の家に有る財寶の類を取出し秘密の品の賣買を専務とせる無頼漢の手にて之を諸方へ賣拂ひ、其金を運動費として只管死刑執行の日を待ながらも夫等の無頼漢を取入れて其手下共幾百名を集め群衆に紛れて梅真を救はせしとなり、中には昔し相須根の手に屬せし壯士隊の者も有り、幸助を運び來り或は馬車を用意して兩側をブルツセルまで送りなどせしは總て其手の人なりしと、是だけは分りたれど猶相須根及び安東の身の上氣遣はしければ一週間ほど待合せし上、幸助は自分にて探り來らんと再び巴里に入り事の様子を問合せしに、彼の死刑執行の當日は政府の方にも斯る事の有る可きを慮かり、榎尾を差圖の役目として充分に備へを立置きしとやらにて安東と相須根は直ちに其手に捕はれしも、味方の者は唯だ人

波を騒ぎ立せ梅眞を運び去る一方に忙しく二人を救ふこと能はず、二人は必死の力を揮ひ切抜んとしたれども其甲斐なく遂に多数の爲に切殺され、又窓より相須根に投落されし櫓尾明は生死も定かならず、是だけの事を暇めて歸り來たれば梅眞は痛く失望したれども最早や如何ともする能はず、此上は身の振方を定むるが肝腎なりとて幸助へ相談せしに、彼れは國々を經廻りて笏陀と鐵假面を探るの外に目的なければ死ぬ迄も其事に従事せんと云ひ、梅眞は生れ故郷の伊國に歸り行き再び身代を興して成る可くは幸助をも助ける事にせんとて、後々まで互に居所だけ知らせ合ふの約束を定め茲にて幸助と別れたり。

是より政府の目を忍び幾月をか經たる後漸く伊國に着たれども、梅眞の名前は露程も人に知らしむ可きに有らねば佛國の音樂女教師なりと云ひ、手に覺えある樂器を取り是にて糊口だけ立る事としたるに、當時は是路易王の威光赫々として四隣を照し佛國朝廷の有様とし聞けば孰れの國の朝廷も之を眞似し、後來佛國を流行の中心と崇るに至りたる初にして、佛國の風俗は到る所に持囃され佛國の人と云へば血筋も正さず尊敬せられ、既に獨逸の一小國の王なるテル

侯爵は佛國より宗教上の罪に由り流され來りたる女を王妃とし、其娘をハノーブル家に嫁いらせ其の血筋よりして今の英國の女皇及び皇族一統も出來りたる程の次第なれば、佛國よりして外國に流れ行く女、總て其國の朝廷に招かれ果は何王何爵の妻とせられぬ者稀なり。

既に梅眞もバルマ國の朝廷に召され其常雇を命ぜられしに綺綴とても十人並優れし上、佛國朝廷の有様何一知らぬは無く坐作進退總て朝廷の仕込にして、殊には其辯功と云ひ其智識と云ひ、狭き巴兒麻の王宮に肩を並ぶる者無ければ國王深く之を愛し、當時血筋の絶居たる糟樽場侯爵の名を之に與へしより、扱は斯く引上げ置きて終には王妃とする積ならんと孰れも推量し居たるに果せるかな、數年を経て王は梅眞に言寄りて己と結婚す可き旨を乞へり、小國ながらも伊佛兩國に向ひて幅の利く巴兒麻國にて女王陛下と立られる事梅眞の身に餘る幸ひなれど、再び所夫を持つ意無ければ體能く之を斷りしに、是よりして王の戀は益々募り梅眞を厚くする事一方ならず、梅眞の望みと云へば國を傾けても應ぜん程の有様とはなりしが、或時王と佛國の話に涉りし折、王は我力を誇るが如く我國にても數多の問者を各國に遣し有る事なれば隣國

の秘密として分らぬ事なく、既に佛國政府が大の秘密とする囚人に鐵の假面を冠せある事も知り、今は其者がピ子ロール鎮臺に隠され居る事まで知れりと語りしより、梅眞は好き事聞きしと打喜び、直ちに鐵假面救ひ出しの見込を立て、王にも誰にも其心をし知らさずして唯だ漫遊の爲と云ひ做し、此土地に來りしとなり、是より梅眞は如何なる巧みを以て鐵假面を救ふ意なるや。

九十七

兩女とも過越方を話し盡せば是より鐵假面を救ふ可き相談となり、娑陀は彼の土耳其人有井を雇兵として鎮臺に住込ませ自分は其妻なりと云ひて洗濯物を任さるゝに至りし事より、洗濯物に由りて鐵假面へ通信し何うやら牢番仙頭に見破られし如き様子まで落も無く物語るに、梅眞は聞終りて痛く娑陀の艱難辛苦を賞せし末『夫にしても娑陀さん、牢番に見破られたか、見破られぬか洗濯物を検めるが第一でせう』と云ふ娑陀も勿論先程より早く検め度しと思ひ居し

事なれば『爾です茲で検めて見ませう』と答へ此室まで持來りし布の一束を引寄するに、梅眞は手に取上ぐるより早く『ア、大變です最う見破られたに相違有りません、御覽成さい此布が何となく濡り氣を帯て居ます文字でも認めて有るかと思ひ一應水で振出して大急ぎに火で乾かせ夫から貴女へ渡したのです』成る程此言葉に違はず幾分か濡り氣あれど娑陀は今更ら驚かず、『私も爾だらうと思つて居ました』梅夫にしても仙頭が之を再び貴女へ引渡す所を見れば若やとの用心だけで深く検めて見もせず振出したのかも分りません、爾すると貴女の身も急に今日明日が氣遣しいと云ふ程の事も無く夫に又文字の形だけ残つて居ぬとも限りますまい』娑陀は左様サ、水で振り出した丈の事では容易に消えぬ者ですから猶ほ一々に検めませう』斯云ひて束を解き綿密に検め乍らも、娑陀は自分が認め遣し如く肉疹の袖裏に文字は無きやと之に先づ目を留め兩方を裏返し見るに、左の袖裏に消え残りたる點々の血の跡あるにぞ『ア、是です〜』と云ひ轟く胸を推鎮めて讀まんとするに、如何さま一旦洗ひたる者にして唯だ微かに文字らしき痕あるのみ、何の文字とも辨するに由なければ、泣出さんばかりの聲にて『何うしても最う

運の盡きです、是れ御覽なさい」とて梅眞の方に差出すに梅眞は硝燈の下に持ってきて左み右み打眺めて『成る程文字の痕ですが、イヤお待成さい初めの文字は委の字ですよ、夫から三四字分らぬ痕が在て次は手拭と云ふ字らしく見えます、ハテナ委細は手拭に記して有るのを見よとでも云ふ様な心では有ますまいか』娑陀は周章しく残る布の中を掻探し『ア、爾です手拭へ何か書て有たのを仙頭が見破つて取上たのです、手拭が此中に在りませんもの、多分は手拭の文字を認たから猶ほ念の爲に残る布を水に浸し振り出したのでせう、爾して今度又通信杯する時に確かな證據を押へる爲め何氣なく渡したに違ひ有ません』と流石は多年陰謀に身を委ぬるだけ事の秘密を見抜くも早く星を指す如くに言へば、梅眞も感心し全く夫に相違なしとは思ひたれど、餘り娑陀の失望が氣の毒なれば『事に寄ると鐵假面が今は是だけ寄越して置て次の便に手拭へ認めて寄越す積りかも知れません、夫だから此通り斷りを書いて置た者と見れば爾う失望するには及びますまい』と繼かに心を慰むるに娑陀は猶ほ充分には信ぜねども、『左様です、孰れにしても今は氣を揉むだけ無益ですから此の後の相談を致しませう。

縦しや鐵假面が守雄だと分つたにした所で何うして救ひ出して好いやら、實に私しも思案に餘つて居りますが貴女には定めし好いお考へが有りませう』梅『イヤ私しの考へは先年最後の手段と云つた毒藥が一番旨く行く事とは思ひますが梢尾に試験したアノ藥は後で梢尾の生返つた所を見れば充分安心して用ひられますけれど、生憎其時に無くして仕舞ひ今から練るとも急の間には合しませんから、矢張り相須根をバスタールから救ふた様に牢を破る道具を贈る外は有ますまい』娑『でも此鎖臺はバスタールより猶堅固で夫に牢番仙頭の取締の嚴しい事は仲々別毛典獄なぞの類では有ません』梅『イエ幾等嚴しくても其下に使はれる下役が人間で有る限りは賄賂に眼を眩まぬと云ふ事は決して有ません、今の私しの身の上はアノ頃の織部夫人と同じく何れ程の賄賂でも使はれますから、下役の中の重い者を二三人買入れます、夫に有井が既に貴女の所夫と云ふ事で仙頭の信用も得て居れば是ほど最易い事は有ません』娑『でも有井は私と同様、今は最う幾等か疑ひはれて居りませうから』梅『仙頭に疑はれても外に猶だ仙頭の氣に入れて居る者が三四人は必ず有ます有井の引入れに依り其者等を取込みますから幾等仙頭が有井を疑つても

差支は有ません、夫に又此宿屋の主人も兼て佛國を憎む一人ですから私しが言附れば何の様な事でも仕ます、尤も私は猶ほ工風を定める前に自分で仙頭に面會して見る積りです。

「エ、那の牢番仙頭に貴女がお逢成さると仰有るか」梅「ハイ、何も其様にお驚き成さる事は有ますまい」斬「ダツて那の仙頭が何うして貴女に逢ひませう」梅「ナニ私には又夫だけの工風が有ます、今日此土地の知事に面會したのも實は仙頭に逢ふ前置です、知事も勿論私の素性を知らず、宛で外國の女王でも待遇す程の驕ぎでしたが、仙頭とても此方から逢ねば成らぬ様に仕向ければ必と逢ます、其上で鎮臺の中も見廻り、牢の様子まで見定めて夫から愈々救ひ出しの工風を定めます、勿論此土地に貴女が居やうとは知りませんから私は夫だけの思案も定め又問合す事だけは問合せて必ず行く者と見込みを立て來たのですから、事に由れば仙頭を説落して鐵假面にも面會する程に仕たいと思ひます」と、取つてもつかぬ事をまで言出づるにぞ姥陀も梅眞の大膽に呆れ、「貴女は仙頭の氣質を知らぬから其様な事を思ふのです」と云へど梅眞は少しも驕がず「先づ私へ任せて貴女は見てお出でなさい」と答ふるのみ。

九十八

此翌々日の事なるが牢番仙頭夫婦の身に取り實に空前絶後とも稱す可き非常の事件こそ起りたれ。开を何かと云ふに朝廷の服を着けたる立派なる一紳士、鎮臺に入來り直ちに仙頭に面會を求めて、巴兒麻國の未來の王妃糟樽場侯爵夫人より仙頭牢番夫人に宛たる一通の手紙を出し尙ほ口傳にて侯爵夫人が此度漫遊の序此土地に來りしに付き土地の重なる人々に面會し、且は名所古蹟其他名高き建物をも見物し度ければ明日牢番夫人の許を訪ふ可く、其節は打解けたる交際に預り度しとの最と有難き仰せを傳へたり。

固よりアルプス山の中なる此土地へ外國より貴高夫人の來る事としては百年に一度の有無すら定かならぬに、況してや王妃とも仰がるゝ方にして而も我妻に面會を請ふと云ふ是ほど意外なる事やある、仙頭麻有の日頃の氣質ならば一も二も無く斷りて使ひを叱り歸す程なれど、彼れは下に向ひて強き程上に向ひて弱き質にて、使の立派なる打扮を見ては既に首の自から垂るゝ

を知らず、夫に糟樽場夫人の來遊は其噂既に鎮臺の中までも聞えたる所にして、土地の人々は唯だ夫人の姿を拜む丈けにても此上なき名譽と思ふ程なるに、其夫人が故々の來臨とは流石の彼れも無下に斷る事能はず、兎に角妻に相談せんとて手紙を持し儘退きて妻に其事を談ずるに何が扱て妻は其身の妹なる出船櫓夫人が朝廷に輝ける噂を聞き、其身も一度は高貴の夫人に面會し度しと心に祈れる所なれば打喜ぶ事一方ならず、手紙を開きて讀むに及び其文句の優美にして殊に我身を褒そやしたる所も有り「御身が幾年の久しきを山の中に暮す貞節は實に婦人の鏡とも云はま欲しき程なれば是非とも一たびお目に掛りお言葉を交し度く」など細々と記しあれば、是こそ多年請ひ願ふ出世の道の開く元ぞと妻は直に所夫に迫り、兼ての勢ひにて手も無く所夫を説伏せられたれば所夫も成る程と合點して早速丁寧なる返事を認め「偏に御待申居り候まゝ見る影も無き所なれど御來臨成し下され候はゞ身に餘り譽とも相成候」など日頃書たる事も無き文句を並べ之を使ひに渡したり。

是より鎮臺の中は大騒ぎにて、仙頭は十五年前鎮臺長を拜命せしとき着川して朝廷へ禮に行

き其後一たびも着けたる事なき大禮服を取出し妻に幾度も刷毛を當させ、妻は又下女下男を迫して俄に室中を片附させ猶ほ前の鎮臺長何某が残し置きたる畫額など取出して壁に掛け其身も第一の晴着を纏ひ、外に此山中にて出来る丈けの饗應の用意も爲し、兵士一同へは國祭日にも容易には渡して着せぬ新服を下渡すなど上を下へと混雜を極めし末、用意の漸く調ひし午後三時とも云ふ頃に及び、兼て物見に出し置きたる一兵卒走り來りて愈々候爵夫人が旅館を立出し旨を報じたれば直ちに兵士一同を門の外に駢列させ、今や來るか待受しに、程なく彼方の坂路より従者を合せ十人程の一行にて徐々と歩み來るは即ち候爵夫人にして其案内として前に進むは先に來りし使の紳士なり、仙頭には斯る儀式や應接に馴ざれば早や一行の有様に氣を呑まれ、我知らず帽子を脱ぎ之を片手に持ちし儘、獨り其方に進み出で、坂の下にて迎ふれば先案内は横手に身を避け、仙頭を夫人の正面に出行かしむ。

夫人は固より梅眞の昔と違ひ數多の人に敬はれて朝廷の儀式をも充分に心得居る事なれば威儀自ら備はりて、如何にも一國の王妃かと思はるゝ所あり、仙頭が物をも得云はず空しく頭を



垂るゝを見て最と親しげに手を延べて彼れを立たせ、且は目下を引立る如き隔無き調子にて、『オ、貴方が仙頭さんですか、茲までお出迎ひ下さつた此御親切は忘れません、近々巴里へ迄も行きますから路易(國王)や塞武にも充分貴方を取做して置ませう』何氣も無く國王や大宰相を軽々と呼捨にする、唯是だけにても此夫人が佛國の朝廷にまで懇意を結び國王にも塞武にも隔て無く交れる様は知らる、殊に取做して置くとの一言は仙頭が八年來聞かんとて誰の口よりも聞き得ざる最も貴重の言葉なれば、彼れの胸には早や嬉しき満々て『何分に宜しく』との短き言葉を洩らすのみ後に續ける言句も知らず、再び頭を地に附くほど低く垂るゝに夫人も一方ならぬ満足の様子にて『貴方は流石に佛國の紳士です、他國の人には斯まで客を持做す事が出来ません』と云ひ更に又『夫にしても今日は夫人に早くお目に掛り度いと思ひますからサア何うぞ御案内を』と云ふ、仙頭は我妻が我より遙に口も軽く斯る夫人の機嫌を取り出世の道を開くには巧なりと知れるにぞ、此言葉を聞き重荷を弛めし心地にてホツと息しつゝ、『ハイ何うか斯お出を願ひます』とて先に立ちて兵士の並べる所まで來り兵士に敬禮を命ずるに、夫人は

之をも笑しげに受し上、何うも規律の能く調うて居る事は、日頃貴方の御丹精が想ひ遣られます、近衛兵でも是れほどには行きませぬ』扱は我身をば近衛兵の長にせよと國王に勧め呉れる下心にやと仙頭は殆ど我足の地に着けるにや天に着けるやをも忘るゝ程なり。是より堀に架たる橋を渡り表門の中に入れば夫人は先づ足を留めつ、頭を擧げて四方の様子を見廻し『オ、内へ入ると外で見ると外で見るより餘ほど廣い様です子、ですが仙頭さんアレ那の陰氣な建物は何ですか、宛で牢屋の様ですネ』と一方の建物を指して問はれ仙頭はグツと答へに詰りたり。

九十九

『宛で牢屋の様ですネ』と何氣無き一言にも仙頭はグツと返事に詰りしが漸くにして『ハイ實は彼處が私共の住んで居る所です』夫人は驚きの體を示して『エ、何と仰有る貴方は役目の爲めお住なさるとしても、夫人のお居間は外でせう』仙頭は益々口籠り『ハイ、イ、エ、矢張り

妻も私と共に』夫「オヤ先ア否だ、那の様な陰気な所に能く辛抱して住はれますネ」仙頭は面目無げに頭を掻き『是も役目柄で致し方が有ません』夫「貴方は致し方が無いにしても夫人を此様な所へ置くは實に邪慳と云ふ者です、何故竊武に手紙を遣り、最つと好い役目へ廻して貰ひません、夫とも結句此の山の中を安樂とでも思ふのですか」仙「何う致しまして夫人、此地へ來てから八年の今日が日まで何うか外の所へ移され度いと妻と二人で嘆かぬ日とは有ませんが、何分にも朝廷に縁故が薄く』夫「縁故が無くとも私から竊武へ云うて遣れば屹と他の場所へ移して呉れますよ、尤も竊武は少し窮屈な氣質ですから急に運ばぬかも知れませんが、私が巴兒麻國王の名前で路易へ云うて遣れば直にも運ばうかと思ひますが」仙頭は餘りの嬉しさに頬の頰るゝをも知らず「夫は最う貴方様のお手紙さへ有ますれば國王陛下でも宰相閣下でも何で否を申ませう』夫「ですが先づ夫人にお目に掛り能くお話を聞いた上に仕ませう」と事も無げに言放ちて、早や仙頭を煙に巻き頑固なる彼れの心を綿の如く柔かにし遂せしは流石に梅真女の才智と云ふ可し。

是より猶も左右の景色など見顧りながら進みくくして建物の近くに到れば夫人は又も左方の高塔に眼を留め「貴方の住居は是より猶奥ですネ、シタが此高塔は空ですか」と問ふ、是ぞ竊武より預れる幾人の囚人を閉籠めある處なれば仙頭は返事も重く「イエ空では有ません』夫「誰が居るか知ませんが塔の上から眺めるとサソ景色の好い事せう、エ誰が住つて居るのです、何方が」と宛も母に物を問ふ小兒の如く最と珍しげに問廻され、仙頭は曖昧に「ナニは政府から私へ預られた人達が居ります所で』夫「エ、政府から預られた、ア、分りました、當て見ませうか、國事犯の囚人でせう」益々險呑なることを問はれ仙頭は唯首肯のみ「夫「ソレ御覽成さい私が今しがた牢屋の様だと云ふのも滿更無理では有ますまい、だけれど旅をすると本統に色色な所が見られますよ」と唯一場の雑談に紛らし去るも仲々の苦心ならん。

仙頭は再び斯る事を問はれぬ内にと「イヤ夫人、茲が廊下の入口で此奥に妻がお待ち申して居ますと」、云ふ、夫人も二度とは問返さず、唯口軽く四邊の様子など評しながら奥に入れば、出で迎ふる仙頭夫人、最と陣びたる打扮なれど侯爵夫人は宛も昔馴染みにでも逢ふ如く手を開

きて之と懐合ひ、成る可く話の仕易き様儀式を頼して接するに、女は又女だけに仙頭よりは言葉の言廻しも巧にして、一順の挨拶を済ますが否や兼て及ぶだけ飾立てし設けの席に案内しつ所夫が夫人の従者等を持って做す間に早や一方の椅子に請じられたれば、夫人は打寛ぎて之に倚り、猶ほ仙頭夫人の手を持ちし儘其顔を眺め、成る程姉妹とは争はれぬ者ですネ、貴女は本統に出船櫓夫人に生寫ですよ』仙頭夫人は此の序開きに且驚き且喜び『オヤ先ア貴女様は私の妹を』夫『知て居ますとも出船櫓夫人から話を聞かねば此様な所へ廻つては来ませんよ』此様な所とてズツと賤めたる言葉の後にて『夫にしても妹御が朝廷に居りながら貴女を永く此様な所へ置くのは餘り非道いでは有ませんか』妹の引立呉れざるを兼てより私かに怨める程なれば『本統に仰の通りですよ』夫『ア、爾だ是ほど陰氣な所だと知ぬ故です此次には必と私が妹御を同道して来ませうよ、爾すれば貴女の様な方は朝廷で輝かねば成らぬを何時まで茲に置は邪慳だと氣が付きませう』仙『イエ妹ばかりの力では氣が附た所で思ふ様にも成ますまい』夫『ナアニ、私が言葉を添れば路易でも襄武でも大抵の事は聞て呉れますよ、私も仙頭さんに爾云ひましたが、

斯うしてお馴染になるからには貴女の心をよく聞て最う少し華美な土地へ移して貰ふ様に朝廷へ手紙を出して上げませうか』願うても無き嬉しき話に妻は殆ど椅子より轉び落ぬばかりに幾度か首を垂れ『本統に爾お願申ます、貴女様でもお言葉を添て下さらねば到底も轉任など出来る事では有りませんよ、私は最う此土地が否で』夫『オヤ夫ほどお否なら出船櫓夫人を連れて来て見せる迄も有ません明日にも私から手紙を遣つて上げませう、ナニ御存じの通り國王路易は人附の好い氣質で女に直々願はれては否だと云ふ事が決して出来ませんから、夫も自分の朝廷の女で無く夫ならば先づ路易の爲には客分ですから、大抵の無理は聞いて呉れます』仙『夫は最う貴女様なら』夫『其代り隣國の好誼ですから私の方でも亦路易の無理を聞くのです』と途方も無き事を言出れど言葉の外に何と無く實意らしき所あり、高きに居て高きに誇らず却て俗人一般の口調を用ひ、心の底まで打解けたる其中に筆にも紙にも盡されぬ言廻しの巧者を兼ねて、殊に隣國第一の巴兒麻國てふ名前だけに充分の重味あれば世間に暗き仙頭の妻杯が唯だ有難がるのみにして少しの

疑ひをも抱かぬは無理も無し、去れど夫人の心の中は唯だ夫婦を嬉ばせるのみならで深き望みを隠せる故、如何にかして其望みを言出す様、話の道筋を開き行んかと密に心を悩ますらん。

百

如何にして話の道を我思ふ所まで開き行かんかと侯爵夫人は窃かに胸を痛めし末、憐みを帯て仙頭が妻の顔を眺め「夫にしても今まで先ア、能くも此土地で辛抱が出来ましたネ、毎日何うして日を暮します、貴女の話相手にも成る様な氣の利た女は此土地には有ますまいし、夫を思ふと本統に貴女がお可愛相ですよ」と云ひ更に又思ひ出せし如く「ア、一人だけは有りませ、此土地の知事ハレビル侯爵の夫人が、サ、尤も先日私が尋ねた時は丁度不在でしたけれど、歸つて来れば貴女と好い友達でせう、エ、那の方なら」妻は悲しげに眉を蹙め「所が爾で無いのですよ、那の夫人は高く留り仲々私共へは目も掛けません、夫に知事と仙頭とは極仲が悪いのですから」夫「エ、何と仰有る、知事と當家の御主人と仲が悪い、其様な事は有りませ

い「妻「イエ爾ですよ」夫」とは又何う云ふ譯で「妻」斯うなんです先ア聞いて下さい、今までの鎮臺長は皆な知事の機嫌を取りお滔々を云つた爾ですけれど宿はソレ大宰相から直々に命ぜられた役目でせう、知事も直參なら宿も直參、少しも知事に諂ふ事は無いと云ひ頭を下げて行きませぬから、ソレ兎角に宿を目障りと思ふのです」夫「其様な事では猶更ら茲に居にくいでせう、話相手にする婦人も無くてサ、是では何うしても至急に轉任して貰はねば成りませんネ」妻「ハイ本統にお察しの通りですよ、其上又困る事には知事の夫人が一方ならず私を憎むのです」夫「オヤ／＼益々了せんネ」妻「イエ夫れも斯うなんです、此鎮臺が此通り飛び離れて居るでせう、世間から内の様子が分りますまい、所へ以て朝廷から段々と大事の囚人を預けると云ふ者ですか、知事夫人はさア夫が羨しいのです羨ましい者だから色々私へ聞度がありますけれど、私も妻の身として所夫の職務上の秘密が明される者ですか、明されぬ者ですか物に積つて下さいまし況してや所夫だけの秘密では有りませぬまい國家の秘密でせう、ですから私が何事も聞かせて遣らないのです、夫が前様の癪に障るとか云ふ事ですが、何うも致し方が有りません」と追々夫

人の前に慣るゝに従ひ心根の見え透く如き辯舌にて誇顔に説立る。

此様子にては我目的の達するも容易の事には有るまじと思へど、夫人は少しも失望せず、却て之を機会にし、『爾々茲に朝廷から大事の囚人を預つて居ると先刻仙頭さんから聞きましたつけ、ですが故々朝廷で預る程なら必ず身分ある囚人で、毎でも路易の機嫌が直れば又直ぐ用ゐられませう』妻『爾ですとも孰れも立派な肩書の有る方ばかりです』夫『ア、夫だけが先づ云はゞ貴女のお慰みですネ、時々夫等の囚人に逢つて遣り、貴女が獄中の鬱を慰めてお遣り成さるのでせう、オ、爾聞くと私までがお羨ましく成りますよ、夫ほど身分ある囚人ならば貴夫人に應接する禮儀作法も心得て居ませうし』と夫人が立板傳ふ水の如く述べ來るに妻は殆ど周章惑ひ『イエサ、イエサ、イ、エ、仲々爾では無いのですよ、何うして朝廷の命令が厳しくて私などに逢ふ事が出来る者ですか、當分の所は宿より外、誰も囚人の顔も見られぬのです』夫人は痛く打驚きし如く『エ、本統ですか夫れは貴女さへ』妻『ハイ爾ですとも私だつて誰だつて』夫『でも夫を貴女は残念とは思ひませんか、今の中に能く痛はつて遣り、充分貴女の親切を示して置けば

先も身分の有る人達ですもの他日許されて朝廷へ歸つたとき又何の様に貴女がたを引立てゝ呉れるかも知れませんか、夫だのに面會も仕て遣らず知らぬ顔して居るとは餘り馬鹿々々しいでは有りませんか』妻『夫は爾ですよ、ハイ本統に私も時々は爾思ひますの、爾思つて宿へも話さぬでは有りませんか』夫『何しろ餘り厳し過ぎます、幾等朝廷の命令でも時々は替て遣ねば、私なら決して其様な命令を守りませんよ』と。

徐ろく煽起てつ賺しつすれど、固より互ひに差向ひにて高き聲とて出さねば室の彼方に從者等を饗應せる仙頭の耳には入らず、去れど彼れ最早や夫人に壽杯を捧ぐるの時分と思しか硝盃を手に取り恭々しく近寄り來り夫人の前に立たんとするにぞ、悪き所へ來しもの哉と思ふ心を翻へし、却て茲こそと度胸を定め、彼が猶ほ一語をも發せざる間に此方より打開けて、『仙頭さん、仙頭さん、貴方にお願ひが有りますが、貴方聽いて下さいよ』と輕き言葉にて念を推すに、仙頭は益々満足の様子にて『お願ひなど、爾仰有られては痛み入ります、貴女のお望みならば私の爲に命令も同じ事です何なりと、サア伺ひませう』夫『イヤ爾云つて呉れるだらうと思

ふから願ふのです、私に囚人を見せて下さいな」囚人を玩弄か何ぞ、誰にでも最易く見せらるる者の様に罪も無く言放つ、梅真の大膽も茲に至りて極まると云ふべし。

百一

囚人を見せて呉れとは口にこそ最と短き言葉なれど仙頭の身に取りては命を呉れと望まるゝより猶恐ろしき難題なり、彼れ恭々しく構へたるにを似す、「ヤ、ヤ、ヤ」と三聲ほど叫びて背後の方に跳退きたる儘、開きし口も塞がらず、孰れが我が妻孰れが侯爵夫人と其見分さへ忘れし如く目を光らせて兩人の顔を見較ぶるのみ、侯爵夫人は茲の言廻し方一つにて我心まで疑はるゝにも至らんと見たれば忽ち聲を放つて打笑ひ「是は可笑い、ホホ……本統に是は可笑い、貴方の先ア驚き方は餘り仰山では有ませんか、茲まで来た序ですから貴方の預つて居る者を見せて呉れと申すのは當前の事ですので、私が言出すか言出さぬ内に夫ほどまでに驚くとは、貴方にも似合しからぬ客あしらひを知らぬのですよ、私は怒りますよ」是れ笑談か是れ威しか、

仙頭は猶ほ夢中にて「イエ夫人、決して貴方へ失禮をする積では有ませんが」と漸くにして言開かんとすれば妻も傍より之を助け「本統に大宰相からの言附が嚴重ですから」夫「幾等嚴重でも隣國の朝廷から来る客分にも見せて成らぬとは云ひますまい」仙「イエ夫さへも出来ぬのです、特別に大宰相から許しが無ければ何の様な人にも」夫「オヤ特別に許しが有れば好いのですか」仙「サア特別の許しが出来ます事か出ませぬ事か、夫は私にも分りませんが、兎に角も大宰相からの差圖が無ければ」

夫「オヤ、夫なら本統に惜い事を仕ましたよ、爾面倒な事と知れば寔武に一筆其差圖を書いて貰つて来る所ですので、佛國中何所へ行つても私の言葉の聽かれぬ所は無いですから、矢張り見せて呉れと一口云へば夫で直ぐに見られる事と思ひ優しく思つたのが私の不覺でした、イエ見せられぬと言はれては益々見度いのが私の氣質ですから、今度来る時は寔武か路易に願つて其差圖状を持って来ませう」と少し機嫌を損じたる色を示すに、擒縦自在なる此掛引には仙頭益々穩かならず、斷りは斷りしものゝ斯も勢力ある貴夫人の意を損なひては後々何如の目に

逢はんも知れずと、只管に氣を揉む如くベコ／＼と頭を垂れ「イエ最う辛い役目柄ゆゑ、役目を大事にする奴だと幾重にもお見許しを」夫「イエナニ貴方へ役目を破つて呉れと云つたのでは有ませんよ、隣國の貴族を持做し充分の満足を與へて兩國の親密を圖るのも矢張お役目の内だらうと思ふから云つたのです」と辭色共に勵みて云ふ様千貫の重味ありて今までの口も軽く氣も輕き侯爵夫人とは思はれず、天晴れ一國に君臨する威光ありと仙頭は畏みて頭も得上げず、唯其妻は恐る／＼小聲にて、「實は仙頭が役目を失ふ次第ですから」と云ふに夫人も同く小聲にて「失へば私が今より重く取立て上ますワ」と妻の耳に細語きつ、更にガラリと機嫌を直し、「オヤ／＼私も呆れた者ですネエ、自分の朝廷に居る様な氣に成つてツイ日頃の我儘が募りました、ナニ仙頭さん、サ、最う其様に心配する事は有ません、仲直りを仕ませうよネ、仲直りに仙頭夫人と手を引合ひ塔へ上つて此邊の景色を見せて貰ひませう」と云ひ早事も無げに立上れり。

塔とは是囚人を籠込めたる所にして、塔に上るも囚人の室が窺かれる譯には有らぬも、勿論

他人を上ぐ可き所に非ず、仙頭は又もハツと思ひて何如はせんかと思案する體なるも夫人は思案の暇を與へず「オヤ、是までも寔武に禁じられて居るのですか」と打笑ふ、固より囚人を見せる程の大難に有らねば流石に是もとは斷り得ず、大難を少難に逃れたる如き心地にて、餘儀なく／＼も無言を守るに、妻も此上夫人の機嫌を損じては取返し附かずと思ふにや手を引かれて立上り「ハイ御案内を致しませう」と云ふさへも最と辛相なり、夫人は従者の一人に雙眼鏡を出させ片手には之を持ち片手は仙頭の妻に引かれ是より塔の上へ登るに眞實の目的は徒らに景色を眺むるに在らで、鐵假面を救ひ出す大凡の筋道を定めんとするに在る事なれば猶ほ囚人に逢ふ事を思ひ止らず暫しの間尤もらしく遠近を眺めし末、頓て疲れたりと稱し塔の廊下にある腰掛臺に身を卸し妻の手を取上げたる儘にて「エ仙頭夫人、貴女だけの御綺倆が有れば私が毎も巴兒麻國王に無理ばかり云ふ様に、所夫に無理が通り相な者ですネ」

所夫を頼の先にて使ひ、無理を請りて通すのを我綺綴とし自慢するは實に何れの國にも有る一派の婦人の實況にて、殊に女尊男卑と云はるゝ佛國などにては昔よりの風俗に由り所夫に意

見の聞かれぬを恥とする程なれば、仙頭の妻は之が恐ろしき前置と知るや知らずや『ハイ大抵の事は私の思ふ様に致しますが』夫『爾でせう此御綺織では爾無くては成らぬ筈です』妻『ですが』夫『イヤ夫ならば貴女の力で、囚人を見られる様にして下さいな』と又も持出す難題に仙頭の妻は耳の邊まで赤くして常惑の色を隠し得ず、畢竟夫人の望む所遂げらる可きや如何に。

百二

虎穴に入らずんば虎兒を得ず、梅真が囚人に面會を求むるが如き實に危険千萬の業なれども、一應獄の中の有様を見極めずば救ひ出しの計略も自ら齟齬するの恐れあり、去れば梅真女の心の内は必ず鐵假面に逢ひたしと云ふには非ず、鐵假面が守雄にせよ帶里谷にせよ救ふ心は一つなれば其の別を問ふに及ばず、殊に初めより鐵假面の如き大秘密の囚人を見せよと云ひては却て我身の疑はるゝ恐れあり、夫よりは誰とも名指さず唯だ囚人を見せよと云へば先の考へ一つにて或は顔を隠したる囚人を見せるこそ最も安心の道なればとて却て鐵假面を見せる事あらんを名指すに及ばず。

梅真の糟樽場夫人は斯る了見にて仙頭の妻を塔の上に連れて行き、人無きを見澄まして其の請ひを説出せしが妻の驚く事一方ならず、殆ど返事す可き言葉も知らぬ程なるも一旦言出しては容易に後へ退く梅真ならず、實は巴兒麻の國王と莫大なる賭を爲し囚人を見る事の出来るや否やを争つて來りし者ゆゑ是非とも見せて貰はねば成らずとの口實を設け、我が智慧の及ぶ限りを盡して或は揚げ或は下げ、縦に横に説廻し、愈々此事を計ひ呉るれば充分に出世の道を開き遣らん、若し佛國にて出世出來ずば巴兒麻國に連れ行きて一地方の長官にも採用ゐん、斯く云ふも猶ほ我言葉に従はずば我に容赦無き決心ありなど直にも佛國の朝廷を説き免職せしめんと云はぬばかりの權幕を示し、忽ち笑ひ忽ち怒り手の内に丸める如く説落すに、實にや賄賂に動かさる人は無しと巽に梅真が娑陀に向ひて言たるに違はず、仙頭の妻も此威と此賺しに載せられて終に夫人の言葉に従ひ、然らば今夜の中に所夫を説き必ず孰かの囚人に面會する道を



計らんと答ふるに至りしかば、侯爵夫人は一方ならず満足し是より又下に降りて猶ほ幾時か仙頭の饗應を受し末、明日を約して此日は先づ此所を引上げたり。

斯て其宿に歸り色々考へ見るに此鎮臺の囚人は多くも五人には過ぎるならん、其中にて既に世間へ知られたるもの二人あり、共に伊國と佛國の葛藤の爲め捕はれたる伊太利人にして、之を同じ伊太利の一國なる巴兒麻國の貴人に逢はしむるは最危き譯なれば彼の油断無き仙頭が夫しきの事に氣の附かぬ筈は無からん、左すれば我に見せしむる囚人は十が九つまで鐵假面なる可き歟、鐵假面ならば守雄でも帶里谷でも我が顔を知れる事ゆゑ、必ず我來りしを見て愈々救ひ出しの計略熟せし者と思ひ自ら充分に用意をもするならんなど様々に考へ廻し、猶ほ從者中の智慧ある者と、此宿の主人を呼び、當鎮臺に捕はれ居る伊太利人を救ひ度き旨を告るに、孰れも痛く佛國を憎めるのみか自國の同胞が佛國の囚れと爲り居るを快よからず思ふ徒なれば喜ぶ事一方ならず、最熱心に其仕度に取掛りたり。

猶又次には娑陀を呼寄せ今日の次第を語り、後の思言を告げなどして此夜を明し、愈々翌日

と爲りたれば侯爵夫人は昨日の仰々しき風よりも今日は幾等か身輕に打扮ち、最早や勝手も知れる事とて伴をも連れず鎮臺に入行くは總て昨日仙頭の妻に打合せ置きたる所に從へる者ならん、鎮臺の内の様子を見れば昨日より最靜かにして番兵さへも少き様に思はるゝは、即ち仙頭が承諾せし證據にして、成る可く事を秘密に行ふ爲め、用に托して遠ざけたる者と知らる、夫人の足の女關に着くや否や待構へ居たる如く仙頭は出來り氣味悪げに四邊を見ながら、「丁度好い所へお出下されました、勿論職務上禁ぜられて居る所を犯し、特に隣國の爲め貴女へお見せ申すのですから充分秘密を守つて下さらねば成りませす、他日若し之が爲に朝廷から咎められる事でも有れば必と貴女が言開いて下さらねば」と云ふ其心は引立て呉るゝ約束の念を押す者ならん、夫人は最と誠しやかに「夫は最う申す迄も無い事です、貴女は今から三月と經たぬうちに必ず榮轉せられるのは私が受合ひます」言ふも小聲、答ふるも亦小聲、是だけの問答のみにて後は一語をも交へず、仙頭が塔の方を指し歩み去る後に從ひ、夫人も其儘歩み行くに昨日彼れが妻に案内せられしとは違ひ、上の方へは登り行かず、鎮臺の堀に隠るゝ塔の二階

の廊下をのみ傳ひ、行き／＼て盡れの一室の前に達せり。

娼陀の話に照し合すに何やら茲が鐵假面の室かとも思はるゝにぞ、夫人は他年の目的を達す可き時來れりと俄に胸の轟くを覺えながら猶ほ仙頭の爲す所を見てあるに、彼れは開き戸を推し開けて中に入れり、續きて入れば茲は囚室の玄關とも稱す可き空室にして此内に又一枚の大戸あり、其作り最と頑丈なるは問はずとも知れた是が囚人の居所なり、仙頭は衣囊より遲しき鍵を出し、之をも開きて又其内に入りしが早や囚人に打向ひしと見え叱るに慣れたる濁聲にて「コレ囚人、今日は其方の所へお客がある、勿體なくも隣國巴兒麻の貴族糟樽場侯爵夫人が聲にて『エ、私の所へ侯爵夫人が』仙頭爾よ御無禮をせぬ様に能く氣を附て御目通りをせよ」囚人ホ、――、長く牢屋に居る内には、不思議な事も有る者だ毘蓬々と生延た此面では、お目に掛り榮も仕ませぬけれど、天日と女の子の顔は久しく拜んだ事が無い、ドレ何所でお目に掛るので」と、云ふ言葉さへ最も凛々しく聞ゆるは、孰れ一旅の勇士なる可く牢の中にて泣顔

れたる人としも思はれず、仙頭は「ナニ茲でお目に掛るのだ」と云ひ、少しく身體を横に引けば、背後に立てる侯爵夫人の姿は自ら現はれて囚人の目に留まりたり。

百三

横に躬を退く仙頭の背後より糟樽場侯爵夫人の姿現はるれば、囚人は久しく女の顔を見ぬ珍しさにや、一方に身を傾け熟々と夫人の顔を打眺む、其有様は飼犬が主人の連來る容を見て、吠て好きか尾を掉りて好きかに迷ひ、匂ひにて嗅ぎ知んと鼻うごめかすに異らず。

此囚人は是れ鐵假面なるか、素顔の儘にて何の假面をも蒙らぬを見れば鐵假面には有らぬ事勿論なれども、唯だ梅眞は心に鐵假面の室ならんと私かに期し其積りにて入來りし事と云ひ、且は今までの艱難辛苦にて漸く茲まで入込みし事なれば、此時に及びて精神ウツとりと遠くなり、日頃の稻妻より捷き其智慧も頓には動かす、猶ほも身は鐵假面の室に入たる氣にて守雄にや帶里谷にやと怪み見るのみ、去れど囚人の顔の半は茫々と生延たる長き髭髯に隠されて、孰れの

人とも思ひ出す事能はず唯だ骨組の最と頑丈にして、逞しき面魂は見し事の有るやにも思はるれど瘦形なる守雄にも帶里谷にも有らぬ事明白なり。

扱は、扱は、今まで守雄か帶里谷の兩人の中とのみ思ひ居たる鐵假面は守雄にも非ず帶里谷にも非ず全く別の人なりしかとまで怪み思ふに到りしが、忽ちにして我に返れば此室は是れ鐵假面の室に非ず、仙頭が鐵假面を見せるさへ猶危しと思ひ囚人の中にも最も身分低く最も朝廷の言附けも寛かなる無害の者を選び、其者の室へ連れ來りたる事と知らる、斯く氣附きては今までウツとりとせし梅眞の智慧は日頃に倍して忙しく働き初め、此逞しき囚人は何者にや何故に我が眼に斯は見し事の有る如く映らうにやと、暫し考へる迄も無く忽然として其本性を思ひ出せり、ア、驚く可し此囚人は彼の魔ヶ淵の事件より猶ほ以前に行衛を失し、其後娑陀を初め我黨一同が其生死さへ知り得ずして忘るゝ暇なく氣遣ひ居し決死隊の大勇士、奴と知られし頑平なり。

是れ夢か是れ現か、頑平が此牢獄に隠され居やうとは實に思ひも寄らぬ所なれど、鬚髯に隠るゝ彼の顔露出さずとも疑ふ所なし、梅眞が斯く驚くと共に、頑平も此侯爵夫人が思ひも寄らぬ梅眞なるに心附きしと見え、我知らず膝を叩いて飛上り「ヤ、ヤ、貴女は」我黨の梅眞女かと彼れが口走らんとする眞際にも、梅眞は唯だ此の一言此一句にて何も彼も破れ盡すを見て取りたり。

刑場より逃れ去り今も猶ほ寔武より厳しく追はれ探偵せらるゝ毒藥師梅眞の名前は到る所に知らぬ人なき程なれば、世間見ずの仙頭とても之を知らぬ筈は無く、縦んば知らずとした所で巴兒麻國の王妃とも云るゝ者が其實此囚人の知れる一夫人なりと分らば、今までの事總て看破られ、我身も頑平も續きては娑陀も有井も鐵假面も如何の事と成り行くや知る可からず、救ひ出しの計略も是にて休まん、眞に是れ危機一髪、爾は云へ斯る浮雲き場合を幾度も踏來りし梅眞なれば咄嗟の間にも其の機轉を失はず、我が名の未だ頑平の口より發せぬ間に早くも我が唇頭に指を當て「無言れ」との意を示すに頑平とても其心を悟らざらんや、彼れ天地も顛るゝかと思ふ程の高き聲にて噴笑ひ「貴女の様な立派な夫人が此囚人をお尋ね下さるとは、アハ、

世が逆様に成つたのだ、此奴は可笑いアハ、」

最と巧く紛らせたれど、仙頭の爛眼は何か怪む可き所ありと見て取りしか、又も一足退きて  
兩個の顔を眺め合せ、頓て頑平の肩を堅く捕へ『コレ囚人、手前は此夫人を知つて居るのか、  
何か云はうとして紛らせたな』頑平は平氣にて言開かんとするに梅眞は早くも仙頭を聞答め、  
『オヤ仙頭さん、チトお嬌み成さい、囚人を詮議するは貴方の勝手ですが、私の聞いて居る所  
で、其のお言葉は失禮と知りませんか、糟樽場侯爵夫人とも云はれる者が佛國の囚人に知られ  
て居る筈が有りませうか、貴方は到底高貴の社會に交る事は出来ぬ人です』嚴かなる言葉には  
少し怯し様子なるも、猶ほ疑ひは解けざれば『でも此囚人は何か貴女へ言掛けました、爾する  
と貴女は私の背後に居て、囚人を誑める様に唇頭へ指を當たかと思ひましたか』星を指す痛き  
言葉を夫人も同じく笑ひに紛らせ『貴方の言葉を聞いて居ると本統に可笑く成ります、左様サ  
私は來月にも巴兒麻國王と婚禮すると云ふ身を以て、爾々昔の色男が此牢屋に隠れて居るから  
夫を今夜にも救ひ出すと云ふ大膽な目的で夫ゆる貴方に迫り此牢を見廻るのも、此恐ろしい囚

人が私の昔の色男と、斯でも云へば誠だと安心しますか』と笑談半分に嘲るうちにも暗に囚人  
へ今宵救ひ得せんと心の聞かせ、更に又『エ、仙頭さん、夫で貴方が安心すれば爾と仕て  
置きませうよ、私と此囚人とは昔から譯の有る間柄だと奥様にも爾お話なさい、奥様は好い笑  
ひ種が出来たと後々までも思出しては笑ひませう』と宛ながら小兒を扱ふ如く、自由自在に言  
廻され、成る程我が疑ひの餘りに馬鹿げしを悟りたる様子なるも、猶ほ解け兼る所ありと見え  
再び囚人の方に向ひ。

『コレ其方は此夫人を見てヤ、ヤ、貴女はと言掛けたが那れは何に驚いて、何を云ふ積りで有  
つた』頑平も半ば笑を帯びて『言掛けたけれど貴方も此夫人も立腹するだらうと思つて止めて  
仕舞つた、ナニ私の心で思つたわけです最う言ますまい』仙『其方の心で何と思つた構はぬから  
言掛けたわけの事を残らず言つて仕舞へ』頑『止めませう折角來た珍客を怒らせて後で貴方に叱  
られる』仙『其様な事は無い、言つて仕舞へ』頑平は止むを得ずと云ふ風にて『ナアニ巴里で朝  
廷の貴夫人を見慣れた私の目には此夫人の打扮が成る程巴兒麻國だけに田舎じみて見えるから、

是でも貴女が侯爵夫人ですかと言掛けたが、氣が附いたから笑ひに紛らせました、私は佛國より外の人は大嫌ひですから」と云ふ夫人は此語を聞き、立腹に堪えぬ如く「仙頭ん貴方には囚人の昔馴染と思はれ、囚人には田舎ものと云はれ、是で最う澤山です、二度と牢屋の中は見ませぬから」と云ひ席を蹴らぬばかりに荒々しく、先に立ちて室の外へ出去れり。  
是にて見れば此夫人が私に囚人と話など仕たき心なき事明かなれど仙頭は尙ほ臍に落ちぬ所あるにや、腹の中にて「何うも怪い、婆取女と云ひ軍曹と云ひ、此頃の様子が總體に何と無く怪しい、ハテナ今夜にも油斷が成らぬぞ」と思案しながら梅眞を送り去れり。

百四

奴頑平が猶生存へ此牢に繋がれ居しとは意外とも不思議とも言ひ様の無き次第にして、之を娑陀に聞かせなば守雄に逢ふと同じ程喜びて之をも救はんと云ふこと必條なる可し。  
爾るにても梅眞女が折角頑平に逢ひながら、少しも長く此室に居て餘所ながらにも彼の身

の上など聞取らんとは勉めずして、立腹せし體に見せ周章しく立ち去りしは何故にや、是れ實に梅眞の梅眞たる所にして大に苦心の在る譯なる可し、若し少しだに牢番仙頭に疑はるゝ恐れ無くば梅眞は充分に言葉を通し、彼れの目の前なるも構はず様々の事を聞き得たるならん、總て他人の目の前にて外の話に紛らせながら秘密の意味を通はせるは多年陰謀に身を委ぬる斯る人々の伎倆なれば、牢番の目の前なりとて爾まで恐るゝ事なからん、唯だ此度は梅眞も頑平も餘り意外の事にして思はず知らず疑はるゝ言葉を洩らし、既に仙頭へ充分の疑ひを起させ殆ど何も彼も看破れんとする迄に及びたれば、只管らに其疑ひを搔消さねば成らぬ場合となり、如何とも詮方なければ止を得ず立腹せし體に見せ席を蹴て立ち去りしなり。若し梅眞にして幾分の未練を残し、縦や一分間たりとも立去る事遅かりせば必ず仙頭に捕へられ、再び世間へ出る事の出来ぬ身と爲りしやも知れず、兎にも角にも梅眞の彼の舉動は時に取りての大出来にして、渠ならずば誰か又之れを能くせん。

夫は扱置き梅眞の立去りし後に頑平は空しく耳を澄し其足音を聞くのみなりしが暫くにして

「ア、到頭聞え無く成つた、アノ邪慳な牢番奴が廊下へ出てから梅眞女を捕へるかと思つたけれど捕へもせず送つて行つた、茲は流石に梅眞女だ旨く牢番を欺し果せたな、夫にしても梅眞女が巴兒麻の侯爵夫人だの近々國王と婚禮するのと、何うして先ア其様な事に成つたか、イヤ那れも矢張り牢番を欺す手段だらう、此牢屋を見る爲に侯爵夫人に化てゝも來たのかな。

爾だ己が若し此牢屋に捕れては居ぬかと思ひ夫を見極て救ふ積りで、イヤ待よ己が茲に居る事は誰一人知らぬ筈だぞ、待て々々、己は先年ブルツセル府から織部夫人を送つて巴里へ行き其歸りには政府の探偵が嚴重だから寧ろ我黨の往來を便利にする爲め、然る可き間道を採しなから歸るが好いと協道へ反れた所る政府の方でも失念は無いわ、憎尾の使ふ手下めが己の後から尾けて來て、己が間道を詮議するのを見て的きり夫と睨んだか、寄て集つて此己を捕へやがツた随分働いたけれど仕方が無い己一人に四十人ほどの兵隊を差向て到頭推伏せて仕舞つてサ夫から其土地の兵營へ連れて行つたが、爾々那れがカタローエの分營だ、分營の穴倉へ推込まれて三月ぢかく置れたけれど其間に暇を見て漸く旨く逃出しは仕た者の、何しろ三月も世間を見

ずに居た事ゆゑ我黨の者が何所に何うして居るかも分らず、多分は最う巴里へ攻上つた時分だらうと取敢ず巴里へ引返してアセーユの朝廷をのぞいて見れば、爾だアノ賽武奴が平氣な顔で馬車に乗り國王の供をして行幸先から歸つて來る所有つた。

其時の彼れの憎さは今も時々思ひ出す、今己が馬車へ飛附き彼奴の喉首を握り潰せば我黨の目的も達するがと斯思つたけれど、其様な事を仕ては却て守雄様の目論見を妨げるかも知れぬと思ひ馬車を其儘遣り過したが、何しろ此様子で見れば我黨が未攻上らぬ事は確ゆゑ、扱は守雄様の怪我が未直らぬのか爾すれば娑陀様も定めし氣遣うて居られるだらう、何しろ一刻も茲に居られぬと、今度は織部夫人にも逢はず馬の様に驅出して三日目にプツセルへ着き守雄様を尋ねた所、早や病氣も全快して一月も前に同志を引連れ巴里へ立た後との事、南無三此奴は失敗た巴里へ立つて三十日も経て未巴里へ着かぬとすれば兼て守雄様の氣遣うて居た通り、道で敵兵の待伏を食ひ塵殺しに逢つたのに違ひ無い何所で其様な目に逢たか夫を突留るが肝腎と直に後追うて出掛けなければ待暫し一同が殺されたなら生殘るのは己一人、兼て守雄様が萬一の

時を思ひ貴様だけに極内々で知せて置く、若し己が死でもすれば娑陀を助けて秘密の箱の政  
府の手へ渡らぬ様、掘出して焼捨て呉れと云はれたは此の事其時はナニ貴方が死ねば私し一人  
生残る筈が有ませんと云たけれど、唯だ萬一の用心だ大事を企てる者は何から何まで考へて置  
ねば了ぬと、終に其箱の隠し場を聞いて置た。

其萬一の用心が役に立つ事に成つたとは、思へば口惜い次第だけれど、捨て置れぬ事柄ゆゑ  
直にヨハネの寺に入り旨く掘出して後の土を元の通りに仕て置て其所を立去り直に其箱は焼捨  
たが、夫から方角を考へると、兼て幸助が言て居た通りペロームの横手へ出たに違ひ無い、何  
でも爾だと山を越へ谷を潜り魔ヶ淵まで遣て来ると、十四五人の騎兵が息だと思はれる痕も有  
り、此淵さへ渡つて仕舞へば巴里へは最う一筋だ、シテ見ると巴里の何所か一同が身を潜め  
時節の來るのを待て居るか、夫とも茲で捕はれたかと、徐ろく此方の岸へ渡り、伏兵の痕か  
とも思はれる所が有るので夫を慮り見て居ると、運の悪い時は悪い者で、櫛尾明とペロ  
ムの鎖臺長仙頭奴が少しの兵隊を連れ見廻りに來たのに見附り、又意氣地なく捕はれた、今度

は分營と違ひ、物事能く備への立た鎖臺ゆゑ逃出す事も出来ず、九年近い今日が日まで仙頭の  
荷物と爲り彼れの轉任と共に此土地へ移されたが、其後幾度か此牢を破らうとしたけれど、握  
り拳の外には何の道具も無い悲しさ、若し針一本有さへすれば何の様な所でも破て見せるが、  
何にも無しでは始末が悪い、寧ろ神妙に見せ掛けて放免を待つが近道かと思ひ直し今日までは  
辛抱したれど梅真女の顔を見てはア、急に世間が戀しく成つた、決死隊の面々は魔ヶ淵で殺さ  
れたと思ふけれど夫とも己と同じ様に、捕はれて居る者も有るか、娑陀様も何うした事か、エ  
エ、那の仙頭めが今に其方は放免に成るから神妙にしると、幾度も云たは己を鎖める氣休めだ、  
其様な事を當にしては次第／＼に年が行き力も抜け、牢破りも出来無くなるワ、破るなら今の  
中だ

斯く云ひて頑平は猪の怒り毛を立る如く顔中の髯を振立て牢の中に立上り光る眼に室中を見  
廻す様、恐ろしなると云ふばかりなり。

頑平は怒る眼にて空中を見廻しつ突々と戸の所に行き「ハテな此戸を推破つて呉やうか」と  
 咳き直に戸の板に手を掛けて總身の力を込め曳々と推試むるに、戸は堅くして少しも動かず、  
 「駄目だ、駄目だ、十年近くも牢の中で惰けて居たから力が全然抜けて仕舞た、是でも毎日動かし  
 て居る中には段々少しづゝ動き出すかな、爾だ力の續く間は此戸を相手に推合つて見るとする  
 か」斯云ひて今度は肩を聳かし、戸を目掛けて一散に突當る、其有様は昔し宮殿を揺り毀せしと  
 云ふサムソンも斯くやと思はるゝ程にして、地響する迄に懐じき物音したれど戸は猶ほ少しも  
 動かばこそ「ア、此様な音がしては直に番人に悟られる、シテ見ると抜出る道は窓より外に無  
 いと見える」今度は窓の方に行き、格子に作りし太き鐵の棒に手を掛けて力の限り之れを揺る  
 に是とても何時動き初むるとも思はれず「何でも此様な事は氣永くするに限る十年掛つて牢を  
 破つたの二十年掛つて逃出したのと随分話には聞て居る、己の爪より鐵の方が堅いから仕方が無

い、素手では容易に出来ぬ業だ、何でも氣を永く構へ間がな動かして居る中には少しは  
 上下が弛むとか鐵が曲るとか仕さうな者だ、石の様に固まつた上下の土を掘頼す刃物さへ有れ  
 ば譯も無いが、ト云て刃物の手に入る筈も無し、矢張り氣永く動かす丈か。  
 是より凡そ半時ほど足踏張りて手に力を入れ、或は突き或は押し様々に試むれど何の効さへ見  
 えされば少し落膽せし如く、又も寢臺の所に歩み返り、之に控下と身を卸して「併し待てよ、  
 梅真女がア、して来たからには今に何とかして牢破の道具だけでも送つて呉れるに違ひ無い、己  
 を救ふ氣が無ければ何も恐ろしい想ひをして面會に来る筈が無い夫にしてもア、仙頭めが能く  
 面會を許した者だ 餘ほど梅真女も苦心して旨く牢番を欺したのだな、ハテ可笑いぞ、己の爲  
 に爾までも苦心して呉れるとは己が大事の大將とでも云へば猶しも、決死隊の中に居ても大飯  
 を食ふ外に能の無い人間だ、唯だ肩幅が廣いから萬一の時に娑陀様を背に負うて馬の代りを勤  
 めるには都合が好いと幸助奴に冷かされた事は有るが、馬の代りに救ひ出して呉れるとは餘り  
 有難過た話した、可笑い、可笑い、餘ほど可笑い、フム、事に由ると梅真女は己より外の人を



救ふ爲めに來たのじや無いか、爾だ己よりも大事な人が此牢屋に捕はれて居るものだから夫に逢はふと云ふ積りで茲へ來て己の室へ紛れ込んだかも知れ無いぞ、何でも己の顔を見た時に容易に己とは氣の附かぬ風で有つた、己に逢ふ積りで來たなら初めから己と知り直に何とか合圖をする筈で有るのに、ハテな己よりズツと大事な人とは、誰だかな、牢番も折々爾云たよ貴様より身分の立派な囚人が居るけれど貴様が一番眞妙だと、爾すれば己の外に立派な人が幾人か此牢に居ると見える、己は唯だ捕はれた初からボヘミヤの百姓で政治の事などは少しも知ぬと言張て居る丈に、今では政府でも油断したか初めの様には詮議もせず次第／＼に取扱ひが弛かに成り、此頃では食物の差入の外には牢番も餘り廻つて來ぬ程だが外の人には爾でも有るまい、夫れだから牢番が己れならば構はぬと思ひ梅眞女を案内したのだ、爾すると若しや守雄さまでも此牢屋に居るのでは無いのかな』

段々に考へ來りて忽ちに首を垂れ居眠るかと思ふほど鎖りしが、稍ありて又顔を上げ『爾だ何う考へても守雄様か夫とも織部夫人か、イヤ／＼織部夫人は皇族で何の様な罪が有ても此牢

獄へ入られる筈が無い、爾すれば何うしても守雄様だ、守雄様が捕はれて居ればこそ救ふ積りで苦心して逢に來たのだ、外の者なら何で梅眞女がアレ程に苦心しやう、續いては又娑陀様も何う成された事か若し今までも生存へて居る様なら定めし艱難辛苦成された事で有らう、今までもともお兩人様が氣に掛らぬでは無いけれど、颯ばり見當も着かぬ爲め案じても無益な事と我心に意見して氣遣はずに居たけれども守雄様が此牢に居る様では何うして氣遣はずに居られやう』と考へ來るに従ひて彼の恐ろしき眼より點々と涙の出来るを見しが、頓て思直せし如く『是は最う此儘居られぬ何が何でも此牢を逃出して梅眞女に逢ひ様子を聞き守雄様なら助け出す工風をせねば』と彼れ再び立上りて窓に行き、前の如くに鐵棒を揺り初めしが今度は仲々手を休めず、強き鐵さへ幾分か撓む迄に至りたれど、人の力には自ら限りあり、鍛へ上たる彼れの身なれど終には全く疲れ果て魂も力も盡しと見え、窓の許にコロリに倒れ、雷より高き鼙聲にて心地好げに眠り初めぬ。

是より幾時間の後なるや知ねど異様な物音の耳に入りて目を覺し見れば夜も早や夜半を過

しならん、四邊闇々として暗く僅かに我室の窓だけを見分るのみ、夫にしても今の音は何なりしやと暗がりに眼を見張れば、アナ不思議、牢の外に、天より下りしかと思はるゝ一條の繩ありて、之にブラ下る一個の曲者、鋭き鋸の如きものにて外より我室の窓を毀せり、暗とは云へど空を透して其様疑ふ可くも非ず、此曲者誰ぞ。

百六

茲に又牢番仙頭は糟樽場夫人梅眞の辯巧に言捲られ無事に夫人を送り歸しはせしものゝ、後にて段々と考へ見れば怪き事益々多く巴兒麻國の未來の王妃とも云るゝ者が故も無く此山中へ遊びに来るさへ例の無き事なるに、國王と賭をしたりと云ひて囚人に面會を求むるも怪く、又囚人と夫人との様子にも段々腑に落ぬ所あり。

殊に多年神妙に仕へ居たる洗濯女まで大事の囚人と通信を計りし事確なれば、夫や是やを考へ合せて今更ら心配の想ひに堪へず、疑へば疑ふに従ひて益々我が油斷を悟り、今夜にも誰か

外より牢を破りて囚人を盗み出す者有る如き氣のせられ、堅固に用心せねば成らぬ場合と氣附きたれば、宵の中より兵士中の屈強なる者十人を集め之を二人づゝ五組と爲し鎮臺の四面と外に遠見の場所一ヶ所へ立番させ、是ならば如何なる敵の忍び來るとも捕へ得ざる氣遣ひ無しと漸く我心を安めしも猶ほ考へ見れば、立番の兵士若し居眠りては何の甲斐も無し、眠氣の催す頃を計りて我身私に見廻らねば有る可からずと、夜の十二時までには早や二度も見廻りしが、孰れの兵士も思ひしより神妙にて我が忍びの足音をさへ聞き附けて來り咎むる程なれば、猶も能く勵まし置き更に二時近くなりし頃、三度目の巡廻を初むるに、夜は森々と更渡り物凄き程靜にして、牢など破る曲者の有ふとも思はれねど、何分氣に掛るは堀に向ひたる囚人の窓外なれば先づ其邊を指して行きしが、既に番兵の立つ所より百歩ほど過ぎ堀の間近に至りし頃上方より異様な物音の來るを聞く。

扱はと彼れ驚きて忽ちに足を留め空を透かして眺め見るに、高さ五丈にも近き大堀の頂邊より、ブラ下れる黒き者あり、徐り／＼と降り來るは、問はずと知れし曲者なり。仙頭は頭髮の

逆立つほど立腹し何奴なれば番兵の目を掠め斯も大膽不敵なる事を企つるや、己其足の地に着かば直に組伏せて引捕へ呉れんすと暗に眼を光らせる暇も無く、早や地の上一間半ほどの所まで来りしが、先も然るもの何かの様子にて此氣合を悟りしと見え、更に又逆戻り、空の方へと上り初め、見る／＼うちに又二三間も上りたり。

茲に至りては最早や容赦の有る可きか、仙頭は唯だ腹立しさに氣も轉倒し、肩に掛けたる鐵砲を取るより早く、曲者の黒き姿を狙ひドンと一發放ちし聲は靜なる四方の山々に響きて物凄き程なれど、狙ひ違ひし者と見え曲者は落來らず暫くにして筒口の煙散じて再び其姿を認めし頃は彼れ早や堀の頂邊より三尺も上に有り、先も今は必死と見えて其の揉擻きながら昇る様夜目にも争ふ可くも非ず、仙頭は益々周章て次の弾を込めながらも今は我聲を鎮め得ず「オヤオヤ曲者め鐵假面かと思へば爾でも無く鐵假面の室の窓より猶上へ昇つて行ぞ、アノ繩は何所から來て居る宛で天からでも垂て居る様だぞ、ア、分つた塔の頂邊の欄干へ結んで有る、爾だ爾だ何でも侯爵夫人の手下がボヘミヤの百姓頑平か鐵假面を救ひ出す積りで、居る牢へ忍込む

事は出來ぬから守りの弛やかな塔の上階へ上り、其所から繩を垂て牢の窓の前へ下り鐵假面と何か話を仕て夫から降つて逃る所有つたな、エ、番兵も役に立ぬ、ハテナ此奴は侯爵夫人から何時の間にか番兵にまで賄賂を遣たのだな」と口の端に泡を吹きつゝ、漸く次の彈丸を籠め終り今度こそはと充分狙ひを定めんとするに、曲者も最早や身體の力盡き一步も上る事はなぬ迄に至りしと見え遙かの頂邊にてブラリ／＼と身を動かしブランコを初めたり、彼れ再び射らるるを恐れ狙ひの定まらぬ様にと思ひ身を動かしながら其氣力を養ふ者と察せらる。

斯る危ふき場合に望み斯も落着きたる事を爲す抑も彼れ何等の大膽なる男なるぞ、印度若しくは土耳其邊の行者か東洋の輕業師ならずば誰か又之れを能くせん。仙頭は敵の身體の動くに連れ、筒口を前に遣り後に遣り空しく狙ひ廻すのみにて容易には放ち得ず、斯る所へ今の砲音に驚きたる番兵等右左より駈附來たれば「サア誰でも好いから彼れを射落せ、射落した者には褒美を遣る」と勵まし立つる聲に應じ、五六人の者思ひ／＼に空を目掛けて射掛るに憐れ其一發はブランコせる曲者に當りしと見え、アツと一聲叫びも敢へず、ヒラ／＼と落來り恐ろしき物

音して一同の居る所より十間ほども横手の大地に叩き附くる如くに落たり、こは其身體の動く繩に投られたる者なるべし、仙頭は一同と共に其所に驅け行きて番兵の持てる角燈に照し見るに、無慘や曲者は其身體寸断に碎け、血に染みて誰なるや判然兼る程なれど、能く見れば彼の洗濯者婆取女の所夫なる軍曹有井と云へる者なり。

彼れ土耳其に人と爲り千軍萬馬の間に往來し、人幾人前の膽力あればこそ死に臨むも自若として猶ほ頂邊に射を動かしたるなれど、終に射落されて茲に一命を失ひしは是非も無き事と云可し。

百七

夜は既に二時を過ぎビネロル驛の幾人家は悉く戸を鎖し草木まで眠りしかと思はるゝ程靜なれど、町盡れの淋しき家に燃え残る有明を伴として猶ほ寢も遣らぬ一夫人は婆取女の娼陀なり。多くも有らぬ道具類を悉く片附けて其身も旅の仕度を整へ今にも出立するばかりなるは

夜の明けぬうち此處を逃去る覺悟と見ゆ、去ど猶ほ待合す人あるにや先程より幾度か戸の外に出て耳を澄し、或は氣遣はしげに暗の中に延上りなどせしも空しく夜の更け行くのみなれば今は氣遣はしさに氣も落附かず、中にも得入らず外にも出ず其儘、入口の段に腰掛け。

『エ、最う此様な氣遣はしい事は無い、梅眞女は最早や半番仙頭に疑はれた様子ゆゑ一刻も永居は出来ぬと云ひ、後の差圖を有井へ言ひ含めて宵の中に此土地を立去つたは好いが、夫にしても有井は何した事か最う歸らねばならぬ時分、夫とも半番仙頭に捕はれたか、イヤ／＼番兵にまで賄賂を遣り残らず手に入れて有ると云へば豈夫や其様な事も有るまい、是だけの道具が有れば牢の窓を切破るに半時も掛らぬとて宿屋の主人から受取つた刃物を隠し勇み進んで行つてから最う大方四時間にも成らう、馬にも秣を遣つて待たせて有るし今歸れば直にも茲を逃去られるのに夜が明けては何の様な事に成らうも知れぬ、寧ろ鎮臺の近邊まで、イヤ／＼見に行つたとて無益な事、夫とも若し鐵假面の居る窓が餘り堅く出来て居る爲め切破るに手間でも掛つて居るのだらうか、何でも有井と梅眞女の打合せでは一番備への弛やかな塔の頂邊から

繩を垂れ、頑平の居る室を破り先に頑平を卸して置いて其次に鐵假面の窓まで降り、窓の外から守雄の名を呼び愈々鐵假面が守雄と分れば同じく窓から救ひ出し、若し守雄で無いと分れば其儘降りて歸つて來ると云ふ事で有つた。斯う遅い所を見ると鐵假面が守雄だから其窓を破つて居る爲かも知れぬが、ア、守雄ならば本統に有難い、爾だ守雄だ、守雄だ、爾も無くば頑平を連れ最う疾づくに歸る筈、今までも守雄とは思つて居たが、未だ二年や三年で救ひ出す様に成らうとは此前の週間まで思はなんだ、是も全く梅真女のお蔭と云ふもの、夫に又頑平までアノ鎮臺に居る事が分つたとは本統に夢の様だ、頑平も助かり守雄も助かり、有井と共に逃げて來れば最う何にも望みは無い、今迄の艱難も辛苦も消えて仕舞ふ、エ、夫にしても遅い事は、エ、氣が揉めて、此様な心配な事は無い、寧ろ鎮臺の近く迄、爾だ様子を見に行つて來やう』身も世も有れぬ氣遣はしさに、娼陀は思ひ定めて立たんとするに此時天より降りしか地より湧しか、目の前に立現はるゝ大の男、娼陀は殆ど肝を消し、思はず背後に飛退きて石段に躓き家の床へと倒れ入れれば、大男は一步進み抱起さんとする如く肩に掛しが忽に驚き叫び『ヤ、貴

女は娼陀様、有難い、有難い、茲に居て下されましたか、娼陀様』と早泣きながらの高聲は、問ふ迄も無く頑平の言葉にして九年以前と少しも間違ふ事無ければ、娼陀も又轉び起き『オ、其方は頑平か、頑平か、能く無事で居て呉れた先ア顔見せて、顔見せて』と縋り附きて燈明の許に引行き燈心を掻立てるさへ悶かしく、暫しが程は手を取合ひ、嬌つすがめ眺め逢ふのみなりしが、頑平は『ワツ』と聲を放ち首を垂れて泣伏したり、娼コレ頑平何を泣く其様に』と問ふ身も同じくおろく聲、頑平は涙の中より『貴女のお賽れ成さつた姿を見れば、今までの艱難御辛苦が思ひ遣られてお痛はしう御座ります』と只誠一徹の言葉には娼陀も今は堪え得ず、腹の底より迫來る涙の淵に泣沈みぬ。良ありて思ひ直し、目を拭ひて首を擧げ『夫にしても頑平アノ有井は何うした、エ』と問掛くるに頑平は合點の行かぬ面持にて『エ、有井が何うしましたと、エ』娼『イヤサ、其方を今夜救ひ出したアノ有井は』斯う云はれて初めて夫と知りし如く『エ、牢を破つて私を救ひ出したアノ男が馬丁の有井ですか』娼『夫をお前が知らずに居たのか』頑『暗さは暗し、何うして彼れ

と分りませう、唯だ私しの牢を破り四邊憚る細聲で、サア出ると云たばかり私しとても救はれるが嬉しい一心、彼れ是れ問うて居る暇も無く、其儘繩へ手を掛けますと、二人一緒では切れるかも知れぬから、先へ降りると云ひ、自分が窓から私しの室へ這入りました、遠慮は無益と私しは直に窓へ出ましたが其時又も耳に口寄せ、町の盡れに娑陀様が待て居るぞ、と是丈彼れは言ひました、町の盡れと聞いたばかりで悉しくは分りませんが、番兵の來ぬ間に少しも早くと思ふ爲め、後は聞かずに繩を下り一散に走つて來て、當も無く一時間ほども探した末、唯一軒此家に燈の影が見えましたから若やと思ひ這入て來て運能くお目に掛たのです、那の男が有井なら最う充分歸つて來る頃ですが「娑」尤も有井は其方の外に猶だ鐵假面を救ひ出す積りゆゑ、夫で手間取れては居やうけれど「頭」鐵假面とは何の事です「娑」オ、其方は未だ知らぬ筈、守雄だらうと思はれる囚人が」と半分云ふを聞かずに「エ、守雄様がアノ牢屋に、其様な事では無いかと思ひました、有井が夫を救つて居るとは、エー娑陀様、私しが是から驅行き彼れと共に力を併せ必と救ひ出して參ります」と委細も聞かす立上る甲斐なくしさは天晴れ昔

しの頑平なり、時しも表の方に當り最と凄じき物音して「茲だく、茲が有井の妻婆取女の居る所だ、逃すなく」と口々に罵りしりて寄せ來るは、問はでも知る可き鎮臺の捕手ならん。

百八

早や鎮臺より追手の兵の向ひしを見ては有井が鐵假面を救ひ得ずして、捕はれしか果た殺されしか、孰にしても事の破れしは明かなり、此上も無き遺憾なれども逃去るの外途は無し、頑平の日頃の勇氣にては、逃去る事本意には非ざる可きも、傍に纖弱き娑陀を控へて争で追手と戦ふ可き「サア娑陀様、茲は一旦逃げませう直に直に」と云ひながら、馬の代りの廣き肩を娑陀に向くるは早く乗れとの心なる可し、娑陀は「夫に及ばぬ、此先に馬が居る」と云ひ頑平に少しも後れず殆んど追手の兵と鉢合せをせぬばかりに表に出で、更に身を反せて勝手知りたる路次の中に潜り入り、頑平と手を取り合ひし儘右に左に逃げ廻りて漸く宵より馬を待たせある所まで來りしかど、追手も猶ほ厳しく追話して「アレだ、アレだ、逃すな」とて口々に叫び立る、

其聲殆ど十人に餘るかと思え、中には騎馬にて差圖する上役らしきもの二三人あり、娑陀も頑平も殆ど馬に乗る暇なく、唯だ轡を取りし儘凡そ五六間も走り漸くして飛乗れば、追手の中に馬に乗れる者早や我が背後に在り『射殺すぞ』と罵る聲、殆ど耳の邊にて聞ゆ。

斯くなりては最早や必死なり、唯だ馬首をチウリンの街道へ向し儘、後をも見ずして只管に走り去るに追手の馬より幾許か走り抜きたる様なれど、猶ほ其馬の足音は殆ど手に取る如くに聞え殊に『射殺せ』と云ふ差圖と共に、幾發か打出す砲聲は彈丸と共に耳を掠めて飛來り、其危ふき事云ふばかり無ければ猶ほ逃げて逃拔るうち、頑平の馬の腰の邊りへ反丸の當りしと見え、其馬忽ち飛上りしが是よりは氣の違ひし如く娑陀の馬を乗越しつ矢を射る如く向ふの方へ飛去りたり、是れに後れては成らずと思ひ娑陀も益々鞭を振り凡そ十町ほども去りしに、追手は最早や捕へ得ぬ者と斷念めしか馬の足音も聞えずなり、先づ一方は安心なれど唯だ頑平の姿を見失ひしは心許なし。一筋の街道とは云へ幾等も枝道の有る所と云ひ、殊に遠くは見分難き暗の夜の事なれば、何所まで迷ひ行くも圖られず、折角に回り逢ひて又も見失ふ事ありて

は誰を便りに此後の身を定む可き、娑陀は心細き事限り無けれど、左ればとて外に行く可き所は無し猶もチウリンの方を指し半時ほど馳け續けしに、馬は何故にや道の真中にて忽ちに歩みを留め鞭撻てども一步も進まず、怪しき事限無ければ眼を張りて行く手の力を眺むるに頑平の乗りし馬、道に斃れて我が目の前に横はれり、是にて見れば頑平も馬より落て此邊に横はるやも知れず、夫とも役に立たぬ馬を捨て猶先の方まで逃行きしや、夫にしても心細き限りなれば娑陀は鞍の上に在りて『頑平、頑平』と叫び立るに、其聲は暗に響き我ながら物凄き程なれど返事する人も無し。

扱は馬を捨て遙かに先まで行過ぎしものにやと、彼の斃れたる馬の横手を過ぎ、又一鞭當てんとするに此時一丁ほど背後に聲あり、我を呼ぶ如き氣のするにぞ振り返りて待つ間も無く、喘ぎく走り來り『ア、娑陀様、ヤツと追附きました』と云は、即ち擬も無き頑平なるにぞ、娑陀はホツと安心しつ『其方は先ア何うした』と問ふに『イヤお話しに成りません、馬が氣の違つた様に奔出し、少し控やうとして跳落されました、起上る間に馬は向ふへ飛んで行き、續

いて貴女も其所を通過しましたが、何うも情無い譯ですよ、牢に幾年か居た爲に悉皆り足の力が抜け何うしても走られませんが、元は馬より達者だと云はれた頑平ですが息が續かぬ者です。『ら』と云ふ、成る程息も絶々にて、苦さの察せらるゝ程なれば娼陀は之を痛はりて我馬へ乗せんとすれど、彼れ中々従はず唯だ馬の鞍に捉まりて、身を引きなから従ひ來るのみ、去れど其様餘りに苦げにして殊には馬も亦疲れたる様なれば『コレ頑平、茲まで來れば最う追手の恐れも無い、何所か道傍の腰掛店で少し休んで行くと仕やう』斯く云ふ折から宛も旅人を休ませる小屋掛けの前に來たりしかば娼陀はヒラリと馬を下り、其軒下に馬を繋ぎ、雨酒しの腰掛臺に身を卸し『サア頑平、其方も茲へ掛るが好い』頑平は最重たげに身を引擦り『夫では少し休ませるか、ナニ二三日力を出せば元の身體に成りますけれど、今は何分にも筋が弛み赤坊の様に成りました、ドレ暫し御免を蒙りませう』と同じく臺の上に沈み込みしに、此時誰やら小屋の中に入ありて、二人の聲を聞くよりも、バツトと附木を擦り火を燈せり。

夜の中は守人も無き開放しの休み所なれば二人は痛く驚きて振返るに、其人早や角燈に火を

移し、之を二人の顔に差附け暫し眺むる體なりしが、倒るゝばかりに驚き叫び『ヤ、ヤ、娼陀様と頑平ですか』と云ふ、兩人も同じく驚きながら其人の顔を見て『オ、幸助か』と一齊に叫びたり。

察するに幸助は先に梅真女の云ひし通り鐵假面のビネロールに居ると云ふ梅真の手紙を得て、プロボンよりビネロールを指し夜を日に次ぎて急ぎつゝ茲まで來りて休み居し者なる可し。

百九

娼陀、頑平、幸助の對面は實に造化の引合せとも云ふ可きか、分れてより八年、九年、三人共に様々の苦勞を嘗め、互に居所さへ知らずして、只管に尋ね合し末なれば、彼れも是も話は盡きねど茲は猶ほビネロール領分にて何時捕手の追來るも知れざれば、兎に角チウリンまで引上げん、チウリンの宿屋には猶ほ梅真女の居る筈なれば四人頭を揃へし上にて後の事をも相談せんとて暫くにして茲を出しが、疲れ果たる頑平も根が剛力無双の男にして頑丈なる身體なれば



少しの休息にて早や其疲れを忘れ、殊には幸助に廻り逢し嬉しさに氣も引立ち、昔の頑平に異ならず、獨り娑陀を馬に乗せ、頑平は幸助と共に過越方を語りながら馬の傍らに従ひて其日の中にチウリンの町に着きたり。

是より夜に入るを待ち、三人にて私に梅眞の宿を訪ひ、秘密の面會を求めて彼是れと相談するに、此後の事總て其時々の工風に任す外は無けれど兎に角も有井の安否を探知るが肝腎なり、之を探るには娑陀とても頑平とても再びビネロルへは入難き身の上なる故、誰にも顔を知られざる幸助に如くは無く、殊に幸助は斯る事に妙を得し男なれば、都合に依りては今までの有井の如く雇兵として彼の仙頭に雇入らるゝ道をも求め、絶えず牢屋の秘密を三人へ内通する事にまでも運ばせんと、茲に相談定まりたれば其夜の中に幸助は直ちにビネロルへと出發せしが、是より一週間を経て歸り來り有井が鐵假面を救はんとして救ひ得ず、其身さへも逃果せずして射殺されたる次第を語り、猶ほ牢番仙頭は己れの油斷を朝廷に聞かるとを好まぬか其事を堅く秘めて番兵一同へも口留したるも、娑陀と頑平の行衛詮索を思止らす内密に追手を四方へ

出したる様子なりと語り。

斯る詳しき事を纒か一週間ばかりにして探り得しは怪む可き限りなれども、實は梅眞より先に泊りし宿屋の主人へ宛て細々の手紙を認め遣り、主人の骨折にて先に賄賂を送りたる番兵を呼び再び之に賄賂して委細の事を聞きしとなり、猶ほ幸助の語るには今の所にて鎮臺に雇入らるゝ事殆ど思ひも寄らされど、仙頭の心幾分か弛むに連れ彼の番兵に頼み込まば其周旋にて追迫に雇はるゝこと無しとも限らず、去れば自分はビネロルへ行き其土地の人足と爲りて市中の雇仕事に暮しを立て氣永く住込みの機會を待つ事にせん、此後十年廿年でも鐵假面の移さるゝ先へ先へ従ひ行き、救ふ可き隙を見次第一同へ通知せんと熱心に言立たり、一同は聞終りて或は有井の死際の働きを稱し或は千仞の功を唯だ一簣に欠きしを恨み、悲嘆様々なりしかど結局幸助の言ふ所の外に然る可き思案も無ければ、終に其言葉に従ひ頑平は娑陀を守りて安全の地に潜み幸助よりの便を待つ事、梅眞女は巴兒麻國に歸り永く此三人へ金錢其外の補助を送り猶ほ然る可き工風を廻らす事、等夫々の身の振方を定め、愈々時の來るに會せば四人再び力を併せ鐵

假面を救ひ出さんとの約束を定め、茲にて又も三方へ立分るゝ事とはなれり。

思へば此人々は前世如何なる宿業ありて其身の上に斯も艱難辛苦のみ多きや、情は兄弟より親しく離れ難き交りなるに、一日も同じ所に暮す能はず、纔に廻り逢ながら一時の歡を盡さずして又分れ去らんとす。今分れて再び逢ふは何の時ぞ、是が此世の訣かも知れざるに猶ほ鐵假面救出の心を捨す、幾年月を鐵の假面に顔包まれ空しく牢の中に老んとする英雄の心根も爾る事ながら、此人々の憫む可き境涯も彼れに比べて劣ることなし、去れば此の分れに臨みて陀陀はヨ、と忍び泣き其の顔を上ぐる能はず、幸助も頑平も其の様に動かされ涙に咽びて聲を呑みしが、梅真は之れを勵まさん心なるにや、猶ほ更に諫々しき聲にて。

『貴方がたは何が其の様に悲しいのです、私には猶だ鐵假面救ひ出しの見込みが充分あります、先日より考へて居ますが、路易と塞武との我儘が次第に募り、既に彼等を恨む者吾々ばかりでは有ません、此様子が續くうちには必ず彼等を目掛けて兵を擧る者が孰れかに有ませう、吾々は不幸にして既に大将守雄に分れ諸國を説て自ら兵を擧る程の力とは有まんが、外に兵を擧

る者が有れば夫に加はり佛國の政府を乗取り牢獄を破つて囚人を取出す事は出来ず、私共は是より巴兒麻國に歸り氣永く國王に説立れば巴兒麻國も必ず佛國の敵と爲り他日其賦軍に加はります、夫までに吾々の力丈で鐵假面を救へば好し、若し救ふ事が出来ぬにしても其時を待てば救はれます、是が爲に私は或は國王と婚禮するかも知れませんが、何の様な事を仕ても、吾々の目的は見込の無い目的では有ません、猶ほ吾々の後推を仕た雷鼠拉伯も塊國に居りますし、吾々の恩人織部夫人も塊國へ逃て行きました、伯と云ひ夫と云ひ佛國朝廷を憎む事は吾々にも優つて居ります、夫に夫人の子プリンス、ユージーヌも此頃塊國で兵學校に入り仲々將來に見込が有ると聞きますから、夫を併せ見れば將來佛國が餘り隣國を宥める事に成れば第一に兵を擧るは塊國です、夫に加はるのは巴兒麻國です、巴兒麻國が加はれば伊國に在る許多の小國は皆加はります、北には阿蘭其他を初め南には西班牙も、佛國の敵と爲るとも味方とは成しません、是を思へば我々は隣國残らずの後推で仕事をして居る様な者です、私の毎も云ふ毒藥の最後の手段で猶ほ目的が届かねば、諸國の兵で目的を達します、猶だく泣く時では有りますまい』

と自ら我聲に勇み立てば、之を聞く娑陀も幸助も頑平も、忽ち奮ひ立ち勇氣日頃に幾倍して、一點の未練を残さず約束の通り分れ去りたり。

百十

是よりして娑陀は頑平と共にチウリンの或町に細やかなる家を借りて茲に住ひ、幸助は又約束の如く人足と爲りてピネロールに行きたるも、鎮臺に雇入らるゝ事叶はねば中の秘密も容易には聞知る能はず、唯だ番兵等の噂に聞けば彼の半番仙頭は有井の企てありてより一層の大事を取り、鐵假面の囚人を穴倉に押込めて今までより猶ほ一入嚴重に取扱へりとの噂なり。斯くて此年も暮んとする頃、仙頭は少し出世せしと云ふ可きかピネロールの鎮臺より更にホルト、ド、エキジールの鎮臺に移されたり、去れど彼れ途中にて鐵假面を奪はんとする者有らんを恐れ誰にも其事を知らしめず、自ら二三の腹臣と共に鐵假面をば嚴重なる網乗物に載せ夜の中に茲を立ちたれば、流石の幸助さへも後になつて此事を聞き空しく驚くのみなりき、尤もエキジールは

ピネロールより五里にも足らぬ所なれば幸助も其後を追ひて同所へ移りたれど、猶ほ住込の機會を得ず空しく四年の年月を送るうち鎮臺にて少しばかりの普請を初めたり、此時始めて外の人足と共に鎮臺に出入する事と爲りたれば、幸助は何とかして仙頭の目に留らん者と朝は人より早く出で夜は遅くまで居残りて有らん限りの力を盡し必死と爲りて働きしに、其效空しからずして是より幾月をも経ぬうちに漸く兵卒の中に加へられたり。兵卒より伍長曹長など云へる役附に取上され多小の秘密も分るまで仙頭に用ひらるゝは實に容易の事に有らぬも、先に有井が重く用ゐられし事を思へば我れとて其通り行かぬ筈なし、若し行かずば我が働きの足らぬ爲ゆゑ益々勉強する外あらじと夜の目も碌々寝ぬ迄に骨を折しに、二年の後(千六百八十七年)仙頭は又も轉任しプロボンの海岸なるセント、マーガレット島に移されたり。

此時とても仙頭は充分の大事を取り己れの轉任する先を何人にも知らしめず唯だ轉任とのみ云ひて靜に其用意を初めたるが、幸助は猶ほ一兵卒の儘にして素より秘密など聞知る所まで上らねど唯だ是等の様子にて何でも又轉任ならんを見て取りたれば私に娑陀と頑平とへ宛て、愈

々轉任地の分り次第再び報知する故其時は途中の都合を計り、而る可き場所にて鐵假面を奪ひ取れと云送たり、去れども轉任の地は仙頭が何人にも他言せぬ所なれば之を知ること殆ど鐵假面の名を知るよりも難く、空く出立の日とは成りたり。幸助は遺憾限り無く此様子にては何年仙頭に使はるゝとも終に目的を達する事無くして止まんと殆ど愛想を盡したるも愈々出發の眞際となり仙頭より呼出され、曾て人足たりし麻を以て籠舁の部へ廻されたり、籠には大事の囚人が乗れる故、能く氣を注げよと言渡されしかば、扱は我れ自ら鐵假面を舁ぎ行く事と爲りしか待てば海路の日和とは此事なり、ト今までの絶望に代へ私に勇み立ち恐るゝ「何處まで舁いで行きますか」と問たるに仙頭は早や目に角を立て「其様な事は問ふに及ばぬ、己が馬に乗り眞先に進むから其後へ就て來るのだ、毎日十七哩つゞ旅する用意さへすれば夫で好い」と言渡したり。

一日に十七哩、幾日掛るや分らねど此上に問ふ能はず唯だ首を垂れて退きしが、籠と云へるは嚴重に鎖したる網乗物にして六人にて舁き上ぐる最と重き作りなれば、幸助一人の力にて擔

ぎし儘逃げ去る事も叶はず、殊に眞先には仙頭が近衛とも云ふ可き二十人程の兵士を連れて進み、籠は直に背後にして籠の後には又、鎮臺副長以下數多の兵卒従ひ來る事なれば、縦し五人や十人の加勢あるとも此囚人を奪ふ事思ひも寄らず、小休するにも仙頭が附切にて、宿に着きても此籠を仙頭の寝る室に入れ、食事も仙頭自ら籠の戸の錠を開き手づから差入て遣る次第なれば、外の物は鐵假面の衣類の端さへも偷み見る能はず、斯て幾日の道中を經、漸くセントマアガレット島に着き初めて茲が轉任の地なる事を披露したるも鐵假面は又穴倉の底へ收め何人にも見せしめず、幸助は是等の事を一々に舁陀へ知らせ遣りたるが舁陀も餘りの用心に驚き、斯る事して空く待たば其中に鐵假面は牢の中にて死するやも知ざれば最早便々と待つ可きに非ず、幸助は其儘仙頭に從はせ置き我身は更に我身だけにて試みる工風ありと云ひ、彼の頑平を供に連れて舁陀は再び巴里に入り込みたり。

是れ千六百九十一年にしてピネロルを去しより十一年の後なりし、知らず巴里にて舁陀は如何なる工風を施さんとする者なるや。

娼陀が頑平を引連れて再び巴里に入込しは實に危き限りと云ふ可し、其身と云ひ頑平と云ひ共に是れ國家の牢獄を破りて逃去りたる大罪人にして探偵嚴重なる巴里に入らば何時捕はるやも知る可からず、去れど娼陀は之を恐れず生て此世に存へるも仙頭の用心餘りに嚴重にして到底鐵假面を救ひ出す見込は無く、去ればとて梅眞の言し如く諸國が兵を擧るを待つも何時の事やら分らねば今は此世の頼なさに堪へず、寧ろ一か八か我命を的にして及ぶだけ立働き、倒るゝ迄も我思ふ所を企て見んと、充分に考へ定め巴兒麻國なる梅眞へも其旨細々と認めたる手紙を送り其上にて巴里へ殆ど死に來りしなり、其心根亦憐む可きのみ。

頃は千六百九十一年七月一日の炎天も早や既に日暮に向ひ、斜に射る西日も高き林に遮られて力無く、王宮ヴァセーユの木影に夕風の催さんとする時なりしが、朝廷より出で徐々と歩去る一輛の小馬車あり、中に乗る其主人晝間よりの公務に疲れ果しと云ふ如く、自ら馬の手綱を取

りながらコクリ／＼と居眠りをせぬばかりなるも馬は馴たる道の事とて林に添ふ小路を踏も迷はず、王宮の前なる坂道を無事に下り右に折れて裏手の方に向ひ凡そ十町ほど行きて又も一方の林に入りたり、此主人公を誰とかなす、當年五十三歳なる彼の大宰相斐武なり。

馬車頓て木立の最も暗く鎖し合ふ邊に到ば、馬は何者にか驚かされし如く忽ち歩を留たれば眠りし斐武は今も猶ほ凄き眼を開きて見るに、品格の賤しからぬ一人の女確と馬の口を取るを見る、昔ならば彼れ大喝一聲に叱り懲す所なれど、五十餘年の朝廷の奉公は幾分か彼れの圭角を磨圓めしと見え、彼れ敢て驚かず『オ、美人何をす』と云ひながら、衣囊に手を入れ財布を探り出さんとするは、彼れ此女を戦死せし兵士の妻にて恩給の渡し洩を催促する者と思ひしならん、今までとても此森にて斯る事度々あり、己れが陸軍の人望を繋がんとする丈に彼れ軍人の妻に對ひては殊更に恵み深しと聞きぬ。女は其の意を悟りしか推留むる如く片手を延べ、『イエ、イエ、貴女の財布に目を附ける者では有ません』と軽く云ふ、斐武は少し首だけを後に反せ眼を三角にして『ハテナ何を云ふのだ』と再び女の顔を訝り見るに、滿更見覺えの無き

にも有らぬか、三角の眼は忽ちに満丸く張開きぬ、女は長く怪しませず最と落着たる調子にて、  
『貴方は娑陀を忘れましたか、イヤサ其頃の平井夫人を』此一言に丸き眼は四角となれり。

彼れ豈に平井夫人を忘れんや、平井夫人は彼れが初めての愛にして又終りの愛なり、彼れの  
堅苦しき生涯に愛てふ言葉を語りしは唯だ平井夫人に向ひてのみ、彼が彼の時の失望は幾年の  
後までも殆ど彼れの健康を左右するかと思はれたり、彼れ一度の愛に懲り今に至るも妻を迎へ  
ず、後々までも獨身政治家の手本と爲りし程なれば、死するまで娑陀の名を忘れまじ(彼れは其  
甥なるバーベジウに後を嗣せしとたん)其愛の情は既に彼れの心を去りしとするも其名は猶ほ記憶  
に留るならん。彼れ此言葉を聞くよりも何思ひけん馬車を飛降り無言にて確と娑陀の手を取り  
たり、怒りて拘引する爲にや夫とも餘りの驚きに我知らず斯爲せしか、娑陀も氣味悪く思ひし  
如く少し顔色を替たれど、死を決して來りし身の怯む色更に無く、聲の調子も能く揃ひて『貴  
方にお目に掛り度い爲め今日で丁度一週間此森に漂ふて居りました』彼れ初めて氣の附きし如  
く娑陀の手を拂ひ退け『何だ、己に』と問返す、此様子と此言葉附にて見れば最早や愛の情と

ては少しも無く、寧ろ娑陀を賤しむかと察せらる。

此時彼若し横を向て木影を見れば、其最も深き所に宛も大蠅の目の如く最恐ろしき兩個の眼  
が其身を狙ひて光れるを知らんに、彼れ更に氣も附かず、娑陀の顔を見詰し儘にて『夫は何の  
用事で』『ハイお願いが有まして』『驚願とは何の様な事柄だ』『命掛の願ひです、私しをセン  
ト、マーガレットの鏡臺に送り、仙頭麻有の預ツて居る囚人の顔を唯一目言葉の猶ほ終らぬに、  
彼れ夢の醒し人の如く、アツと驚き『其様な事を何うして知つて居る』『娑陀夫を知らいで何とし  
ませう、十餘年の艱難辛苦も唯だ其囚人の行衛を見失ふまいばかりの爲め、ハイ私しは誰にも  
知らさず、彼れの行く所へ附纏ふて居るのです、彼れがバステルからピネロールへ移された事も、  
ピネロールからエキジール、エキジールからマアガレットへ送られたのも残らず知つて居ます、  
斯までの艱難を不便とは思ひませんか、外の者とは違ひ、今と爲ては死る外に望みの無い私し  
へ、鐵假面に包まれた彼れの顔を唯一目見せて下さるのが何で國家の害になります、何で職務  
に負きます』と泣かぬばかりの聲を絞るに、實武は一言く『驚くに從ひて振捨去んと身を構へ

「捕縛せられぬを幸ひと思ひ早く立去れ」捕縛を許し呉るゝ丈も猶ほ昔の愛に酬ゆる者にや、斯く云ひてヒラリと馬車の方に振向ば「ドッコイ、爾は了ぬぞ」と何時の間にやら立現はれて路を塞ぐは雲を突く大の男、是れ奴の頑平なりとは讀者の既に知る所ならん。

百十二

頑平の儼つき姿に寔武は色を失ひ「誰だ、何をする」と荒々しく叱り附るは餘ほど驚きたる者と知る可し「頑平何にも仕無い、唯だお前様を逃すまいと遮る丈けだ」とて頑平は猶ほ大手を擴ぐるに、娼陀は之が爲め益々寔武の氣色を損するを氣遣ひ「コレ、失禮な事をお仕で無い、靜に其邊に待つてお出で」と矯むるに「ハ、己の姿が夫ほど恐ろしいなら元の木影に隠れて居やう」斯く云ひ彼れ徐ろくと退きたれど、寔武は危ふしと思ひしか猶ほ立去らん景色にて斜に娼陀に振向ひ「コレ女、三日の猶豫を與るから其間に國境を外へ逃て行け、三日を過て立去らねば警察へ命を下すぞ」三日の後は容赦なく捕へさせるとの意は、問ふ迄も無く明かなり、

娼陀は悲き聲を張り「警察に捕はれやうが其な事は恐れません寧ろ鐵假面と同じ牢へ投入て下されば安心して牢の中に世を終ます」寔武は知らぬ顔にて早や馬車の許に近づくと娼陀は後より詰め寄せて「私しの願ひは、願ひは」寔武其方の願ひは聞く事の出来ぬ願ひだ「寔武秘密の宝箱を貴方へお渡し申しても、夫でも此願ひは叶ひませんか」秘密の宝箱との一言に彼れビクリと驚きて忽ち又此方に向き「何だ秘密の宝箱とは」寔武貴方が先に恐ろしい黒頭巾の怪物を遣はしてセント、ヨハネの寺の庭から堀出うとした宝箱です、中には決死隊の連名帳を始め、計略其他往復の手紙迄入つて居ます」此手帳を得て公徳忠隣兩公を朝廷より追斥け度いばかりに幾年來心を碎き居し事なれば、此言葉に彼れは凄じき眼を光らせ「其の宝箱が」寔武「ハイ今では私しの手に在ます、魔が淵で生残り何より先に私しが堀出しました、堀出して立去た後へ黒頭巾が行つた事は定めし黒頭巾から聞取つて御存でせう」

手箱を何者が堀出せしやは黒頭巾も知らず、今まで寔武の心に横たはる大疑問なりしも、今此言立を聞きては少しも疑ふ所なし。

漸くに合點行きしと云ふ如く彼れの顔は晴渡り『シタが其の宝箱の中には』『艶』ハイ當時の決死隊は誰の後推で、誰が軍用金まで送つて居たか、残らず證據が這入て居ます』『實』其證據を己に賣付け其代價として鐵假面の顔を見度いと云ふのだな』『艶』ハイ仰せの通りです』『實』宝箱は今何戸に在る』『艶』夫を今申ましては宝箱を貴方に取られたも同じ事です、オホ、私の賣物は無く成つて仕舞ひます』『艶』所在を云ふても直に己の手に入る事では無し、夫さへも云はぬ所を見ると誠の箱は最う無く成つて仕舞つたのだな』『艶』陀はハツと驚きたるも、多年の辛苦に心まで固まりて其色を少しも見せず、却て實武が充分箱に氣の有る事を見抜たれば今は百倍の強みを増し、『貴方が、私へ鐵假面の顔を見せて遣ると堅く約束をお結び成されれば箱の所在だけ申ませう、爾して愈々約束通り鐵假面に逢せて下されば其上で尋常に其の箱をお渡し申します』斯まで云ふ女の言葉に偽り有うとは思はされど、斯る事は疑はれるだけ疑ふが彼れの平生の掛引なれば、彼れ冷やかに打笑ひ『夫では約束は結べ無い、鐵假面の顔を見せて、其後で箱を受取り若し其箱が實で有つても最う喧嘩には成らぬから』實に尤も千萬の言條なり、實際彼の宝箱は頑平が

焼捨たる物なれば本物の有る筈なく、艶陀は唯だ之を言立て兎に角も鐵假面の顔を見んと思へるなり、見し上にて贖物を渡し、縦し其事露見しても我身が責殺さるゝ丈の事なり。

鐵假面が我所夫なるや果た帶里谷なるや知らずして、疑ひの底に漂ふは最早や艶陀の堪へ切れぬ所なり。

勿論鐵假面の誰なるかは讀者に於ては既に其定案ある可きも艶陀梅眞等一同に取りては其事の分る筈無く、其疑ひは今も猶ほ初めと更に異なる事なし、政府の手先に相違なき彼の黒頭巾が宝箱の所在を知りヨハネの寺の庭を擲りしを見れば、帶里谷が鐵の假面を被されて政府へ言立しに相違なく即ち鐵假面は帶里谷としか思はれねど、一方より彼れ鐵假面が二十年近く實武に苦めらるゝ所を見れば帶里谷より遙に罪重き守雄に相違無しと察せらる、此二個の疑に包まれて二十年來迷ひに迷ふ艶陀の心を察しては、最早や死ぬとも唯鐵假面の顔を見て疑ひを晴し度しと思ふこと無理ならぬ次第ならんか。夫れは扱て置き星を指す實武の一言にも艶陀は更に怯む色なく、兼ねて隅の隅まで考へし事なれば、却て一入の氣力を見せ『貴方が爾うまでお



疑ひ成さるなら到底も此御相談は纏まりますまい、手箱が質で有るか質で無いか、其の時窺か  
に後推した大將軍に見て貰ふ丈けのことです」暗に其の箱を襄武の大敵なるプリンス、コンド  
殿下に渡すかの如く匂めかすに、是れ武襄が身に取りて何より痛き所なれば、彼れ心中に驚か  
ぬ事能はず『イヤ何より近道は其方を捕へ役人の手に渡して拷問させれば箱の所在も分るだら  
う』『成る程拷問の痛さに堪へ兼ね白状するかも知れませんが、其時は最う其手箱が大將軍の  
手に渡り取戻し様の無い時でせう、私しは何うせ捕へられる覺悟ゆゑ、今の男に何も彼も夫々  
の用意をして渡して有ます』今の男と聞き襄武は頑平の儼き姿を思出せし如く背後の木影を  
見廻すに、彼れ何れへ去りたるか消失せて影も無し 驚用意とは何の様な用意を『躬』ハイ貴方  
が或時料理屋へ平井夫人と云ふ女を連れて行き國家の秘密まで明すから妻に成れと云ひ、某々の  
兩公爵を朝廷から刎落す爲めに或囚人へ鐵の假面を被せて有ると仰有つた其次第まで手紙に認  
め、彼れへ渡して有るのです、私しが捕はれたと見れば彼れは直様或人の所へ歸附け其手紙を  
渡します、彼れは先年ピネロルの牢を破つた奴の頑平と云ふ者で、幼い時から私の件をする

忠僕ですから夫位の事は充分出来ませう』一句く明かに言ふ詞は一滴く彼の口に落し込む激  
薬に異らず、襄武は顔色の紫色になる迄に怒りたれども如何とも詮方なし。

公徳忠隣兩公爵を亡さん爲め我身が多年苦心せる事、兩公爵の耳に入らば我身は忽ち破滅な  
り、今は強弱地を替て娼陀に咽喉を握らるゝも同様なれば返事も頼には出来らず、娼陀は斯と  
見て『ナニ私も爾仕度くは無いのです、爾しては遂に鐵假面の顔を見る事が出来ませぬから成  
る可く穩便に貴方と相談を取極め度いのです、唯だ併し貴方が私しを捕へた時の用心に今申す  
丈けの手筈は定めて有ます』と云ふに、彼れ最早や止むを得ず『では篤と話の上取極やうから  
明日の午後五時、王宮の庭に在る橙花園の玄關へ來い、取次の者を出して置くから』斯く云ひ  
て襄武は馬車に飛乗り我家を指して急ぎ去りぬ、是までは旨く漕附けしも、此後は果して思ひ  
通りに運ぶ可きかとは娼陀の心を苦むる大問題なるべし。

婁武が斯までに公徳、忠隣兩公爵を恐るゝ程ならば、娑陀は何故初より兩公爵を頼り行き、婁武を滅さざるや、實は今までも幾度か兩公爵に通信して、鐵假面の事を初め、婁武の惡虐非道なる證據を知らせたる事は有り、去れど兩公爵は我手下に再び守雄の如き英雄現はれ來らずば容易に婁武と戦ひ難しと云ひ手を拱ねて時節の來るを待てる故、娑陀は其悶かしさに堪へず何時來るとも限りの無き其時節を便々と待つ可きに非ず、とて終に兩公爵に告ぐるとの言立にて、婁武を威したるなり。

幸ひに思ふ事圖に當り、明日王宮にて面會せんと約束を得たれば、此夜は宿にて頑平と種々に相談し、及ぶ丈けの手筈を盡し頓て翌日は其時間待兼て、ヴァアセーユへと指行きたり。

抑もヴァアセーユの朝廷はマアレーに在る王宮とは違ひ、數多の役人を住せる官邸あり、町人等の出入甚だ繁き事なれば、門の締りも嚴重ならず、燈花園と稱する大庭までは毎日開放しの姿なり、殊に國王路易陛下も日々燈花園に散歩するゆる其姿を拜まんと思ふもの日として、茲に集はぬは無く、路易も亦諸人に我が立派なる風采を見せ、民を子の如く懐けんと、の心あれば時を定

めて散歩を怠る事無しと云ふ、去れば娑陀も容易に燈花園まで入込みしが、昨日婁武が茲の玄關へ迎ひの者を出し置かんと云びたるを頼みに、先づ玄關に近附きて様子を見るに、我を迎ふる人も無し、扱は婁武彼の約束に負きしなるか、否々餘り我身の急し爲め、猶ほ時間の早過る者ならんと、是より凡そ二十分ほど庭木の蔭に立ちて待つに、更に何の音沙汰なければ、又玄關に近づくに、何故なるか給仕とも思しき者、彼方此方に行き通ふ様、餘ほど急ぎの用事あるに似て、又孰れよりか泣聲の如き者も聞え來る、是れ必ず唯事ならじ、何か悲む可き事變の有しにもやと、怪む心に引立られ、我身の大膽なる振舞に心附かず突々と玄關に上りたり。見れば廊下の戸も開きし儘にて別に遮る者も無ければ、猶ほ其戸の内に入りしが、矢張り大勢の人氣遣はしげに奔り廻れど外に心を奪はれてか誰一人り我身を咎めず行くとも無く、又幾足か進み入るに、此時廊下の奥よりして二人の紳士一人の人を兩脇にて扶起し、殆ど昇上ぬばかりにして、廊下を此方へ引摺り來れり、是れ病人にや夫とも又怪我人にもやと、怪みて見る間も無く、扶けらるゝ其人は即ち大宰相婁武なるを知れり。

彼れ急病に襲はれしか顔の色殆ど紫に見るまで血の満ちて、苦げなる眼を開き「オ、早やく侍醫を呼んで来い、息が出来ぬ、息が出来ぬ、直に血を取らせねば最う駄目だ」と云ふ其聲さへも虫の息なり、日頃寔武を憎む身なれど此苦みの有様を見ては幾分の憐みを催さぬ能はず、其うちに寔武は娑陀の立てる所まで連來られ、明かに娑陀の顔を見、何やら物言度げに唇頭を動かしたれども、息迫りて聲を爲さず再び言んと揉搔きしが是が命の盡る時か、忽ち最後の瘧に手足を震はせ、扶くる兩紳士の腕の上へ力も無く仆れ掛りぬ「ア、大變だ」と一齊に叫び立る兩紳士の聲に應じ四方より給仕など走り來り、上を下へと混雜を初めれば、斯る中に長居も出來ず、娑陀は宛も夢地を辿る人の如く茲に去り、再び橙花園へとは出たるも、我が手足の力抜け、俄に心まで消入る如き氣持せられて殆ど一歩も進む能はず、園の程まで來り我にも無く太き庭木へと凭掛り、暫し目を閉ぢて息ひ居たるに、此間にも行通ふ人の足音は益々繁く、小聲にて問ひつ答へつする噂、歴々と耳に入る「醫者が來たとよ、來て血を取たけれど駄目だよ」「恐しい急病だなア、昨日まで達者で有つたが『ナニ今先までよ』腦充血の様だ

とて醫者が血を取つた爲め少し直り掛たけれど直に又了なくなつたとサ「だけれど毒殺の疑ひが有ると云ふぜ」爾よ何でも巴兒麻國とか、ら公書が届き其封を切て讀掛ると直に顔の色が變つたと云ふ事だ「夫は偶然だよ、一頃梅眞女の居る頃には手紙へ封じて贈る毒藥も有るなど、聞たけれど誰も夫を見た者は無く、唯だ毒藥師が名を賣る爲に言觸らした噂で有たのだけれど何とも分らぬテ、先日猶尾の死んだのが丁度此通りで、伊太利の或國から來た手紙を開くと讀終らずに死んだと云ふ事、後で檢めると其手紙は字も書いて無い唯の白紙で、變な粉を包んだ様な痕が有つたと云ふ事だ「此様な噂を大變ですると免職だぜ」總て是等の話は給仕等が行違ふ度び互ひに洩らす言葉なれど、娑陀は梅眞と云ふ語の耳に入てより忽ち正氣に復り、又立直りて考へ見るに或は是れ梅眞女が我身の巴里へ行く手紙を見、开を浮雲き事に思ひ我身を保護せんとの心にて奇怪なる毒藥を寔武に贈りたる者に有らぬか、彼の楯尾明まで同じ死様をせしと云ふは益々様子の有氣なり、多年守雄が怨みに怨みし寔武の死したる事仇を復せしにも均しけれど、是れにて鐵假面の顔を見る我が望みは全く絶たり。

ア、此上を如何にせんと娚陀は心麻の如くに棄れ、分別も無く佇立むに、此時庭木の彼方に當り誰やら歩む如き足音するにぞ振向く氣も爲く振向き見るに、杖に凭りたる六十近き一老人、其顔に無限の威ありて、一目見るだに赫々と照る日の光に向ふに似たり、是ぞ之國王の路易なりとは初めて見る娚陀の眼にも著るし。

百十四

娚陀は國王路易の姿を見て、宛も旭に照さるゝ雪の如く消入ん心地して木影に隠れんかと思ひたれど、王は早くも娚陀を見留めて其帽を脱ぎ一禮したり。抑も此王は如何なる女の前なりとも帽を脱がず通りし事なく、召使ふ宮女にまで、逢ふ毎に禮せしとて今も猶ほ書殘さるゝ程なれば娚陀に帽子を脱ぎたること固より怪むに足らざれど、娚陀は朝廷の事を知ず、唯だハツと驚きて眼を垂れ、如何に答へて好らんとモチくするに、王は最と機嫌よく片煩に笑を浮めしまゝ徐づくと娚陀が方に歩み來れり、最早や逃るにも逃られず、只管の當惑に猶ほ首を垂

れし儘控ゆるに、王は麗しき音聲にて「オ、遂ぞ見た事の爲い美人、此方に願ひ度い事でも有ツて來たのだな」言はゞ叶へて得せんと云ふ如き調子なれど、娚陀は殆ど氣を吞まれ一言の返事も得せず、去れど其腹の中は殆ど鼎の沸く如くに動き、今此王に哀願せば却て寔武に願ふより易からん、國王として名も知れぬ女に言葉を掛けて其願ひを言出させ其上にて聽届けずと云ふ如き徳に負く事は豈も無さじ、願ふは今なり、今願はずば既に寔武も死せし後と云ひ、願ふ可き道無からんと心ばかりは早れども、咽干涸びて聲も出ず、殊に我身と云ひ守雄と云ひ此王を覆へさんと狙ひたる敵なる事を思ば唯だ顔のみ紅らみて熱きを覺ふ、王は此憐む可き様を見て一入の不便を感じしにや「ナニも恐れる事は無い言ふが好い、云ふが好い、ホー其様に羞かむ所を見ると戀人の身の上かな、何か政府の過ちで戀人が迷惑を受けて居るから夫を糺して呉れと云ふのか」此優しき言葉に勵され「ハイ」と一言、最と幽なる聲は、娚陀自ら知らぬ間に咽より洩れたり。

此時は是れ娚陀既に三十の上にして少女の如く斯く憐れまるゝ年頃に非ずとは云へ、眞の美

人に年齢なしと誰やらの言ひし如く、竊れたる中にも猶ほ消え盡さぬ美しき所あり、彼の婁武が昔の愛の衰えしとは云へ猶ほ森の中にて他の罪人に邪慳なる如く邪慳なる能はず、三日の猶豫を與へて逃去れと云ひたるにても知る可し、殊に國王路易は婁武と事かはり多情多恨の氣質にして初めに織部夫人より次に玻璃英嬢を愛し、其次に孟的班夫人に移り五十を越し今は又、有名なる醜男子スカロンと云へる貧詩人の寡婦モンテノンと密婚し、朝政を此夫人に聞きて夫が爲に婁武を疎するに至りし程なれば、婁陀に斯る言葉を掛るも怪むには足ぬならん。

扱も王は婁陀の微なる返事を聞き、又一入喜ばしげに『矢張り此方の思ツた通りだ、夫が何うした、其戀人が、ハテナ牢にでも入られたと云ふのか』牢に在る鐵假面果して我が戀人の守雄なるや、將た仇敵の帶里谷なるや知れざれど、今は言葉の引續きにて再び『ハイ』と答へぬ事能はず、又も微なる聲を洩らすに王は少し眞面目に返り『フム牢に在る戀人を許して呉れと云ふのだな、夫は宰相の預かる事で、事に由ては此方にて少し計らひ難いが』と云掛る、婁陀は全く夢中なり、我が言葉が如何なる事と爲り行くやをも考へ得ず、唯だ心の走るが儘に、

『イエ、助けて呉と申すのでは有ません、立會人の居る前で一目逢せて下さいと申すのです』言葉の終るや終らぬに王は忽ち眉を顰め『ハテナ、立會人の居る前で一目逢せるのは囚人一般に許して有る所だが、夫が叶はぬとて此方へ願ふ所を見ると餘ほど重い罪人だな、國事犯だらう』國事犯と云ふ唯だ一句に婁陀は俄然として我に返り、實に飛んでも無き事を言出し我が疎漏を悔ひたり。

國事犯も國事犯、朝廷を覆へし此王を擄にせんと遂に巧たる國事犯の大罪人なり、婁武に向ひては云ふ可き丈の事情も有り、彼の弱味を取押へ居ればこそ言出さんとしたるなれ、王に向ひて之を云ふは、身の程知らぬ沙汰の限り、如何なる事に成り行くも知る可からず、若し初より王に願はん心にて充分考へ置きし事ならば今更ら恐れ惑ふ事も無けれど、測らぬ事のみ湧出て心にも無く斯る場合に至りたる次第ゆる婁陀は心轉倒して左右の思案も定まらず、唯だ驚き迷ふのみ、國王は猶ほ眉を顰めし儘にて『誰だ其方の逢たいと云ふ罪人は』問ひ詰られて逃るゝ道なし、婁陀は宛も倒るゝ如く國王の前に膝伏たり、王泣ては分らぬ誰だ』勢貴方様に申上る

は恐れ多い次第ですが、仙頭麻有の預ツて居る鐵假面の囚人です』と言終りて咽び泣くのみ、王『何だ鐵假面』と國王も一聲叫び、顔色變へて反返ぬ。

百十五

王は鐵假面の名に驚き全く顔色を失ひしが、良ありて又泣伏せる娑陀を眺め『何うして其様な囚人の有る事を知て居る、其方は誰に聞た』最早や茲まで來りては隠し立も無益な事、之が爲には殺さるゝも厭はずと決心しての上なれば、我身の運を天に任せ何も彼も打明んと思ひ、『誰にも聞たのでも有ません初から知て居ます、唯だ彼れの顔見たいばかりに、廿年來彼れの行先々へ附廻ツて居る女です、國王は民の父とやら貴方様のお恵で叶はぬ願ひは無いと聞きます、何うぞ泣く子も同様な私へ父の恵みを掛け、此願ひをお許し成されて下されまし』と猶伏せしまゝ王の足許に這寄る様、誰か心を動かさざらん、王は殆ど持餘せし體なりしが、稍や嚴かなる音聲にて『外の罪人なら兎も角も』と言來り其まゝ口の中にて何事をか呟くのみ、王が斯ま

で鐵假面を重き罪人と見做すを見れば、彼れ何うやら帶里谷ならで我所天守雄なるに似たり、娑陀は一入の熱心を加へ又何事をか言んとするに、王は又言葉を嗣ぎ『其方は彼れが何の罪で捕はれたか知て居るのか』娑陀『ハイ彼れは貴方様の朝廷を覆へさうとした國事犯です、魔が滯で捕はれました』王は再び驚きて『其様な事を知て居る其方は何者だ』娑陀『ハイ有藻守雄の妻娑陀です』王の顔色は見るも恐ろしき程騒ぎ出せり、怒りの爲か驚きの爲か、娑陀は顔も上得されば其孰れなるを知るに由なし。

暫くにして王は何思ひけん、忽ち顔色を推鎮め『ア、此女は發狂人だな』と獨言の如くに言へり、娑陀今逃去らずば必ず發狂人と見做されて警察の手に渡され癡狂院に生涯を送る身とも成らん、去れど娑陀は此危ふさに氣も附かぬか『ハイ廿年來世間を捨て唯だ獨りの囚人に逢ひ度いため艱難親苦を重ねる女、發狂人かも知ません、なれども自分の言ふ事が分らぬ程の發狂人では有ません』國王は又獨語の如くに『フム發狂せず其様な事を云ふなら同じく牢屋へ送らねば成るまいテ』娑陀『ハイ牢屋へ送られても殺されても其様な事は厭ひません、鐵假面の顔見

ぬ時は何うせ永くは生存へて居られぬ身です』思詰たる一言には王も却て感心せし如く再び言葉を柔にして『コレ女、千六百七十三年に魔が淵で捕はれた國賊は皆殺されて仕舞つたのだ』粉』ハイ其中に唯一人だけ生捕られて鐵の假面を被せられ二十年來仙頭麻有に引廻されて居るので、彼れの罪は重くとも牢の中の苦みで最う十分償ひました、何の様な死刑よりも遙に重ひ苦みを彼は無言で受て居ります、其罪は許されずとも切ては一月、私へお逢せ下され、今も猶ほ牢の外から彼の事を思ふて居る者が一人あると云ふ事を彼れに知せて遣るぐらゐのお慈悲が、何で貴方様に有ませんか、顔を隠し身を隠し妻が自分を思ふて居るか夫さへも知る事叶はず、暗い所に廿年の月日を送る其苦みが貴方様には分りませんか』と今は恨に我を忘れ、詰る如くに打嘆けば王』イヤ其方の言ふ事は到底聽き度くも聽かれぬ願ひだ、一人魔が淵で生捕られた國賊は直にペロームの鐘臺で死刑に處せられて仕舞つたのだ、廿年前に死で仕まひ今は此世に無い人だ』

初て聞く大の秘密、左すれば今が今までも、世に無き人を有と思ひ其後に付き居たるか、彼

の鐵假面の囚人は守雄にも帶里谷にも非ずして縁も由縁も無き罪人なりしか、粉陀は餘りの驚きに、今まで上得ざりし顔を擧げ『エ、エ、何と、夫は何と、アノ時死刑に處せられましたか』王』勿論死刑に處せられた、劍を以て首を刎る其代りに鐵の假面を以て其顔を包んだのだ、生た人にアノ様な鐵の假面を被せると云ふ國法は無く、死刑を言渡したればこそ殺して地の底へ葬るのを鐵の假面へ葬つたのだ、國法から見れば夙くに此世に無い人ゆゑ、今更ら何ともする事は出来ぬ、仙頭麻有の連て居るのは假令ひ命は有にしても其囚人の死骸で有る、其方の心は察するけれど、國事犯人の死骸を生返らせ此世の人に逢はせることは國民の父と云はれる國王にも出来ぬ事だ』情無き道理を諭され粉陀は返す言葉も知らず『生て居る者を死骸とは、斯も恐しい刑罰が有ませうか』と叫び、聲を放つて又も其所に泣伏したるに國王は立去らんとして又も見返り『コレ女、死刑に處せられた罪人は墓碑を建てる事を許さぬが、唯其方の願ひに免じ墓を建て、其後を吊ふ事だけ許して遣る、其方とても宰相の耳に入れば許されぬ事有うが是も許し、其方が再び國事犯に與せぬ間は政府も捕へぬと云ふ事にして遣る』と云ひ早や彼方

へと立去りたり、是だけにても實に高大なる慈悲なれど、娑陀の身に取りては何の甲斐あらん、現在生て居る人を死人と見做し、吊ふ事だけ許されしとは、許されぬより猶ほ悲しむ可し、娑陀は踰越きて立上り、「最う何うしても死で仕舞ふ外は無い」と呟きながら立去れり。

### 百十六

國王に願ひてすら面會の許されぬ柄は此上に盡す可き手段無し、娑陀は全く絶望して王宮を退りしが、猶ほ能く王の言葉を味はひ見れば、鐵假面は帶里谷に非ずして我所夫守雄なるに相違なし、今までは孰れなりやと疑ひて兎に角も顔見度しと願ひたるも、既に守雄と定る上は面見するにも及ばぬ事、唯だ救ひ出しの一念なり。去ればとて王の云ひし如く彼れ既に國法の上より死刑に處せられしと同様にして彼の生涯は既に鐵假面に葬られたる者ならば、此後如何なる大赦ありて世界の罪人皆許さるゝとも守雄ばかりは赦さるゝ見込み無し、病死しても葬られる時の外は決して牢より出さるゝ事無き者なり、之を思へば我身と守雄とは生て再び逢はれぬ身、

魔が淵の大難が即ち死分れと云ふ者なれば、彼れを救ふこと唯だ梅真女の教への通り毒藥を以て彼を自殺させ牢の外なる寺の墓地へ葬られるを待ち、其死骸を掘り出して之に反對の解毒劑を吞せ生返らせるの外は無し。

梅真の解毒劑は既に櫛尾明に試し見て生返るに相違なしとは定まりし者の、今までは外に穩かなる道あらんと思ひ眞逆に用ひ兼て斥け居たるも、事茲に至ては最早や何をか猶豫せん、夫に附けても梅真女が今より十有餘年以前に到底殺さずば牢より出す道なしと云ひ、此手段を案じたるは流石に逞しき智慧なりきと娑陀は今更の如く感心して全く思ひ定めたれば、直に其の次第を細々と認めて梅真へ送り藥の調合を頼み遣しに、梅真よりは早速の返事あり、承知は仕たれど十余年前に作りし者は死刑の騒ぎに紛失し其後は作る機を得ず、今より早速作るとしても其原料を取集め猶ほ何とかして試験を施し、愈々鐵假面に吞ましめて差支へ無しと認る迄には猶ほ幾年は斯るならん、愈々出来上りし上は自ら携へて逢に行く故、夫れまで氣を永く待たれよと言來れり。



廿年も待し上猶ほ氣永くとは此上何年を待つ可きや、其中に鐵假面も牢屋の苦みに堪へずして自然と衰へ死ぬる事とも成らば其時こそは解毒劑ありとも何の甲斐も無き事と爲らん、大事を取るにも程こそ有れと娑陀は却て梅眞の落着き過ぐるを怨む程なりしも、去りて外に詮方なければ先づ其言葉に従ふ事とは爲たるが、夫にしても今まで潜み居たるチウリンの土地は梅眞及び幸助にも通信の便利悪く、幸ひに國王より逮捕を免すと言渡され孰れに住むも差支無き事と爲りたれば、成る可く双方へ都合好き地に住はんとて頑平と相談の上、プロボン街より遠からぬ或寺の境内へと移りたるに是が世に云ふ奇遇とも稱す可きか、寺の長老は昔娑陀が守雄と夫婦の約を堅めし彼のセント、ヨハネ寺の長老義老徳と云へる人にて猶ほ娑陀の顔をも覺ほ居るにぞ、娑陀は茲を第二の故郷の如くに見做して唯だ信仰に身を委ね、頑平は寺男の如くに働きて過すとも無く六年の月日を過しぬ。

此時までも梅眞よりは猶薬を送り來らず、唯だ仙頭麻有に從へる幸助より折々に秘密の便り有るのみ、尤も幸助は十年近き辛抱にて漸く仙頭麻有に取入り、殆ど彼れの執事とも云ふ程の

位置と爲りたれば是より時々牢番の代理をも勤むるに至るは遠くもあらじ、鐵假面の取扱ひも寔武が死し新宰相馬部滋雨(原名バアベジウ)と爲りてより幾分か寛かになりたれば、其うちに救ひ出しの機も來るべしとの事なり、娑陀の悶しと思ひ遣る可し。

斯て千六百九十八年に及び幸助よりの知らせに由れば、バスタルの典獄別毛老人死去して鐵假面の保監人仙頭麻有が其後役に進めらるゝ事と爲りたれば、近々のうち鐵假面は再び彼れの荷物となり、巴里へ送らるゝに相違なし、途中は勿論嚴重の護衛ある可きも、プロボンを經てアールに到り船にてロオンバルチウ地方に入りセンスの谷に近き仙頭の別荘に一泊するならん、外の所にては到底救ふ見込無けれど、センスの別荘にては定めし仙頭も打寛ぐ筈なれば或は好き折の有んも知れず、兎も角今よりセンスに行き怪しまれぬ様に別荘の近傍にて待ち、若し救ひ得ざれば共に巴里へ入る事にせよ、巴里は我々が最後の地なり云々とあり、今まで幾度と無く失敗せし大難事を一夜泊のセンスにて仕遂る事など思ひも寄せられど、何しろ見逃し難き機會なればと頑平は勇み立ち、長老義老徳翁へは巴里へ引越すと言做して娑陀と共にセン

スを指して旅立たり。

百十七

鐵假面が捕はれてより廿六年目に當る千六百九十八年の十一月十一日の午後四時過、センスの谷に添へる或る別莊へ異様なる一行の旅人着きたり、總勢凡そ四十人にて半分は騎兵とし、四分は劍を擔げる歩兵にして残る一分は荷物持てる人足なり、此同勢は一人の大將の指圖に従ひ一個の網乗物を取圍み最と嚴重に護衛して旅する様子なるが、抑も是れ何の行列なるや、鄙の人々は怪しき事に思ひ様々に噂すれども固より分る筈も無し、個は是れ幸助が娑陀頑平に知らせ越したる仙頭麻有の都上りなり、大將は仙頭自身にして網乗物は鐵假面乗れるなり。

扱も此一行は別莊に着くや否や、網乗物を二階の一室へと昇ぎ入れ仙頭と其甥の堀間中佐(原名ホルマノ)と云へる者着切りて之を守り、其他の者は誰も二階へと上る事を許されず、仙頭はバチスルの典獄にまで上されし其嬉しさに堪へぬ如く、毎もより機嫌好く庭の有様を眺めな

から『見て呉れ堀間、随分立派な別莊だらう、バチスルの典獄とも云はれる者が官邸の外に自分の屋敷が無いと云はれては外聞にも障るから昨年の暮買入れた、己が年取て死でもすれば此別莊は貴様の者だ、爾思ツて能く鐵假面の番をせねば了無いぞ』堀間は嬉しげに含首くに、仙頭は之を見て『別莊ばかりで無い、職務に充分勉強して新宰相馬部の氣にさへ入れたなら典獄の役目も貴様に傳はるかも知れぬ』堀『ハイ何うか爾うまで出世を仕度いと思ひます』仙『夫に附けても此別莊の見張は好いか、四方へ人を配り附て有るのか』堀『ハイ士官猿二(原名ロサルジ)と幸助に言附て置きました、猶ほ念の爲めに幸助を呼んで見ませう』云つゝ中佐が立掛れば仙頭は荒々しく引留て『サ、夫だから氣を附ると云ふのだ馬鹿め、幸助を茲へ呼んで堪る者か』と叱り附るに堀間は合點の行かぬ如く首を傾け『幸助を呼んでは了ませんか彼れは貴方のお氣に入で』仙『幾等氣に入りでも鐵假面の傍へは誰れも寄せて成らぬ、現に貴様さへも昨年の末までは鐵假面の傍へ寄せ附け無かつた傍へ寄せれば夫れが冗じて何の様な事に成らうも知れぬ、貴様が自分で行つて能く見て來い、鎮臺と違ツて構への嚴重で無い別莊だから、夜など何の様な

悪人が亂入せぬとも限らぬ、爾して幸助へは今夜門の所で寝ずの番をしると言附て来い」嚴重なる命令に堀間は畏まりて降り行きたり。

後に仙頭は立上りて窓の所に行き外の様子を一通り眺めし末、頓て彼の網乗物の所に返り、其戸を指にてトン／＼と叩きつゝ、中なる鐵假面に聲を掛け「コレ囚人目が覺めて居るのか」と問ふ、籠の中には最と陰氣なる聲ありて「ハイ今まで眠つて居りましたが」仙「目が覺たばかりと云ふのか、好しく／＼茲は己の別荘だぞ」囚「左様ですか定めしお立派な事せう」と答ふるさへも我身の不幸を悲しむと見え、其聲少し震ひて聞ゆ 仙「何だ又泣くのか」囚「イエ泣くのでは有ません」仙「爾だらう、己が出世すれば貴様も嬉しい筈だ、己と貴様とは何方かど死ぬ迄は離れぬ仲だ、今の模様では何だか貴様の方が先へ死に相に思はれるけれど兎に角死ぬ迄は己の荷物だ、併し嬉べバスチルでは重い國事犯だけ一等の室へ入れるから貴様の室もバスチル塔の一番好い所へ用意をさせて有る、今までの穴倉の仲とは大違ひだぞ」囚「何にしても幾年の間、清い空気を吸ふた事が有ませんから」仙「イヤ待て／＼、貴様は外の罪人と違ひ満更の下人で無

いから、今は其様な姿でも、築山の良否くらゐは見分る事が出来るだらう、折角買った別荘でも見て呉れる人が無くては詰らぬ、一寸いと貴様を出して見せて遣り度いなア」囚「ハイ何うか拜見が叶ひますれば、樹の葉の色を見る丈でも生返る心持が致します」仙「好し見せて遣う、貴様は神妙に己の云ふ事を聞く、年々一度政府へ出す手紙でも己の言ふ通りに書くから己も幾等か可哀想だよ、見せて遣らう、成るだけ慈悲を掛けて遣ると何時か約束した言葉も有るから、夫に面しても是位の事は好からう、其代りタツタ五分間だぞ、ア、丁度日も暮れて好い時刻に成つた、外から見ても窓の中に貴様の立て居る姿は見えぬ、サア此立派な別荘を見て、何公爵の寮に似て居るとか誰貴族の庭の様だとか褒めて呉れ」とて仙頭は我が榮華を誇るの餘り、一目別荘の風景を拜ませる氣となりて、衣囊より鍵を取り出し乗物の戸を開かんとす、中より出来る鐵假面は、如何の姿なるにや。

仙頭が乗物の戸を開き終りて『サア出る』と聲を掛くれば内より先づ片手を出し、之を杖とし身を屈めて力無げに出来るは是れ即ち廿餘年來、天の色さへ見し事なき憐れむ可き鐵假面なり、彼れ朝より今まで狭き籠の中に座り居し事なれば足も容易に延びぬと見え、兩の膝を撫摩すり徐々と身を延せり、其有様を如何にと見れば曾てビネロルの鎖臺にて姿を現はせし時より既に十餘年を経し事なれば身體も一層瘦せ衰へ殆んど歩むにも絶えざるかと疑はる、仙頭は其手を捕へ『貴様は丸で活智が無いなア』鐵『ハイ最う日々到老耄れるばかりです』仙『昔は魔が淵も渡つた癖に確かりしろ』鐵『ハイ那の頃の氣力は最う到底も有りません』身體のみかは精神まで斯くも衰ふる者なるや、元は國王を敵とし大宰相と戦ひて歐州全土を席捲せんと迄に期したる當時無雙の豪雄も、今は邪慳なる牢籠の手に掛りて力なきこと泥の如し、誰か其の身の零落を憐れまさらん左は云へ彼れ其の心の何れの邊にか一片、人に優るの氣魂あればこそ。二十六年の最長き拷問を堪忍び今も猶ほ鐵假面の苦痛を受つゝ公德忠隣兩公爵の名を口外せず命だけでも存へ居るなれ。

扱も仙頭は彼れの手を引き窓の所に歩み行きて『何うだ、築山から樹木の具合は、エ、随分廣い贅澤な別荘だらう』鐵假面は返事もせず暫しが程は唯だ夕暮の空に點々と現れ初むる星の光を見、深き嘆息を洩しつ『エ、此様な美しい世の中も有る者を』我身一人は如何なれば人生の半を暗き穴倉の底に埋め、當度も無しに死ぬる日を數へ待つ儂なき運命には陥りしぞ、口には夫と言得ざるも心は云ふより猶ほ辛き思ひならん、仙頭は聞答めて『何だと、何を口の中でブツ／＼言て居る、此先ア景色を褒めて呉れ』鐵『ハイ誠に立派な別荘です』と云ふ聲さへも涙に濡れり 仙『唯だ立派とばかりで無く、誰公爵の別荘に似て居るとか優ツて居るとか其様な事を貴様は知て居る筈では爲いか、サ、最少し此方へ来て見ろ』とて手を引きしまゝ更に一方向へ振向けば、何時の間にも上り來しやら、此方に立てる兵士あり、仙頭は火つと怒り雷より太き聲を出し『コレ、幸助、誰の許を得て上ツて來た』幸助と云ふ名を聞き鐵假面は痛く驚きたる者の如く、直ちに其の方を眺め、身を震はして、重く仙頭の手に憑れ掛りぬ、其様宛も立つ足の力まで失ひたる者の如し、幸助は恭しく首を垂れ『ハイ實は伺ひ度い事が有まして』仙『何

の様な事が有つても己の許を得ずに上つて来る事は出来ぬ』叱りながらも鐵假面の姿を見られしを悔る如く、急ぎて乗物の方に向ひ、ヨロ／＼と踏む足も定まらぬ鐵假面を引立て、力まかせに推丸めて籠の中に投込みつゝ、堅く其戸を鎖したり。

鐵假面眞に有藻守雄ならば此有様にて我が腹臣とも稱す可き幸助が猶ほ此世に在りて我を救はん目的にて仙頭に附従へるを知り、失せたる氣力も幾分か引立つならんに、空しく面を合せながらも鐵の假面に隔てられ、顔の色さへ見せる能はず、言葉も交さず引分らるゝ其の無念は如何ばかりぞ、仙頭は固より夫等の容赦無ければ、乗物の戸をメるが否や直ちに幸助の許に馳來りて其肩を確と捕へ『貴様は鐵假面を窺きに來たな』幸助は少しも激まず『エ、鐵假面とはア、厄介な荷物ですか、何でアんな物を窺きませう、今夜の寐す番を誰々に仕やうか其役割を伺ひに來たのです、他の者はドレも是も晝間の旅に草臥れたと云ひ互に逡巡をする様な譯で私の差圖を聞きませんから、貴方に厳しく割付て貰ひ、猶ほ能く叱つて頂かうと思ひまして』と言葉巧に言紛らすに仙頭は初めて疑ひの解けし如く『夫にしても此後は己の許を待たずに籠

の傍に來ては了ぬぞ、役割は後で定めて遣るから貴様は引下つて堀間中佐を是へ寄越せ』幸助は畏まりて退きながらも腹の中にて『オ、彼奴の疑ひが解けて好かつた、今疑はれては今夜の頑平の仕事が出来なく成る、危い事、危い事』と呟きたり。

百十九

明日は又早朝に出發する事なれば仙頭麻有を初め一行の人々、宵の間より寢に就き、夜の十時に至りてはセンスの別莊靜なること云ふばかり爲く唯だ塀の外に一人の寐す番人、足音高く巡廻するのみ、月は既に山に隠れ星の光のみ雲間より兩三點洩るを見るも、樹木老茂りて晝猶ほ暗き山陰なれば物色を見分け難し、斯る折りしも裏手の方にて梟の鳴く如き異様な叫び聲あり、梟は夜鳴く鳥にて其聲は昔より秘密の仕事に計むものが多く合圖の爲めに用ふる所なれば、番人は之を聞き油断し難しと思ひしか、忽ちに足音を潜め暫しが程耳を澄すに、又も同じ方角より同じ鳴聲の聞えたれば彼れ徐ろ／＼と忍びながら裏手に行き、老木の最も深く鑽し

たる邊に立ち同じく梟の聲を眞似して一聲呼びたり、察するに此聲にて誘き寄せ、眞の梟なるか果た曲者なるかを見極めん爲なる可し、夫とも番人自らも曲者の片割なるにや、此聲の終るや否や殆ど番人の足許よりノツソリと立現はるゝ一人あり、番人は暗の中にも其黒き姿を見、驚きし如く一足退きつゝ、「ア、茲に踏がんで居たのか」と四邊憚かる小聲に云へば、今現はれし暗の男も同じ程の細語き聲にて「猶だ少し早過やうかと思つたけれど」番「イヤ丁度好い刻限だ、寢ず番は己の外に二人あるが、其奴等には酒を呑せ今ヤツと眠らせた所だから容易に目を覺ます所で無い夫にしても尙陀様は」男「オ、次の驛の宿屋に潜み吉左右を待て居る、首尾能く鐵假面を攫へたなら直に其宿へ引上げて間道から伊國へ逃込む積りだ」番「夫は好いが餘ほど今夜の仕事は六かしいよ仙頭奴が仲々油断して居ないから」男「夫は固より覺悟の上だ、併し又不意に疑はれる様な手落でも有つたのか」番「ナアニ爾じや無いがな、鐵假面を二階の何の室へ置いて有るか夫れを見極めて置かうと思ひ、宵の中に己が二階へと上て行つたのサ、爾すると丁度仙頭奴が鐵假面を籠から出して別荘の自慢をして居る所サ」男「何だ仙頭が其様な事を」番「サ仙

頭と云ふ奴は意地も悪いが何事でも自慢をせずには能う居無い馬鹿者だから、自分で初めて別荘を持たのが嬉しくて堪らず、鐵假面にまで誇り度いと思つたか密と出して窓の所へ連れて来て居た、男では鐵假面の顔を見たのだな」番「ナニ顔は見えねが姿は見たよ」男「無論守雄様で有つたゞらうな尙陀様などは最う何う考へても守雄様に違ひ無いと云つて居るが」番「左様サ、何しろ最う年も取た事だから何ツちとも分らぬが鐵假面も己の顔を見て餘ほど驚いた様子で有つた、之を見ると何うしても守雄様だと己も思つた、けれども直に仙頭が驚いて己を叱り鐵假面を籠の中へ推込んだから仕方が無い」男「成る程夫だから仙頭が格別に用心して居ると云ふのだな」番「ナニ夫は己が旨く言消したけれども、何しろ根がアノ通りの用心深い男だらう」男「爾々、己も八九年彼れに捕はれて居たのだから能く知て居る」番「所で以て此通り鐵臺と違ふ別荘だから、何の様な事で囚人を逃すかも知れぬと云ひ、別して油断を仕成いのサ、鐵臺を出る時からセンスの別荘では一番用心をせねば了ぬと兵士一同へ言ひ渡した程だから」男「其奴は少し都合が悪いな、ト云て今更見合すと云ふ譯には行ぬ一か八かだ遣て見やう」と云ひ早高き城に登ら

んとする如く見上たり。

此曲者即ち奴頭平にして番人は是れ幸助なること讀者の既に察したる所なる可し幸助は頭平の手を取て『ナニ茲からは越されぬよ此方へ来い』とて猶も先の方へ連行きつ兼て隠し置きたる者と見え落散れる木の葉を掻分て一個の梯子を堀出し、之を手も無く堀に掛けつゝ自ら先上り入らんとす、頭平は之を捕へ『コレ〜お前は何をする己と一緒に働け積りか』幸『勿論さ二人で力を合せねば』頭『了ない、了ない、お前は何も知らぬ積りで相變らず堀の外を廻て居なよ、力は己一人で澤山だ』幸『だけれど』頭『イヤ旨く行くやら行かぬやら分らぬから充分に大事を取らねば了ぬ、若し失敗て己一人捕はれた所でお前さへ生て居れば巴里へ着いた上二度の企てが出来ると云ふ者、お前は何でも今まで通り仙頭の氣に入れ少しも疑はれぬが肝腎だ、是は最う娑陀様から呉々も差圖されて居るから、負く譯には了ないよ』幸助は恨めしげに『では何かお前が命掛の仕事をすのに己には知らぬ顔で居ると云ふのか』頭『爾よ娑陀様の差圖だから仕方が無いよ、夫に己が首尾能く鐵假面を引攫つて逃れば好しサ、其時はお前も一緒に逃去る

けれど若し引攫へる事が出来ず、己一人で逃去るとすればお前は其後へ廻り誰にも疑ひの掛らぬ様に仕て置ねば成らぬ』幸『夫は何うして』頭『寝ず番の一人を捕へ堀の外で叩き殺し、丁度堀から落ちて死だ様に仕て置くのサ、爾すれば其者が曲者で堀を乗越し逃しようとして轉げ落て死だのだと仙頭も爾思ふからお前も疑はれず己にも追手が掛らぬのサ爾して置けば此後再び何の様な計略でも行はれるよ、何でも味方が最うお前と己と唯二人に成つたから娑陀様も心細く、假令何の様な事を仕ても又の企てが出来ぬ様に後を濁しては仕方が無いと繰返して言はれたから、お前も其氣で遣て呉れよ幸助己は逃損じて殺されるかも知れぬが其時お前まで疑はれ、捕へられる事に成つて娑陀様を誰が保護する、廣い世界に唯一人とお爲成さるじや無いか、己は夫を思ふと涙が出る、コレ幸助、己が無なツた後で娑陀様の力に成るのは唯お前一人だから夫を思ふてお前は無暗な事を仕て呉れるな』と勇士の目に涙を浮めて説けば、幸助も之には逆らふ事能はず『好し』と云ひて承諾せり。

是れ實に決死隊の末路にして説く頭平も聞く幸助も共に斷腸の想ひならん、是より幸助は猶

ほ内の案内など語り聞かせ更に衣囊より一個の鍵を出して渡すに頑平は之を受け取り、難なく堀の頂邊に登り又も其梯子を取り上げて内に掛けスラ／＼と下り入り、幸助は又知ぬ顔にて元の如く巡廻を初めたり、知す頑平の運命如何ならん、虎穴に入るより猶危ふき業なれば彼若ビネロルの空中に射殺されたる有井の二の舞と爲すんば幸ひならん。

百二十

頑平は難なく堀を乗越えしが、中の案内は充分幸助より聞得たる所なれば少しも踏迷ふ事は無く、厩の後手より勝手口に到り、幸助より受取たる鍵を以て先づ臺所の戸を開き、忍びやかに中に入るに、裏口とても用心に怠り無く、料理番の室を初め其他廊下の右左なる室々に數人の兵士を配りて有り、幸ひに孰れも眠り居る様子なれば眞逆の時に急には出て來られぬ様、片ツばしより徐ろ／＼と其戸を鎖し、戸には外より錠を卸し『サア此通り閉ぢ込めて置けば、縦し仙頭奴が目を覺まし大聲で呼立てても、此兵士等が來る迄に己は鐵假面を小脇に挟み暗に紛れ

て逃て仕舞ふゾ』と腹の中にて呟きつゝ、猶ほ足音を秘めしまゝ階子段の見ゆる所まで進み行くに此所には思ひ設けぬ關所あり、并は外ならず段の兩脇に二人の兵士、劍を持ちしまゝ立番せるなり此兩人固より眠れる者に非ず、猶交代して間も無き事と見え太く兩眼を張開き話もせず控えて居る故、此者の眼を掠めて二階へ上り行かん事、到底思ひも寄らぬ業なり、我が力にてメ殺す事は譯も無けれど一人にて二人を合手とせば聲を立てさせぬ譯に行かず、其中に二階も下も目を覺まし我身は鐵假面に近づきもせずして逃去ねば爲らぬ事と成らん、何とかして兩人を眠らせる工風は無きや、夫とも兩人の眠る刻限まで待たんかなど様々に思ひ惱めど、空しく時のみ移す可き場合に非ず、頑平は礎と思案に支へ、如何とも爲し得ざりしが又思へば斯る廣き屋敷の事ゆゑ孰れにか裏階子の有んも知れずと又拔足にて引返し、方々と探し見れども悲しや其様の場所あるを見ず、如何にするとも彼の二人の眠る迄は二階へ登る事の出來ざるに決したり、頑平は足摺して我が智慧の及ばぬを悔めども詮方なし。

去ればとて多年の本望を果さずして空しく去る可きに猶更ら有らず、兎に角も再び幸助に相



談せん、彼れは智慧の利く男なれば何の様な思案有らんも知れずと、頑平は我を折りて又も堀の外に返り以前の如く桌の眞似をして一聲叫ぶに今度は幸助が其足許に立現はれ何うだく了ないのか、己は様子を氣遣ふて待つて居たが」と云ふ頑平は言葉短かに事の仔細を説明すに幸助は別に思案もせず「好しく、己が其二人を庭まで誘き出して遣るお前は廊下の傍の一室に潜んで居て其二人が出たと見れば直に引違へて二階へ上らねば了ないぜ」頑平「オ、其様な工風が有るのか併し後でお前が夫が爲め疑はれる様な事に成つては第一妙陀様の言附にも負くから幸」ナニ其心配は無い己は姿を見せぬからサ、併し其代りお前が鐵假面を連出して下へ降りるまで其二人が外に居るか夫は請合れぬ」頑平承知だ、鐵假面を引攫つて降て來る時ならば假令階子段の下に十人居たとて蹶飛ばして逃るから大丈夫だ、唯だ二階へ上らぬ中に物音をさせるのを恐れるのサ」幸」では直に行かう、お前は何でも其兩門の目に觸れぬ様に成る丈け階段の近くまで行き、一方の室に潜んで居るが好い」如何なる計略かは知らざれど、事も無げに言放つに安心し、幸助と共に庭に入り己は元の如く廊下を忍び、番兵の立つ所より僅か離れし一室

の中に潜み、如何にして幸助が兩人を誘き出すやと怪しみながら待つ間も無く庭の孰れかより喊哮と狐の鳴く聲聞え來る、兵士の甲なる一人は耳を欬だて「オヤ狐が啼くぞ、山里だけに色々の獸類が居るなア、先程から桌も啼いて居たが」と云ふに、乙も其尾に就き「射殺して呉れ度いなア」乙「馬鹿を云ふな、夜鐵砲を打てば仙頭に叱られるが」言葉の猶ほ終らぬうち又三四聲引續きて聞え來る、甲「此奴は茲に知ぬ顔では居られぬよ、何でも四匹か五匹、築山で遊んで居る、ソレ、ソレ、又鳴くじや無いか、君茲に居て呉よ僕は棒を以て行て投り殺す」乙「夫ぢや僕も行かふ、少しの間此場所を外したとて誰も知る者は無いから」斯く云ひて兩個は殆ど先を争ひ、狐の聲に欺かれ、頑平の居る室の前を通り、早くも後方へと出たりたり、頑平は殆ど感心し「流石に幸助だ、剛い奴だ、ア、して木の影で其地此地と縫歩き暫しの間は彼奴等を釣つて居て呉れるだらう」と呟きながら室を立出で手も無く二階へと上りたり。

是にて一場所は通り抜しも此後に猶ほ關所は無きか、頑平は斯る事を思ひもせず、早や鐵假面を手に入し心地にて、猶ほ幸助に聞置きたる室を指し忍びやかに寄り見るに室の戸は鎖して

有れど、鍵穴より明りの射るは、即ち仙頭の寢間にして鐵假面も茲に籠れるに相違なし。先づ鍵穴に身を寄せ中の様子を伺ひ見るに燈火殆ど盡よりも明るく照したる只中に猶ほ寝ね遣らぬ一人の士官あり、之が仙頭の甥とか聞く堀間中佐とやら云へるならん、彼れ室の向ふなる戸の元に椅子を置き此方に向ひて坐せる者にて、眼は宛も我が伺ける此鍵穴を睨み詰るに似たり、殊に其傍には劍も有り砲も有り、短銃も有り、我れ若し此戸を開くと見れば彼れ直ちに短銃を取上げて狙ひ打つ事必然なり、寶の山には入りたれど番人の嚴さに手を下す由も無し。

百二十一

階子の下の二兵卒は手も無く誘き去りたれど室の彼方に寢ず番する一士官如何にして欺く可きか是れ頑平の思案に餘る難題なり、射殺さるゝを覺悟の上にて突々と入行きて彼れを捕へんか捕へ得ぬうち彼れの短銃の彈丸に當り犬死するは必然なり、縦又捕へ得るとも彼れ若し聲を出して人を呼ぶか我れと組合ひ攫み合て物音立る事と爲らば我が目的は忽ち破れん、如何に

せんかと心を碎きつ猶ほ中の様子を伺ひ見るに仙頭麻有は孰れに在る鐵假面の乗物は何處に置ける、唯だ細き鍵穴より見る丈けなれば夫等の様子少しも分らず、目に留るは正面なる士官の姿のみ、或は此室是れ鐵假面の居る所に有らぬにや、鐵假面は仙頭と共に猶ほ他の所に眠れるかと一旦は疑はしく思ひたれど、鐵假面の室ならず寢ず番人の有らう筈なし此室の片隅に彼れの乗物も有り仙頭麻有も眠れるならん、室の戸を開るには幸助より得し合鍵あり今は唯だ一步にて我が目的の達する場合、茲まで來りて彼の士官に妨げらるゝとは我れながら言甲斐の無き次第なれば、頑平は遺憾遣る方なく窺きては考へ、考へては又窺くなど、幾度か同じ事を繰返せしが忽ち思ひ附く事ありと見え徐ろ徐ろと此所を立去りて廊下を猶ほも奥の方に進み室を抜け窓を潜りなどして漸く士官の居る背手へと廻り出たり。

此室は前後兩方に入口ある作りにして士官は一身にて兩方を守る爲め背の戸の、傍に座し向ひの戸を眺め居る者と知らる、頑平は斯く察したれば又も此方の戸の鍵穴より窺くに果せるかな鍵穴は殆ど士官の背に塞がるゝばかりにして、唯だ黒き一物の兩脇より僅に室の燈明の指し

來るを見る程なれば、頑平は茲に最と大膽なる思案を定め、假令ひ仙頭に出會はずとも我が顔を知られぬ様先づ携へたる頭巾にて面を包み、靜に鍵穴に鍵を入れ低く我身を沈ませて音のせぬ様其鍵を回さんとするに、四邊寂然と靜まりたる眞夜半にて今も猶ほ庭の彼方此方にて時々鳴く狐の聲の外耳に入る者なければ、士官は早くも鍵の音を聞き付けて『オ、』と云ひて立たるに似たり、頑平は少しも恐れず茲なりと含首きて一思ひに戸を開けば、立たる士官は殆ど我が頭の上に落掛るかと思ふ程の勢にて進むにぞ頑平は物をも云はず下より我が手を差延して、士官の喉首を厭と云ふほど握りたり。其業の早きこと實に電光の撃つ如くにして士官は喞の音も出す暇なし、猶ほ頑平は士官の揉搔きて床板など踏鳴らすを恐れ、喉に手を掛ると共に立上り其猿臂を上の方へ差上げて我身體を弓の如く左の方へ反せられたれば、士官の足は高く床板より離れ踏めども唯だ空を踏むのみ、士官は宛も首縊りて空中に釣るされたる人の如く取附かん所も無く空しく四方八方を蹴ながらも兩の手にて頑平の手を捕へ死際の怪力にて搔刺る其有様は見るも恐ろしき程なれど何の甲斐なし、頑平の此時の姿は宛ながら石にて刻みたる勇

士の像かとも見擬ふ程にて少しも動かさず、凡そ十分間の餘も士官を差上し儘なりしが其中に士官は全く事切と爲りたれば、頑平は眠れる小兒を扱ふ如く兩の手にて輕々と之を抱き音のせぬ様靜に床の一方へ横へたるが、死際の苦しみは明かに其顔に現はれ見張りたる眼は球も飛出るかと思はるゝ程其の周圍より血の出るを見、口は恐ろしき迄に開きて長き舌を吐けるなど、一目にてゾツとする有様なり。

流石の頑平も之には心を動かさぬ事能はず、口の中にて『コレ士官許して呉れ、人を不意打にする様な卑怯な男では無いけれど是も大事の爲め仕方が無い、氣の済む様に後で此頑平を取殺すとも祟るとも仕て呉れ』と勇士は又勇士だけの祈を捧げ、斯して更に室中を見廻すに仙頭麻有は如何にせしか其姿茲には見えず、唯だ次の間の堺に戸帳の如き者を垂れて有るは即ち寢間の入口にて彼れ其中に眠れるならん、之を開きて彼を驚かすにも及ばぬこと戸帳の外には目指す乗物の据有るにぞ、仙頭の知らぬ間に鐵假面を連れ去る事最易しと、先づ室の出口に行き最前親きたる前の戸を開き置き次に乗物の傍に行き耳を當て、聽き試むるに有難しく

鐵假面は正しく此中にて眠れるなり、身體も痛く疲れたる事と見え高く低く不揃ひなる軀の聲は啾々として死人の怨を訴ふる加く聞え來る。

百二十二

疲れ果たる鐵假面の寢息を聞き、是れが天下を震動せし大英雄の末路かと思へば坐ろに涙を催せども、夫よりは先づ多年の本望茲に届き、开を救ひ出すまでに至りし其嬉しさに堪へざれば「旦那様、頑平奴が救ひ出しに参りました」と籠に向ひて、細語きながら、先づ其戸を開けんとするに嚴重の錠ありて容易には開き得ず、寧ろ籠の儘にて擔ぎ去らんかとも思へど、六人昇の最と重き籠なれば、之を擔ぎては不便も多く夫が爲に却て捕へられる恐れも有り、今一應試みんと再び其戸に手を掛けてガサリ／＼と動かす折しも忽ち一方に人の聲あり「コレ、堀間何を其様に音をさせるのだ」と云ふ、此聲確かに垂幕の内より來る者にて、聞覚えある仙頭の聲なり、今彼に目を覺まされては事破るゝは必定なれば頑平は晴天に落雷を聞くよりも猶痛く

打驚き、エ、己をも堀間中佐と同じく一思ひに縊殺し呉れん其後にて緩々と仕事せば最早や咎むる者無からんと、頑平は蹶然と起ち將に其垂幕を排除き躍入るばかりなりしが、敵の不意を襲ふ事、勇士に取りて此上なき恥なれば、此危き場合にも夫を思ひて少し氣臆れする所あり、敵若し手向ひして來らば假令ひ五人が十人でも打殺すに容赦は無けれど、我とも知らず寢臺の上にて寢て有る者を名乗も上ず殺す事豈に頑平の本懐ならんや、今殺したる堀間中佐は全く止を得ぬ場合にして厭々ながら事茲に及びしにて、夫さへも死骸に向ひて心ばかりの言譯をせし程なれば、其恐ろしき死顔の猶ほ目の前へ横たはれる間に於て、再び卑怯なる罪を犯さんこと如何にも辛き業なりと暫し決し兼て控ゆるうち、仙頭は口の中にて何やら呻きながら又眠りし様なるは數日の旅に疲れたる爲めにも有り、我を寢ず番の堀間中佐と思ひ違へての爲めにも有らん。

眠る者を引起すにも及ばぬ事と是より又暫しの間立し儘にて伺ふに彼れ全く眠りたるに相違なし、鐵假面の疲れたる寢息と違ひ、心地能げに軀の聲さへ洩し初めたれば頑平は初めて安心

し、又もや籠の戸に身を寄せて色々と動かし見れど到底開く可くも非ず、籠の儘に持去りて叩き毀すの一方なれば、危き業とは知りながらも先づ其棒に手を掛けて提上げ見るに、重き事は重けれども寡外が一人入れたる丈なり我が力にて左まで恐る可き者に非ず『好し』と一聲含首きて籠の棒を一方へ永く拔出し其釣合を程能して己の肩にあて金剛力にて擔ぎ上たり。

之までは意外に旨く運びたれども、此時若し頑平にして仔細に籠の周圍を檢めたらんには其身の死地に入る事を悟りしならん、相手とする仙頭は古今無類の用心深き牢番とて後々までも名を留めたる剛の者なり己が出世の綱と頼む大事の囚人を斯く無難作に運び去らるゝ如き油斷あらんや、彼れマガリツト鳥を立ち出る初めよりして此別荘の備へ弛く堀なども最越し易きを氣遣ひし程なれば、茲に着きてよりも唯だ二人の兵士を二階の下に立て中佐堀間に寝ず番を命ぜし丈にては猶ほ安心する能はず、實は私に籠の中なる鐵假面の身を縛り、其繩の端をば籠の息抜穴より拔出して己れの身體に結び居しなり。個は必ずしも外より曲者の入來るを恐れての爲に非ず、唯だ鐵假面自ら籠より拔出で私かに逃去らんを恐れての用心なり、今夜初めての事

にも有らで、是まで鐵假面を諸方へ護送する度に時々斯る用心を爲し居たること、後に及びて其籠の作り方より察せられたり。

頑平は斯と知らず、既に我事成りしと思ひ其籠を擔ぎし儘、先刻開き置きたる戸の所へ突々と出するに何やら背後より引く者ありと氣の附くや附かざるに凄しき音と共に寢臺より轉げ落る者あり『己れ曲者』と叫び立る聲と共に籠の中も騒ぎ出し我肩にも最重く應ゆるにぞ何でも背後より仙頭に取繩られたる事と思ひ、手を振放さん一心にて中なる鐵假面の身の碎くるを厭はず一散に階段の所を指して採掻き行く、其間には仙頭は轉々と引擦れ立んとしては又倒れ、倒れては又轉がりつゝ、聲を限りに『曲者だ、曲者だ皆來い早く、早く』と碎くるばかりの聲を發し、早や下の方にては此聲を聞附けたる兵士等が騒ぎ立つ音も聞ゆ、頑平は背に重荷を負ひながら前後より敵を受け全くの死地に陥りて最早や籠を捨つるの外逃るゝ工風無しと思へど、初めより命を的の仕事なり、命は捨てても此籠は捨難しと猛虎の暴れて狂ふが如く、揉みに揉みつゝ繩に梯子段の所に來れば、果せるかな下よりは狐狩に出行きたる以前の兵士、周章ふため

きて登り来らんとするを見る、殊に此の一轉瞬の間に背後なる仙頭も漸く腰の短銃を取出し得て、轉がりながら一發放つに一間と離れざる間なれば狃ひ違はず籠を射貫しと見え籠の中より鐵假面が苦と一聲、死際の如き聲を洩すを聞き、猶ほ其彈丸は勢ひ餘りて頑平の肩の邊りに突入りたり、之には勇士も怯まぬ能はず、籠を背後へ投捨ると等しく我身は前に突のめり眞逆様に落行きて、下より上る三人の兵士と團子の如く重なりて碎くるばかりに床に着きたり。

百二十三

頑平は肩を射られて二人の兵士と一團まりに楮子の下へ轉げ落ち、暫しが程は上になり下になりて組合しも漸く二人を組伏て立得たれば猶ほも二階へ上らんとす、彼れ抑も如何なる大膽ぞ、去れど其意を果し得ず繩に階子を三四段飛上りし頃下なる二人が又立來り、兩足に揃み附き引擦たれば前に倒れて引卸され又も彼等に組敷れたり。事茲に至りては天下無双の剛勇も最早や施すに力なく殊には仙頭も此暇に起直り短銃を持しまゝ大聲にて士卒の者等と呼立ながら

二階より下り來りたれば、此上如何に働くとも鐵假面を奪ひ得る工夫は無く唯だ彼等に捕はれて死恥を晒すのみなり、今は唯だ逃れ去る一方なれば無念の齒を嚙メながら再び彼等を刎返し立上り、手近き一人を引捕へて手球の如く仙頭に叩き附け、仙頭が倒るゝを見て、又飛掛る一人をも同じく二人の轉がれる處へ投げ附け、三人が起んとして揉く間に元入込みたる勝手口を指し一散に奔り去るに『射殺せ！』と怒り叫ぶ仙頭の聲は、追來る二人の聲と共に僅か我後一間ばかりの所より聞こゆ、若し此所へ敵に幾人の加勢あらば逃果せる事到底出來まじきも幸ひ初めの用心にて番兵の室を悉く鎖し置きたる爲め、彼等唯だ周章惑ひて或は『明る！』と云『誰がメた鍵は何處だ』などゝ口々に叫びながら、碎くるばかりに戸を叩く聲宛も百雷の響くに似たり、中には一二室よりは走り出たる兵士も有れど事の様子を知ざれば或は頑平に突當りて跳飛され、或は追來る仙頭等の足に負はり共に打倒るゝなど、云ふばかり無き混雜を極むる間に頑平は漸くに裏へ出で、梯子を置きし塀の所へと奔りたり。梯子は猶ほ元の儘なれば急ぎて之に登る間も早や足許まで追來れる兵士も有り、殊に思ひ／＼

に打出す鐵砲は幾發か頑平の耳を掠めて去り其危険一方ならねど幸ひに當らざれば、直ちに堀の上に立ち既に幾人か來て手を掛けたる梯子を捻取り力任せに敵の群がれる只中へ投遣りつ、其身は頭の碎くるをも厭はず堀の外へと飛下りたり、一同の兵士は梯子無ければ追行く事も出來ずサア『裏門の戸を開け』と云ふ仙頭の聲に應じ裏門の方へ波の如く推行けり。

頓て裏門を開しも外はセンスの谷に連る一面の林なれば固より捕へ得る筈も無く、仙頭は地團太踏みて悔しがるに此時一兵士の聲として、彼方の堀の許にて『ア、曲者は堀から落ち茲で頭を碎いて死で居る』と云ふ、仙頭は急ぎ其所の到り見るに成る程其言葉の如く打倒れたる曲者あるにぞ『此死骸を庭の内まで引て來い』と命じ、其身は腹立しげに舌打しながら一同に先んじて中に入りしが、斯る中にも彼れ猶ほ後に残したる鐵假面の逃去るを恐るゝにや急ぎて又二階へ上り暫くして降り來れり、是れ多分鐵假面が先刻我が彈丸に當りしを知るが爲め第一に其傷の輕重を檢め次に其傷を輕しと見、再び我室へ閉ぢ籠め置きて來りたる者なる可し、是より彼れは角燈を取り庭に出るに宛も一同が茲へ死骸を運び來りし所なれば燈に照して檢め見るに、

今の曲者の如く顔は包まねど如何にも堀より飛降りて頭を碎きたる者に似たり。

若し仙頭にして探偵の如き智慧ありて其肌を探り見ば此死人今より卅分間も以前に事切れし者にして既に身體の冷たるを知り、猶從つて今の曲者にあらぬ事を知るならんも、彼れ周章たる際と云ひ斯くまでは氣も附かず『ア、今の曲者だ』と云ふに一人も之に逆ふ者なし、中には小聲にて、『でも今のは頬冠を仕て居たぜ』と云ひ『ナニ堀から飛んだとき頬冠りは風で飛んだのだ』など呟き私かに評し合ふ者あれど外に死人の有ふ筈無ければ忽ち曲者と決したり、仙頭は猶ほ其死顔を照し見て『何だ此奴は今夜寝ず番の一人に加へた兵卒だが』一人『左様サ寝ず番の一人で無ければ到底も外の者が忍び入る事は出來ますまい』仙『此奴がアレ程強いとは思はれぬが待て待て寝ず番の頭は誰だオ、幸助だな、誰か幸助を呼んで來い』幸助は既に一同の中に在り聲に應じて出來り『イヤ十二時から二時迄が此奴の番で私しは二時の交代を待つて居ました、其内に家の中で非常な物音がしましたから飛んで來ました何しろ寝ず番が自分で曲者になつたのだから致方が有ません、夫にしても家の内の寝ず番は何をして居たのでせう、此奴の

忍び込むのを知ず居たとは「此一言に仙頭は初めて二階の下に屈竟の兵士二人を立て置たる事に心付き、幸助の詮議は其方退けと爲り早速二人を呼び問糺すに、二人は流石に狐狩の事を明し得ず、多分は裏手の窓より攀上りたる者ならんと云ひ終に孰れが孰れなるや取留むる所なし、仙頭麻有は最不興氣に二人を見「何しろ貴様等には落度が有る、巴里へ着いた上、詮議するから爾思ツて居ろ」と云ひ更に一同へ打向ひ「何しろ此別荘は物騒ゆゑ明朝は早く立つ皆其積りで用意しろ」と言渡せり、是にて幸助は少しの疑ひをも受けずして済みたる事切ても幸ひと云ふ可きか。

百二十四

大膽なる頑平の企ても九分まで運びたる所にて破れ終に鐵假面を救ふ能はず、鐵假面は是より凡そ八日を経て仙頭に護送せられし儘巴里に着き、千六百九十八年十一月十八日を以て再び大牢獄パスチルへと入れられたり、是れ實に鐵假面が先に此牢獄に入られしより二十有六年目なり、娑陀は是と共に巴里へ來る事能はず途中にて頑平の肩の傷を治療する爲め凡そ二月の餘を費し其漸く癒るを待ち翌年の二月の初めに頑平と共に巴里に着きたり。

一旦國王より我罪を許され孰れに住むとも差支無き身となりたれど、センスの別荘を襲ひし事、或は我が一類の仕業と思はれ再び目を着けらるゝ事となりしやも知れねば、大事を取りて深く潜むに如く事なし、前とは違ひて織部夫人も梅真も巴里を去り今は此土地に一人の知る邊も無き事なれば孰れにせんかと案じたるが、猶ほ鐵假面救ひ出しの目的を捨ぬゆゑ、兎に角もパスチルより遠からぬ寺の中に潜むこそ善らんと、頑平に探させしに、茲に又不思議と云ふは先頃まで我身が尼の如くに隠れたる彼のプロボン街道の寺の長老義老徳と云へる人がセントポールの寺に引移りし事を聞出したり、娑陀は數年の間此長老を父の如く敬ひし事なれば早莊又其寺の境内に住居を定め、朝夕守雄の冥福を禱りながら私に眞梅へ宛てセンスの別荘にて失敗せし事を告げ最早や兼て約束せし毒藥の外、何の思案も無き事と爲りたれば成る可く早く調製して送り呉れと云遣りしに、其翌年の春に及びて梅真より漸く毒藥と解毒藥の二品を送り來り、



猶ほ之に添ひたる手紙には左の如き文句も有り

此薬は妾腹心の者に計り死刑と極りたる巴兒麻國の囚人に試み、一旦殺して又巧みに生返らせたる者なれば、決して氣遣ふ所なし、鐵假面に毒を吞ませ彼れが死して葬らるゝ時は四十八時間の中に其墓を掘出し解毒劑を吞ましむれば生返る事疑ひ無し、猶ほ妾自から忍び行き力を合す積りなりしも妾が先に梢尾明と宰相賽武に毒薬を送りし事、幾分か佛國朝廷の疑ふ所となりしか爾來兩國の間に何と無く敵意募り私かに戦ひの用意を爲す有様なれば妾忍び行く能はず、但し鐵假面救出の上は直ちに當國に來られよ云々

梅眞の來らぬ事残念の次第なれども、唯だ幸ひには彼の幸助が今も猶ほ仙頭の氣に入られバスチルに使はれ居て時々娑陀の許を尋ね來る事も有る程なれば、幸助の力にて此事行はれざるにも非じと或時窃に彼の藥を幸助に渡し折を見て鐵假面に與ふる事に爲せしが、何しろ大秘密の囚人にして仲々幸助の近寄り得る次第ならねば年一年と空しく過し終に五年目の末なる千七百三年の十一月とはなりぬ。

此間鐵假面は如何にせしやと云ふに彼れ仙頭の短銃にて孰れかを射られしと見え巴里に着きてより幾月の間は醫師の手當を受け居る様なりしが、其後傷所も直りしと見え日曜日の説教室へは外の囚人と同じく引出さるゝ事と爲れり、尤も日曜日の送り迎へば受持の者ありて幸助の役目に有らねば幸助は一度も其姿を見る能はず、唯だ其役の者を欺して色々と聞取りしのみ、兎に角も幸助自ら其送迎への役目に用ゐらるゝ事と爲らずば彼の藥を渡す可き便り無き故、幸助は只管其事にのみ心掛け居たるに、五年の辛苦空しからず、其の十一月の初めより彼れ番人の一に加へられたれば愈々其時至れりと打喜び、早速娑陀と頑平にも其旨を知らせ來れり。今までの計略は悉く今一息と云ふ所にて食違しも今度ばかりは豈も違はじ、首尾能く毒薬を手渡し、鐵假面が之を吞むに於ては死せずと云ふ筈は無く、既に死すれば葬られぬと云ふ筈なし、葬られし者を掘出し之を生返らせるに於ては何人の疑ひをも受けぬうち巴兒麻國に逃行く事最易ければと、娑陀頑平の兩人は十一月一日よりして日曜日の來るを待居たり。

此十一月は四日が第一の日曜なりき、此日は即ち幸助が鐵假面を説教場に送り行く日なり、毒藥を以て彼れを牢より救ひ出す最も恐る可く又喜ぶ可き日なれば、娑陀様は様々の思ひを胸に疊みて此日を待てり、牢屋の苦痛を救ふ爲とは云ひながら妻の身として所夫に毒藥を吞ましむること如何ある可き、毒藥にて所夫は死し、解毒劑を用ふるも再び生返らぬ事と爲らば如何にせん、其死骸を掘出して若し我が所夫に非ざりせば如何にせんなど、取つ措つ思案に暮れ空しく胸のみ騒がせる間に漸く四日とは爲りたれば、娑陀は頑平と共に寺の堂に上り、一日を祈りに暮し頓て夜に入り我住む庵に歸り來しに幸助よりは何の便りも無し。

扱は若し失敗りて仙頭に見咎められ其藥を取上げられしのみならで其身も牢の中へ投込まれしには有らぬか、孰れにしても氣遣はしきの至りなれば幾度と無く外に出で彼方此方を眺め渡せど人氣の絶えたる寺の構内にて、耳に入る足音も無し、頑平も此有様を見るに得堪えず、私

しがバスチルの近邊へ行き様子を探つて來ませう」とて毎もの如く甲斐甲斐しく出行きしが、凡そ一時間も経ちし頃歸り來り「ア、漸と分りました、私しが典獄仙頭の家の前に隠れて居ますと中から幸助が出て來ました、物も言はずに此紙切を私しへ握らせて立去ました、何でも誰か人を頼み貴女の許へ届ける積りで書て居たのだと見えます、サ、早く讀んでお聞かせ下さい」と差出せり、娑陀は震へる手にて開き見るに、四寸角ほどの紙切れに認めたる其文字、「今日は初めて故、思ふ様に行かざりし、此次の日曜に渡す可し」云々と有り、娑陀はホツと安心し「ア、幸助が無難でさへ有れば何も氣遣ふ事は無い、次の日曜まで待ませう」と呟きしが、此次の日曜は即ち十一日なり、此日も同じ思ひにて待暮せしに何の便りも無く空しく翌日の午後及びて送り來りたる其手紙に今日も渡し得ざりき此次には期ツと」と唯是だけの文句を記せり、成る程外にて思ふと違ひ、秘密の囚人に品物を渡す事ゆゑ仲々六かしき事なるべく、若し過つて仙頭に見破られんより寧ろ日を延べ無難なる時を撰ばんと充分大事を取れる者なる可し、娑陀は斯く思ひて諦め此又次の日曜なる十八日を待つ事と定めしに其うち十八日と爲りた

れど又幸助より何の音沙汰なし。

三十年來殆ど絶望の谷底に身を埋め如何なる辛苦も堪得ずと云ふ事無き娑陀なれども、此時ばかりは最早や我身も我心も絶望に消入るかと思はれ殆ど待ちて居る氣力無き程となりたれば、翌日は又も寺の堂に入り神に向ひて我命の今一月續かん事を祈り、猶ほ幸助の首尾能く彼の仕事を仕遂ん事を祈り午後の六時に至りて漸く心も落着しを覺えたれば堂より出て我庵に歸らんとするに足踏躑きて歩み得ず、纒に頑平の手に縋りて歸り見れば戸口に何人か立るにぞ驚きて踏留るに彼れは我が姿を見て我より先に庵の中に隠れたり、冬の日の短くして六時とは云へ早や全く夜に入りて其顔を見分るに由も無ければ『娑陀頑平今のは誰だらう』と問ふに『ナニ幸助ですよ』と答ふ、扱は愈々便りを聞かせに來りしなるかと、娑陀は内に轉び入り頑平が火を點すさへ待遠しく『何うした幸助早く、サア早く聞かせてお呉れ』と聲を震はせ問掛れば幸『ハイ首尾能く行きました最う事に寄ると死だのでせう』殺すは覺悟の上とは云へ死んだと聞きて今更に色を變へ『何うして』幸『何うして、ハイ昨日の日曜に説教室の入口で外に人が居ません

から渡すは茲だと鐵假面に彼の藥瓶を握らせて、お呑なされば助かりますと、一言其耳に眩きました、鐵假面は合點が行たと見え、唯だ含首いて説教室へ入りました、何でも彼れは私の顔を知て居るに違ひ有ません初て私に手を引かれたとき彼れの手は震々と振りました『娑陀夫では矢張り守雄です』幸『夫から説教が終つて出て來たとき彼れは無言で其瓶を私へ渡しましたが見れば最う空に成つて居ました、何でも説教室の中で、誰にも見られぬを幸ひ呑乾した者と見えます、夫でも瓶の捨所が無い爲め私へ返したのは露見せぬ様捨て呉れと云ふ心かと思ひました』娑陀は聞來るに従ひて所夫守雄が老て且つ衰えし有様を想遣り迫來る涙を留め得ず、頑平も同ず想ひに目を暫叩きて聞居るのみ』幸『其時早や毒藥が廻り初めたか廊下を外へ出ぬうちに、彼れは足も立ぬかと思はるゝ程私の手へ密掛りましたが愈々庭へ出た頃は最う一歩も進みませぬ、其有様を仙頭と少佐ロサルジが見て抱き上げてバトーデエ塔へ連れて上りましたが、夫から此寺の長老の義老徳氏も醫師と共に迎へられました、尤も義老徳氏は説教が終つたばかりで未だ歸らずに居たのです、夫ですから殊に由ると昨夜の中にも死んだのかと思ひます、尤も

私は直に外の仕事を言附られ今まで其方に掛つて居た爲め貴方へお知せ申す事も出来ませんでした」と事細かに言來る。

之を本篇の初めに記したる牢番ジャンカと云へる人の手帳の文句に照さば猶一層明了ならん、其文句を左に再記す

常に鐵の假面を被り居たる誰とも知れぬ彼の囚人は昨日の日曜に例の如く説教を聞きしが其後にて直病氣となり左まで危篤とも見えざりしに夜の十時頃假面の儘にて死したり、長老ギロッド氏は其病の床に臨み種々此人を慰めたり云々、此人最早や死際なりし故、一身の事を長老に打明けしや否やは知らず云々  
幸助の語る所は即ち此記事と同一の事柄なり。

### 百二十六

毒藥の略計既に行はれしからは、鐵假面の遠からずパスチルより出さるゝ事は確なり、鐵の假面を被されしまゝ三十年の憂月日を厳しき牢屋に閉込められ、漸く年の明けて此世に出さるゝは其身が死人と爲りて後なり、牢の中に葬り置きたる者を更に地の底へ埋めん爲なり、世界に又と例の無き此不幸極る人が我が所夫の守雄かと思へば娑陀は殆ど涙も出ず、暫し無言にて控ゆる傍より頑平は幸助を迫立て『サア幸助、お前は是からが大事の場所だ、鐵假面が何時死で何時葬られるか夫を見落しては成らぬから早くパスチルへ歸るが好からう』幸助は立ながら『夫は最う何よりも手易い事だ、其中仙頭に疑はれると了ぬからドレ歸る事と仕やう』娑陀は漸く口を開き『では幸助、葬式が分り次第直に知せて來てお呉れ』幸助は心得て立去りしが、此翌廿日の朝に及び娑陀が漸く起出し頃幸助は又來り『愈々今日の午後此寺の裏手に在る墓場の隅へ葬る事と爲りました、コレ御覽なさい』と云ひ一通の手紙の如き者を差出せり、娑陀は受取りて之を見るに、典獄仙頭より此寺の長老義老徳氏に宛たる通知書の如き者にて其文『彼の囚人愈々貴寺の墓地に葬る事と致し、葬儀の費用は四十リブルにて辨じ度く候間、其積りに川意御命じ被下度候、葬儀は少佐ロサルジ氏と下役レール氏が執行ひ猶ほ死亡登録にも右

氏が立會の儀に有之候故、其御積りにて囚人の本名を御記し置下され度候囚人の本名は「Marchal」と申し候」とあり。

娑陀は讀終りて「何だ囚人の本名マアチエル」と驚き叫び若し我が目の見損ひには有らぬかといふ如く、再び讀直し「幸助、是れが鐵假面の葬式に違ひ無いか」幸「何で違ひます者か、外に今日葬る死人は有ません、夫にロサルジ氏が先刻も仙頭に向ひ假面の儘で葬るのは餘り可愛相では無いかと云ひました、爾すると仙頭はナニ生て居る中さへ假面を被されて居たのだも死んだ後で假面の儘葬るのが何で可愛相な者か政府の嚴命で死んでも假面の儘葬る事に初から極つて居る」と答へました、成る程マアチエルと云へる此葬式が鐵假面の葬式に相違なし、鐵假面が本名がマアチエルなりとせば、彼れは守雄にも帶里谷にも非ざりしか、左すれば我身は名も知らぬ滿更の他人をば三十年の今日が日まで守雄か帶里谷の中と思ひ救ひ出さんとせし者なるか、娑陀は顔色の變るまで驚き惑ふに幸助は夫と見て「ナニ事に由ると守雄様が初めて捕はれたとき己の名はマアチエルだと斯う仰有つたのかも知れず、或は又仙頭が好い加減の名

を附たのかも知ません、何しろ今日の午後四時に葬りますから、今夜掘出せば分る事です、魔が淵で捕はれた一人が其鐵假面を被せられた事は貴女も私もベロームの鐵臺で見たのみか、其時の榎尾明の言葉でも分つて居ます、決して守雄様か帶里谷の外では無いのです、貴女が國王から聞た言葉でも充分明白では有ませんか」成る程充分明白なり。

仙頭が如何なる名前を此手紙に記したるにもせよ鐵假面は有藻守雄の外に無く、若し間違へば帶里谷なり、夫も今夜は掘出して改むる事なれば今より怪むにも及ばぬ事と、娑陀も漸く我心を鎮め其通知書を元の如くに折疊みて幸助へ渡せしが、愈々此日の午後及びバスチルより此寺へ一個の棺を送り來れり、擔ぐ人足は四人にして幸助が之に附添ひ、猶ほ正服を着けたる二人の士官が前後より見張り來るはロサルジとレールの二氏なる可し、娑陀も頑平も物影より眺め居たるに棺は先づ本堂に入れ、之に長老義老徳氏が式の如く祈禱を捧げ、終りて墓地へと送り込みたり、是より夜に入り愈々其墓を發く迄は僅に數時間の暇と云ふ可し。

此日も既に暮れ、夜の九時とも覺しき頃、セントポール寺の裏庭に忍び入る二人の男是なん  
 頑平と幸助なり、晝も寂しき墓原なるに況してや遙か離れたる往來にも人の氣絶えし刻限なれ  
 ば靜かなること譬ふるに物も無し」幸「コレ頑平靜かに歩め、未だ寺の者が起て居るかも知れぬ  
 から怪しまれると了さないよ」頑「起て居たとて構ふ者か、此寺の長老は義老徳氏と云ひ昔秘密の  
 箱を埋めた那のヨハネ寺に居た人で、娑陀様を我子の様に仕て呉れるし、己も寺男同様にして  
 居るから」幸「成る程爾だ、ヨハネ寺に居た人だな、道理で見た事の有る様に思つたて、ア、夫  
 で分つたお前は先刻アノ長老が棺の傍で祈禱をする時の顔色を見たか」頑「オ、見たよ、何だか  
 毎もより悲し相に見えたから己は變だと思つたが」幸「爾サ、アノ長老は鐵假面の死際に招かれ  
 て身の上話しを聞たから、扱は此不幸の囚人が昔我手で婚禮させた男かと思ひ色々感じが起  
 たのだらう、事によると娑陀様の所夫だと氣が附たのかも知れぬ」頑「爾だ爾だ、氣が附いたに

違ひ無い、夫だから足音位はアノ長老に聞れても構はぬと云ふ事よ、サア急げ〜」幸「馬鹿を  
 云ふな、何の様な長老にでも聞附られては了らないよ、墓を發いて其死骸を掘出すと云ふのだか  
 ら咎められるは必然だ」頑「でも急がねば時間が無いもの、好いか鐵假面が死だのが一昨夜の十  
 時だぜ、今夜の十時で丁度四十八時間になるのだから早くせねば追附無い、梅真女の送つた藥  
 は死でから四十八時間の中に吞せると有たぢや無いか、若し時間の遅れた爲め其効目が無く成  
 つて、守雄様が生返らねば何うするか、己は夫を思ふと氣に掛て、氣に掛つて日の暮るのを待  
 兼た、娑陀様が九時まで待てと云無ければ己は六時頃に掘出しに来る所で有た、サア詰らぬ事  
 を心配せずと早く来い」と頑平は幸助を引立て引立て、石塔は踏倒し生垣は飛越ゆる程の勢  
 ひにて四邊も構はず進み行くは無理も無き次第ならんか。

頓て晝の間に見覺え置きたる鐵假面の墓に着けば頑平は必死と爲り置石を跳退けつゝ、鐵音  
 高く掘初むるも、實は三十年來救はんとして救ひ得ざりし我が主人我が大將有漢守雄に再會す  
 る嬉しさに我を忘れての事なる可し。若し此死骸を掘出せし上、愈々守雄に相違なく、且は首

尾能く生返らせる事を得ば實に枯木の春に逢ふ譬へにして是に増す歡び無ければ、幸助とても何をか猶豫せん蹴を揃へて掘る土は先刻埋めしばかりにして最柔らかなれば僅か十分ばかり働く中に棺の表既に現はれ、夫より五分間にして全く掘出し果せたり、頑平は蓋の土を撫落しながら「棺の儘で持て行かうか」幸「爾サ蓋を外し死骸だけ取出して持て行く積りだツたが好陀様が待兼て居られるだらう」頑「夫に好陀様より我々が先に棺の中を見ると云ふは事の順が違ふから」幸「爾サ棺の儘で持て行き庵の中で開けて見る事に仕やう、死骸さへ取出して生返らせれば後は何うでも好い、我々は今夜の内に此所を立去るのだから」と斯く云て幸助が棺の片端に手を掛く頑平れば「夫に及ばぬ」と云ひ靜に取上げて我肩に載せ、主人を脊負ひし心得にて庵の方へ立去るに、先程より物陰に身を隠し、二人の仕業を窺ひ居たる一人あり二人の立去る其後より窺に又從ひ行けども、二人は心茲に在らず夫と氣の附く由も無し。

斯て庵の戸口に到れば、好陀は氣遣はしさに身も落附かぬ事と見え立ちし儘にて戸口に在り「何うした、何うした」と急ぎ問ふ幸助先づ其手を取りて内に入れば、頑平は棺を座敷の眞中な

る燈の許に卸し「サア是から開くのです」と答ふ、三十年來の大目的茲に初て達せしとは云へ好陀は嬉しさより恐ろしさの先立ちて戦々と身を振はせ重ねて問ふ聲も出す、幸助は夫と察し「吾々が死骸を取出すまで貴女は次の間に祈禱してお出成さい」と云ひ穩かに推遣れど次の間にも入る能はず、立つ足の力さへ失ひし如く其所に撞と伏し顔も得あげで祈り初めぬ、幸助も餘りの痛はしさに再び振向て見る能はず無言にて棺の許に來り兼て用意したる釘貫などを取出し頑平と共に徐々棺の蓋を開くに、棺は固より粗末なる作りなれば幾時をも經ぬうちに其蓋は開け放れたり、中は如何にと覗き見れば一面の白布にて死骸の上を包みあり、氣味悪けれども先づ之を取退るに下より現はるゝ其死骸は鐵の假面を被りたる儘横はれるにぞ、幸助と頑平と左右より手を入れて病人を起す如くに抱起し徐々と外に出して有合す腰掛の表に坐せたり、其有様は先にペローム鏡臺にて好陀と共に幸助が偷み見たる彼の囚人と異なる事なく、其時彼れが棺尾の邪慳なる言葉を聞きて假面の中にて叫びたる凄じき其聲さへも思ひ出さる、幸助は既に一たびバスタールの堀の外にて荒武者相須根の鐵假面を脱したる經驗あれば、今更ら思惑ふ事も

無く落着て其假面を解き初むるに、娑陀も漸く心を鎮め得たると見え立來りて頑平と共に鐵假面の顔の前に廻り、假面の開くを待ちて居るに幸助は間も無く假面を外し終り、能く見ゆる様其死顔を燈光の方に差し向けたり。

是れ守雄なるか帶里谷なるか、娑陀は一目見るよりも魂消るばかりの聲を出しキヤツと叫びて悶絶せり、頑平も幸助も續いて其顔を伺き見て一様に打驚き『エ、エ』と叫びて跳返れり。

百二十八

假面を脱がしたる死骸の顔、有藻守雄の面影ならんと思ひきや見るも恐ろしき骸骨なり、骸骨にして僅に其前額と頬の邊りに黒き干涸びたる皮を残り、嗚呼守雄は一昨夜死してより僅に四十八時間の間に早や肉腐り血爛れて骸骨と無りたるか、否々、否、是れ守雄の死骸に非ず曾て黒頭巾に顔を隠しヨハネの寺にて秘密の箱を掘出さんとせしのみならず、其後も一同に附纏ひ幾度か一同を驚かしたる怪物なり。其の臉の流れ盡して圓き眼球を露出したる、其鼻の腐

れ消えて一つの深き穴と爲りたる。唇無くして長き齒の尖り出たるなど少しも見擬ふ所なく殊に其頬より額の邊りまで、干涸たる皮の表に宛かも豕の毛の如く此所に一筋、彼所に二筋、長き毛の最と疎らに延びたる様、恐ろしとも醜しとも云ひ様なく、人に非ずして全くの怪物なり。曾ては彼れ斯る恐ろしき假面を被り其上に黒き頭巾を被り居る者ならんなど疑ひたる事も有れど、假面には有らで、素顔なり、成眞正銘の怪物なり、娑陀が悶絶する迄に驚きしも無理ならず、察するに此者、己れの顔の斯も醜く誰一人恐れぬは無きが爲め止を得ず頭巾に其顔を隠し居たる者なる可し。

夫にしても此者は何者ぞ何時如何にして鐵假面を被せられたる者なるや、彼れは眞成の鐵假面がペロームよりパスチルに移され、パスチルよりピネロルに移されたる時まで猶ほ巴里に徘徊し、何うやら政府の手先の如く使はれ居しは確かなれば、彼れが何時の間にやら鐵假面を被せられ、今一同に掘出されしか訝しと云ふも猶ほ餘り有り、幸助も頑平も唯驚きし儘一語をも發し得ず、暫し目を見張れるのみなりしが、此時『ウーン』と一聲叫び、漸く我に返りし



は今悶絶せし娑陀なり、二人は初めて娑陀の事に心付き、頑平は早速に抱起さんとて、其所に身を屈め幸助は又娑陀を再び驚かせては成らずと云ふ如く、彼の白布を棺より出し之を死骸の顔に掛けたり、固より娑陀の悶絶は唯だ一時の驚きより来りし者にて介抱する間に全く元に復りたれば、是より三人首を鳩め事の評議を初めたるに、何しろ此度の計略も全く破れたる者にして仙頭麻有が眞成の鐵假面の死骸と此死骸を取替へて之に鐵假面を被せたる者なるや、夫とも外に仔細あるや夫等の事は知る由なけれど、兎に角にも梅眞の智慧を以て最後の計略と定めたる其計略が外れしからは此上に施す可き手段なし、様々の評議の末にて此怪物に蘇生劑を吞ませ、生返らせて尋ね見るも亦一つの手段なる可し、其身の素性より如何にして何時牢に入られしやを問ひ、猶ほ其知れる丈の事を問はゞ又如何なる手掛りを得んも知れずと、漸く茲に決したれば幸助唯一人にて死骸を次の間に抱き行き、梅眞より差圖されし通りに蘇生劑を吞ませたり。

是より凡そ一時間ほどを経、夜も早や十二時を過るに至れど怪物は生返らず、今まで梅眞の

幾度も試したる靈藥にして効目の無き筈なきにと一同怪しく思へども生返らぬ者は詮方なし、察するに此藥既に調製より幾年を経し事なれば其功を失ひし者なるか、夫れとも怪物が死してより四十八時間の上を経し爲ならんか、其原因は孰れにしても一同の絶望は少しも替らず、茲に至りて又誰を恨み又誰にか訴へんや、三人同じく首を垂れ唯だ溜息を吐くのみにして此上の思案とて浮ばぬ様實に憫む可しと云ふも中々なり。此儘に置たらんには三人も夜の明るまで考へ込み忙然自ら失ふに致らんかと思はれしに、斯る所へ靜に庵の戸を開き入来る一人あり、是なん此寺の長老なる義老徳翁なり、翁は憐みの涙を眼に湛へて『ア、不幸な子供達だ』と打咳き打萎れたる一同の様を見遣りぬ、初めて夫と氣附きたる三人のうち幸助と頑平は驚きて立上り、鋭き眼にて長老を睨み詰むるは油断ならじとの用心ならんか、娑陀は椅子より下に落ち膝の儘にて長老の許に這寄り、攀登る如く長老の膝に縋りて涙ながらの聲も細く『好く来て下された、貴方の外に吾々を導く者は有ません、貴方は不幸な囚人の言葉を聞きました、彼れは何者です死際に何と云ひました』長老は拂ひ退くる力も無く、来りて此方の椅子に墮り『罪深い

事をする子供達を救ひに來ました」と呟きたり、先刻墓場より一同の後につき來りしも此長老なる可し。

是より長老は如何の事を言出すや。

### 百二十九

實にや人、水に溺れて揉搔く時は、助かり度き一心にて、流れ來る木の葉にさへ舐み附くとかや、娑陀頑平幸助の三人は絶望の淵に沈み思案全く盡果し所なれば、慈悲深き義老徳翁の言葉を得、助け船に逢ひし心にて翁を三方より取圍み翁の言葉を聞かんとす。

翁は先づ娑陀を顧み『今より三十餘年前に貴方が有漢守雄と云ふ立派な陸軍士官と手を取りセントヨハネの寺へ來て斯く云長老の目の前で婚禮した事は能く覚えて居りますが、其後二十餘年を経てプロボン街道の寺へ貴女が頼て來た時に、私は貴女の身に何か深い目的を抱き夫が爲め憂身を棄して居る者だと思ひました』娑陀は涙ながらの聲にて『ハイ深い目的にも私し

は命に替て所夫を尋ねて居るのです』長老は此語を耳に入れざる振にて猶ほ言葉を續くれども娑陀の心を充分に察せしと見え聲を一入憐れげに曇らせたり『其後私しが此寺へ呼れて來ると間も無く貴女が又來ましたから愈々唯事では有るまいと思ひましたが、眞逆に罪深い政府の囚人を偷み出す大膽な計とは今日までも氣が附かずに居りました』娑陀『長老よ、其囚人が所夫守雄だと一と思ひ詰て居ました、政府の囚人を偷むので無く我が所夫を救ふのです、生涯離れては成らぬとて貴方が結び附けて呉れた所夫です』長老は思はず深き息を吐き『ア、可愛想な者だ夫ゆゑアノ囚人の死骸を墓から掘出したと云ふのですネ』娑陀『ハイ那の囚人を所夫で無いと何うして思ひませう、所夫が政府へ捕はれた時の事から其後の事を彼是と思ひ廻せば、鐵假面の囚人が守雄で無くては成らぬ筈です、アノ魔が淵で捕はれました』と云ひ來る、魔が淵の名を聞きて長老はビクリとし、エ魔が淵、夫では矢張り貴女方の思ふ通り、アノ鐵假面の囚人が貴女の所夫かも知れませぬ』娑陀『エ、エ、何と仰有る』長『イヤサ、所夫守雄殿では無いと云ふ事が明かに分りましたか』娑陀『ハイ分りましたから三人が途方に暮れて居りますので』長『何うして爾う分

りました」姿が全で違ひます、アノ囚人は骸骨の様な怪物です」長「怪物でも初からの怪物では有ますまい、彼れが怪い姿に成つたのは夫々の仔細ある事、貴女の所夫守雄殿とて姿が替らぬとは限りません、鐵假面の囚人も元は由緒ある陸軍士官で、愛せられた事も有り愛した事も有り、夫が一朝事を過ち魔が淵で捕へられたのだと申します、彼れの死際の言葉に聞きました」此説明しには好陀のみかは頑平も幸助も一様に驚きたり。

扱は扱は、見る影も無き彼の怪物、矢張り有藻守雄の變身なりしか、好陀は餘りに恐ろしき言葉聞き腦髓宛も旋風の吹く如く搔亂れ少しの間に過にし事悉く浮び來り、急がしく考へ廻すに、初めて好陀が彼の怪物に逢ひたるは魔が淵に事破れてより凡そ三月ほどの後にて、怪物は彼の秘密の手箱を掘出し居たり、彼れが我黨の大秘密とせし手箱の有所を知り居しのみか夜陰に忍びて掘出さんとせし事を見れば、成る程守雄に非ずとも云ふ能はず、殊に其時怪物が獨言云ひたる聲は何とやら初て聞く聲にあらで聞き事ある如くに思はれ「アノ聲は、アノ聲は」と自ら怪み耳を澄ませたる事も有り、守雄の聲ぞと迄は思はざりしも或は眞實に守雄の聲なり

しより、耳に慣れたる如く思はれし者なるにや、其次に彼れに逢ひたるは即ち好陀が櫛尾の爲に捕はれて穴倉の中に入られし時なり、其時彼れも其中に在り、好陀を見るより這來りて好陀の身に纏り附きたり、或は是れ守雄にして死せしと思ひし我が妻に計らずも逢ひし爲め斯くなせし者なる乎、好陀は夫是を思ひ來りて心全く轉倒し孰れとも決する能はず「エ、那の囚人も元は由緒ある陸軍士官で、魔が淵で捕はれたと云ひましたか」長「ハイ千六百七十二年三月廿八日の夜に捕はれたと云ました」左すれば愈々我が所夫なり、好陀は顔に兩手を當て泣ながら椅子を離れ、床の上に俯伏して唯だ「爾とは知らず、爾とは知らず」と是だけの聲を洩すのみ頑平も悲さに得堪へぬ如く「何うして先ア旦那様がアノ様なお姿にお成りなさった、コレ幸助最一度回生の藥を吞せて見て呉れ」と云ひつゝ倒れたる好陀を引起さんとす。

獨り幸助のみは怪しさに堪へざる面持にて「イヤ爾で無い、若しエ長老様、アノ囚人の本名は何と云ひました」長「サア其本名が私には合點が行きませぬ、過去帳へはマアチエルと書附ましたが、何でも陰謀に身を委ねる武士の事ゆゑ名前が幾個も有たのでせうか」幸「貴方へ當人が

言つた名前は若し帶里谷とは云ませぬか」長「イヤ爾は云はぬ何でも鳥居立夫と云ひました」鳥居立夫、鳥居立夫、扱こそ彼れは帶里谷なり。

魔が淵にて我黨を欺き畢生の大事を過たせたる彼の帶里谷の鳥居立夫め、佛國第一の美男子と云はれたる身が怪物とまで成下り、而も鐵假面を冠せられ仙頭麻有に引連れ居たるかと思へば心地好き事なれど、死して後まで猶ほ我々を欺くとは業の煮えたる次第ならずや、帶里谷と聞よりも娑陀は忽ち涙を留め頑平の手に寄りて起上れり。

百三十

鐵假面は有藻守雄に非ずして帶里谷の鳥居立夫なりし。去るにても彼れ帶里谷が女の如き美しき顔なりしに如何にして見るも恐ろしき怪物とはなりたるぞ、誠に合點の行かぬ次第にして且は其外にも猶ほ不審の廉許多あれば、頑平の手に寄りて立上りたる娑陀は夫れを問はんとする如く長老の顔を眺むるに、長老も其意を察してか氣持悪げに其眉を顰めし儘「此囚人の身の

上は聞くも恐ろしい程の次第です、彼れは死際に私へ話しましたが、魔ヶ淵で捕はれる前には美男子とも云はれる程の姿で有たが、一旦魔が淵で射落され死人同様に成つて居て再び此世へ出た時は最う見る影も無い醜い顔と爲り、見る人は誰でも彼れを怪物と思ひ、一目で逝去る程の事ゆゑ、彼れ詮方なく黒い頭巾に顔を隠して居たと云ひます」娑陀ですが何うして爾う顔形が頼れたのでせう。

長「夫が實に可哀な話で殆ど信じられぬ程不思議な次第ですよ、彼れは魔が淵を渡るとき一同より前の列に立て居た爲め第一に川の中へ射落され急流に推流されたと申ます、尤も水練の心得は有る故に直ぐ溺れる事も無く、必死と成つて泳いだけれど身體は既に彈丸の傷を負つて居る爲め思ふ様には泳がれもせず、凡そ一時間も流れた末ヤツと淺瀬の様な所へ這上り、徐ろくと川の岸へ蹙り寄ると、岸邊には蘆などが生茂り其下は宛で沼田とも云ふ様な泥の深い所で有たと云ふ事です、動ともすると足を一二尺も泥の中へ踏込のを、無理に引抜き／＼して五六町も歩んだけれど、未だ堅い土地へは出ず、其中に身體は全く疲れ果て、蘆の幹に取纏つた

儘打仆れて前後も知らぬ事に成つたのです、詰り魂が盡きて其の所へ氣絶したのでせう夫から後の事は常人更に覺えが無く、何時間或は又幾日間其所に倒れて居たか、又誰に救はれ何所へ連れて行かれたか夫も知す、幾日幾月の後に初めて生氣に歸つた時は眞ッ暗な所に寝かされて居りました、ハテな何所だらうと思ひ起上らうとすると頭が支て起られませんが、手を延して探り見れば右にも左にも板が有て、其板を叩いて見ると箱の音がします、初めは合點が行かなんだが能く／＼考へて見ると棺の中です、棺に入られて葬られたのです。

扱は我身は氣絶して居る間に死人と見違へられ、何所かの村役場の厄介と爲り早や地の底に埋められたかと斯う思ふて俄かに恐しく成りました、其儘居れば箱の中の空氣が盡ると共に其身は死ぬに極まつた譯、何うしても其身が地の底で猶だ死すに居ると云ふ事を外の人に知らせねば成らぬと思ひ、有る限りの聲を立て助けて呉れ掘出して呉れと叫びましたが何の甲斐も有ません、最う此儘に死を待つより外は無く、何うせ死ると極つた上は自分の身體が碎けるまでも此棺を叩き破らう、行倒れ人を埋めた事ゆゑ棺も必ず粗末で有らう、土も深くは埋めては有る

まいと、夫から一生懸命の力で足を縮めて下から棺の蓋を踏張り、其足を踏延しますと、思つたよりは雑作も無く何うやら斯うやら蓋だけは脱れました、夫と同時に上から土が落ちて来るかと思ひの外、土も落ねば足の先に降る者も無く、蓋は其儘棺の外へ音がして落しました、是で見ると成程棺へは入れられて居るが猶だ地の底へは埋られずに有のだなト、忽ち心が勇み立ち、棺から外へ躍り出しました、果して地の底では有ません、けれども其暗い事は棺の中と少しも異ならず、何の明も指しません、扱は穴倉の様な所で有らうか夫とも今が眞夜半で世界一體に暗いのだらふかと、茲で再び聲を立て頻に助けを呼びましたが返事の無いのは前の通り愈々怪さに堪へぬから、手を延して徐々と歩みながら其邊を探つて見ますと何うでせう。

左右兩方に壁の如く、累々と人の骨を積上げて有るのです、彼れは初て合點が行きました茲は畜骨洞と云ひ人の骨を埋る爲に昔から掘て有る穴の底です、自分は行倒れ人として棺の中へは入られたけれど、若し引取人でも有らうかとの用心より、本統には埋められず、棺の儘で借に畜骨洞の中へ入られて有るのだと思ひました、彼れホツと安心し畜骨洞ならば何所かに入口が有

るに違ひ無いと、夫から其の喉道の様な中を端の方まで歩んで行くと思はして端は石段になり、上へ登つて出る様に成つて居ます、其石段を上つて見ると、悲しや其所に戸が有つて堅く鎖した儘推せども突けども開きません、其筈です漫に出入の出来ぬ様、外から錠が卸て居るので、もの、彼れ茲に至り再び失望しました、棺は破る事が出来たが畜洞骨は到底破る事が出来ぬ、外から救ふて呉れる人が無ければ餓死する外はありません、斯う云ふ中にも誰か来れば好いがと彼れ石段に腰を掛けた儘待つて居ました、一日経つても一夜経つても来る人が有りません、誰も用事の無い所だから、爾う来る人の有る筈なく一月待つて好いか一年待つて好いか殆ど分らぬ事となりました、彼れ全く餓死するばかりです』

長老の説来る恐ろしき物語り、夜更け人定まる後と云ひ殊には墓原の隣地にして次の間には其人の死骸あり、娑陀は我が背後の邊より鬼氣の襲ひ来るを覺え、段々と頑平の傍に椅子を寄せたり。

百三十一

長老は言葉を嗣ぎ『立夫は石段に腰掛けた儘、待てども／＼人は来ず、其中に眠氣を催し何時間か眠つては覺め、覺めては又眠りなど一日だか二日だか自分で今考へても分らぬ程の時間が経ちました、其中に餓は益々募るばかり最う到底死ぬる事と諦めて居りましたが、忽ち外から戸を開く音が聞えます、到頭救ふて呉れる人が来たかと蹠踏く足を踏締めて待つ中に提灯提げた兩個の人が其石段を下つて来ました、嬉しやと立現はれますと兩個は立夫の顔を照して見て打驚き、アレ幽霊がと、一聲叫び其儘戸を締る事も忘れて逃げ出しました、立夫は唯だ戸の開いた嬉しさに這上つて外へ出で冷い風に其顔を吹かれ生返つた様な心持がして、先づ四邊を見廻しますと、猶だ日の暮れてより間も無い時刻で幾町か離れた所に燈火の影が見えます、甲弱い身體を引摺ながら其所まで行つて見ると可なり繁華な宿場の外れとも覺しき所で小綺麗な飲食店です、自分の囊衣に金の有無を考へ見る暇も無く、其店へ這入りますと、内に幾人の客

も給仕も居ましたが皆な一樣に幽霊が來たと叫び、逃げ散つてしまいました、扱は我身が畜骨洞から出て來た爲め夫で幽霊と間違ひられる事と思ひ、イヤ幽霊で無い生返つた人間だと言開いても聞く人が無く、止むを得ず立去らうと思ひましたが、食物の有るのを見ては仲々に我慢が仕切れず、皿に盛つて有る肉などを手當り次第に握み食ひ、漸く腹の出來たのを幸ひ、是より宿屋を尋ねんと先づ囊衣の裡を探りますに、魔ヶ淵を渡る前に持つて居た錢も紙入も何にも有りません、扱は己れを葬る入費に土地の役場で使つた者か、夫とも河の中へでも落たのか、執れにしても明日を待ち役場を尋ねて緩々と詮議を遂げ、其上茲へも拂ひに來やうと斯う思つて立去りましたが、何分身體の疲れが劇しく歩行も甚だ困難です、幸ひ少し離れた所に宿屋の看板が見ゆるから譯を話して明朝まで休ませて貰はうと又も其宿屋へ這入りますと茲でも同じく幽霊だと人は恐れて残らず逃げて仕舞ひました。

幾等墓場から出たものにもしろ斯うまで人の恐れるのは合點が行かぬ、我が姿に何か變つた所でも有るだらうかと、自分の身を見廻しますと、服は成る程泥まぶれで殆ど見る影も無い程

ですが、夫でも死人の纏ふ服では無く、ブルツセル府から魔ヶ淵まで着けて來た着物です、若しや我顔に泥でも着いて恐ろしく成つて居るか手の掌で顔を撫で、見ましたが彼れ自身も眞に驚きました、鼻も唇も皆無くなつて頬なども肉か骨か分らぬ様に成つて居ます、夫でも未だ充分には合點が行かず、更に四方を見廻しますと帳場の背後に一尺ほどの鏡が有ります、是は容が出入りの度に皆其姿を見る爲に主人が兼て備へて有るのだと思はれます、彼れ立寄つて其鏡に向ひますと初めて我が顔の類れた事が分りました、何故に斯う成つたか更に合點が行きませんが深く怪む暇も無く、唯我身の恐ろしさにアツと消魂げ彼れも亦其所から逃げ出しました、逃げて逃げて足も續かず力も盡き、我身が打倒れるまで逃げました、何所まで逃げ何所へ倒れたか夫も自分では知りません、只だ倒れたまゝ再び元氣の復るまで其所に居ますうちに夜も白々と明け初めました、自分は殆ど夢の様な心地がして再び顔を探りますに夢では無く全く我顔が類れたに違ひ無い、探れば探るに従つて益々姿の恐ろしさが分ります。顔ばかりで有らうかと手足を見れば之も所々類れて仕舞ひ、半ば骸骨の様に成つて居ます。

今まで美男子と人に云はれ我が容色を誇つて居た男だけに猶更ら失望も深く、何う考へても死ぬ外は有ません、此顔では何處へ行つたとて相手にする人は無く、乞食するにも出来ぬ譯、夫かとして外に身を支える工風も無し、是は必ず何かの酬ひで天が我身を賜殺しにする者だと思ひました、斯うなると畜骨洞の中で生返つたが恨めしく、アノ時に死で仕舞へば再び死ぬるにも及ばぬのにと聲を放つて泣きましたが泣いたとて致方が有ません、何うしても又と此世へ生返らぬ様更に死直す一方です、サア今度は何うして死なう、身を投る川は無し、首縊る繩も無し、殆ど死ぬにも死なれぬ場合、餓て死ぬるを待つばかりとなりました、彼れ其所へ身を横へ、天を睨んで餓死のを待て居ましたが、時の移るに連れ近傍に往來の人影も現れました。

見咎められては猶ほも死恥を晒す譯故、何しても河の有る所を尋ね行き身を投るに限ると思ひ、又もフラフラと起直りましたが、我顔の恐しさを思ひ見れば、人に見られるのが何より辛く、露出しては歩かれませんが、兎に角も包んで置かねば成らぬと思ひ、黒い外套の袖を裂取り、夫を其儘頭巾の様に袖口の細い所を節に結び、逆さにして我が顔へ被りました、爾して河の有る

所までと、棒切れを杖に拾ひ辿り／＼て行きました。

今から之を考へるに彼れの顔の類れたのは昔から例の無い事柄では有ませんが、彼れは一旦死人同様と爲り血の循環まで留つた爲め身體が徐々と腐り掛けたのです、腐つて半分骸骨に成つたけれど猶ほ何所にか生氣が有つた爲め、再び血が循環を初め、半分腐つたまゝで徐々と癒初め、大方癒した頃に息を吹返したのです。何でも彼れが魔が淵で死んでから畜骨洞で生返つたまで凡そ三十日ほど経て居た様です、斯様な例しは醫學者も稀には有る事だと申しますが、彼れは其の稀有の一例です』と云ひ來りて長老は息を繼ぎたり。

百三十二

鳥居立夫が怪物と爲り果て夫より鐵假面を被せらるゝ迄には、定めし一同の手掛と爲る如き事柄も有る可しと思へば三人も率しく鎮まり返りて聞居るに、長老は再び言葉を嗣ぎ『今思ふと鳥居立夫の生返つた土地は魔が淵より四里ばかり下手に當るトーデベル驛の近傍です、彼れ



は是等の地理も知す棒切の杖を力に半日ほど漂ひましたが漸く河の在る所へ達しました、是れが魔が淵の谷川とオニエル川の落合で居る邊だと思はれます、身を投げて死ぬる積りで茲まで来たが、愈々河の際まで来れば誰も心が鈍ります、彼れ色々考へ初めました、第一我身は政府の役人に頼まれて政府の爲に働き幾分の褒美まで約束されて居るのみかは、國家の秘密も知て居るが、此秘密を幸ひに政府へ賣附け取立て貰ふ事は出来まいか、何よりも大切な手箱の有る家まで知て居るゆゑ其手箱を掘出して政府まで持出せば必ず褒められるに違ひ無い、此様な工風が有るのに急いで死ぬるには及ばぬ事と、茲に了見を取直し夫からは乞食を仕て其手箱の隠し所まで行つた相です、行つて掘返して見ると既に誰か先廻りをして掘取た後の祭りで彼れは再び失望しましたが夫でも猶ほ我身を政府へ賣ると云ふ心は息まず、時の大政治家を尋ねて巴里へ上りました、所が其大政治家と云ふが、彼れの身を買はぬのみか却て彼れが國家の秘密を知て居るのを險呑な事と思ひ、鐵の假面を押被せてピネロルへ送つた相です」と最長き物語りも茲まで聞き、成るほど、怪物の次第だけは分りたれど、一同は殆ど失望の想ひに堪へず、鳥

居立夫は此通りなりとするも肝腎の有藻守雄は如何にしたるや、娑陀が我所夫なりと思ひ幸助頑平が我が主人なりと見て今が今まで骨折たる眞の鐵假面は如何にしたるや、或は其の眞の鐵假面が則ち此帶里谷にしてペローム鎮臺にて見し者も是なりしか。  
斯く思て娑陀は殆ど決する能はず唯だ取つ措つ迷ふのみなりしに、獨り幸助は落着きて前後を考へ「何所で何う間違つたか知りませんが、何しろ此帶里谷が初めからの鐵假面では有ません」と云ふ、頑平も同じ想ひか「爾だ己は初めからの事を親くは知らぬけれど、後でお前から聞取た所など考へ合すと何うしても此怪物は初めから一同の狙つて居る鐵假面とは違つて居る」娑陀も少し合點の行き初めし如く、「爾さ、爾でも思はねば、色々合點の行かぬ事が有る」と呟けり、幸助は又考へ「何うしても間違ひですよ、第一私と娑陀様が初めてペロームの鎮臺で鐵假面を偷視したのは魔が淵の翌日でせう」娑陀「爾だく」幸「其時には此怪物帶里谷はペロームの鎮臺へ捕はれて居無いです、蘆の中へ泥まぶれに倒れて居たのです、シテ見ればアノ鐵假面は此帶里谷で無い事は確かです、帶里谷で無ければ誰でせう、必ず守雄様です」頑「爾とも」

幸『魔が淵で二人の大將のうち一人は死に、一人は捕つたと私しが鎮臺の軍曹にも聞きましたが、帶里谷は其時死だと思はれた方で守雄様が捕まつた一人です』道理は明々白々なれば、娑陀は益々不審に想ひ『夫では其の守雄は何うしたのだらう』幸『お待成さいよ、アノ鐵假面は夫から巴里へ送られるまで私が一日も目を離さずに居ましたから、即ちバスチルへ入られたのも守雄様です、バスチルからピネロルへ送られると云ふ事を馬丁有井が櫓尾明から聞たのも守雄様です、其時も未だ帶里谷は怪物の姿で黒頭巾を冠つて巴里に居たのですから』と順を追ひ理を推して説明す其言葉に少しも間違ひの有る筈なし 娑『爾だく、私がピネロルの鎮臺へ住込み狙つて居た鐵假面も矢張り其守雄です、守雄が何時の間に消て仕舞ひ、此帶里谷と代つたで有らう、守雄は夫から何うせられ今何所に居るだらう、ア、分つた牢の中で死だのに違ひ無い、死で鎮臺の穴倉へ葬られて仕舞つたのだ』

何時の間にかは牢死して人知れず葬られしに非ずば、守雄の消えて帶里谷の永へ居し筈あらんや、娑陀は斯と思ひ込み、青き顔色を又益々青くして殆ど出す言葉も知らず、幸助も頑平も其の推量の尤もなるを見、如何にも其通りならんとは思へども、娑陀の悲しみを察し遣りて口には爾と言切り得ず、唯だ我顔色の心配氣なるを悟られまじと、無言にて首を垂れ暫し寂然りと鎮るに、長老は考へながら『イヤ、猶だ此外に鳥居立夫が私へ言立た事が有ります、事に由ると貴方がたの参考に成らふかも知れませんか』と又言出んとするは何事なるや。

百三十三

鐵假面、鐵假面彼れ確かに有藻守雄なりしも何時の間にか此怪物帶里谷と代りたり、何の時、何の場所にて代りたるぞ、長老若し之を知らずば誰か又之を知らんや。

幸助は首を差延べ『エ長老さん何かお心當りが有りますか』長老は危ふげに考へながら、『心當りと云ふ程でも有りませんが立夫が何か其の様な事を言ひましたよ』幸『何と云ひました、何と、エ何と』長『ピネロルの鎮臺に居るときに自分は仙頭から黒鳥と綽名されて居たが外に一人白鳥と綽名されて居る罪人が有たとて』頑平は傍より『ア、有ました兩個とも鐵の假面を被さ

れて居たか否やは知りませんが、何でも仙頭が私の居る室へ來ても白鳥が音なしとか黒鳥が達者だとか其様な事を折々云ました』長『所が立夫の話で聞くと其の白鳥と云ふのも矢張り鐵假面を被されて居たと見え、牢番が立夫を叱るに貴様ばかりで無い、己の預かる白鳥も同じ様に面を被せて有るけれど貴様の様に泣事を云はぬ、貴様も神妙にするが好いと云た相です、私は夫を聞き扱は立夫の外にも同じ程の不幸な人が有るかと思ひました、夫だから白鳥黒鳥の事を能く聞きました』左すれば此白鳥と云へる鐵假面こそ妙陀の所夫守雄なりしに相違なし 幸『夫から白鳥は何うしたと云ました』長『牢番が立夫へ話たには其白鳥はビネロルで死だと云ふ事です』妙『ヒエー那の守雄がビネロルで死ましたか』と妙陀は叫びて長老の手に纏れり、頑平も幸助も口にこそ出さねど失望の色顔に見えたり、長老は妙陀の背を撫ながら『併し是にも多少の疑ひが有る様です、立夫の話を聞くと牢番の仙頭は黒鳥の立夫よりも其白鳥を大切な囚人と思つて居た事と見え、白鳥の死だ時に立夫に向ひ、朝廷へ白鳥が死だと云つては都合が悪い故、黒鳥が死だと云ひお前を白鳥と見せて置く、今日からは白鳥の積りで居ると云附た爾です』

扱は守雄が死したるも守雄は大事の囚人ゆゑ朝廷へは猶ほ生存へる様に見せ白鳥と黒鳥とを摺り替へしものと知らる、左ればこそ一同も人の違ひしに心附ず帶里谷の鐵假面を初めよりの鐵假面とのみ思ひ今まで付き纏ひ居たるなれ 頭ア、仙頭と云ふ奴は夫くらのことを仕兼ねません』幸『爾う分つても守雄様が死んで仕舞つた後ならば最う仕方が無い』眞に守雄が死せしと分れば最早や誰が爲に身を勞せん、妙陀もガツクリ首を垂れ『最う私も守雄の後を追ひ此世を去ばかりです』と呟きたり 長『尤も立夫は死際に何も角も私へ懺悔しましたが、其時彼れは仙頭の仕方を憎いと思ひ其の摺替の事を斷然斷つたと申すけれども仙頭は様々に彼れを賺し之を承知すれば取扱ひを好くし牢中の苦みを成る可く弛めて遣ると云ひました、彼れ其言葉に考へ直し仙頭の意に逆つて此上酷く取扱れては堪らぬと思ひ終に從つたと云ふ事です』成る程是にて仙頭が其後益々用心深かりし譯も分りたり、彼れビネロルよりエクジールに移る時は夜の間に囚人を連れて行き、エクジールよりマガレット島に移る時も自ら鐵假面の乗物と共に寝ね僅の間も其傍を離れざりき、是れ全く我が心に咎められ若しも黒鳥を白鳥に仕立ある事露見し

ては大變なりと思ひしが爲なり。長夫からと云ふ者は年に一度づゝ政府へ宛て出す手紙も仙頭が白鳥の文句に作り黒鳥へは出させなだと云事です。夫に又萬事の取扱ひも手厚くなり少し風を引ても直に藥を呉れる様に成た相です。併し仙頭は萬一の露見を氣遣つてか其時まで黒鳥が塔の二階に居たのを穴倉の底へ移し、外面だけは一入嚴重に仕たと云ひます。

幸助は穴倉の底と云へる一言に耳を聳だて、「へえ其時から穴倉の底へ移したのですか夫は變です、全體何時頃の事せう」長何でも夫から間も無く仙頭がエクジールへ移されたから千六百八十一年の春の末だと云ひました。幸助は益々怪げに眉を顰め、「ハテナ八十一年の春の末、夫では頑平が有井に救はれたと同じ時だ、ナア頑平、頑爾だ、」幸お前は是を怪いとは思はぬか。頑何を。幸イヤサお前の救はれたのと白鳥の死だのが同じ頃だと云ふ事をサ。頑爾サ別に怪くは見えぬ様だが。幸イヤ待てよ己が其後で直に番兵を欺して聞たのに、頑平が逃た爲め鐵假面は穴倉へ移されたと云ふ事だつた、其の穴倉へ移されたのは白鳥の守雄様で無く黒鳥の帶里谷奴だぜ。頑爾だらう。幸爾うして見ると、ハテ變だ益々變だ。幸助は恰も良き狩犬が初

めて獸の足痕を嗅附けし如く勇み立ち、若しエ長老さん貴方は今し方是にも多小の疑ひがある様だと云はれましたが、其疑ひとは何の様な疑ひです若や白鳥の死だ事に就ての疑ひでは有ませんか」と急がしく問掛るは畢竟何等の所存なるや。

### 百三十四

白鳥の守雄既に死せしとせば何も彼も是までなり、望みも無し目的も無し、一同は殆ど海も山も一時に破れたる如くに落膽すれども、唯だ白鳥の死せし事に付き怪き所ありと云ふ長老の頼み少き言葉に慕なくも一縷の望みを繋ぎ、宛も大海に難船し死する外なき水夫等が天際に黒き物有るを認め是れ船か是れ雲かと疑ひ其見分の定まるまで暫し命を繋がんと云ふ如く、猶ほ長老の話を終りまで聞かんとするのみ。

長黒鳥立夫の言葉では其白鳥の死だと云ふ前夜に、何でも牢屋から逃去つた囚人が有る相です。是だけの言葉に幸助は「扱こそ」と云はぬばかりに其眼を光らせたり。長黒鳥は、夜る寐